

SOUNDINGS

NO.49

高柳俊一先生追悼号



サウンディングズ
英語英米文学会編

2023

SOUNDINGS

PUBLISHED BY

SOUNDINGS ENGLISH LITERARY ASSOCIATION

EDITORIAL BOARD

Kentaro Sugino Atsushi Ajiro

Hisao Ishizuka Megumi Kato

Osamu Maruyama Tetsuji Oda

Yuki Shimonaga

- * SOUNDINGS is an annual review devoted to scholarly studies of British and American literature, the English language and other related fields.
- * The annual is distributed to members of the Association. Annual membership dues are priced at ¥ 10,000, special, ¥ 6,000, regular, and ¥ 4,000, student. Single and back issues are priced at ¥ 1,000 each for Japan; ¥ 2,000 for all other countries (postage included).
- * Membership also includes subscription to the Association's annual *Newsletter* as well as the opportunity to participate in the annual conference.
- * The Editors welcome the members' manuscripts. They should conform to the guidelines in *The MLA Handbook for Writers of Research Papers*, latest edition and be sent in WORD and PDF formats, both without the author's name on the script, to the Office of the Association. The length of the manuscripts should be less than twenty pages of double-space type.
- * Correspondence regarding membership applications, subscription, address changes, editorial details and other matters should be sent to:

SOUNDINGS ENGLISH LITERARY ASSOCIATION

c/o Misa Ono, School of Marine Life Science,
Tokyo University of Marine Science and Technology
Konan 4-5-7, Minato-ku, Tokyo 108-8477, JAPAN
TEL: +81-3-5463-0649 FAX: +81-3-5463-0649
Email: soundings1969@gmail.com

SOUNDINGS

NO. 49

高柳俊一先生追悼号

2023

SOUNDINGS 第 49 号
高柳俊一先生追悼号

目 次

【憑憑論文】

- デイヴィッド・ジョーンズの『アナセマタ』 —— カトリック文学の精髓
…………… 野谷 啓二 …… 5

【投稿論文】

- The Image of the Hall in Heaven in Old English Vernacular Verse
…………… Mariko TAKAYAMA …… 31

- Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in *The Peterborough Chronicle* 1122-1154."
…………… Daisuke MIYABAYASHI …… 51

- くり返される『ダロウェイ夫人』 —— 『めぐりあう時間たち』とフィリップ・
グラスによるミニマリスト的サウンドトラック
…………… 小室龍之介 …… 73

【書籍紹介】

- 舟川一彦著『ウォルター・ペイターのギリシア研究』（金星堂、2023年）
…………… 町本 亮大 …… 95

《高柳俊一教授追悼特集》

- 「高柳俊一先生追悼号」刊行にあたって …… 下永 裕基 …… 109
弔辞 …… 舟川 一彦 …… 113

| | | |
|--------------------------------|-------|-----|
| 水魚の交わりであったような… | 藤井 哲 | 115 |
| 故高柳俊一先生を偲んで | 中山 理 | 118 |
| ネイティヴ以上——高柳先生とマシー先生 | 巽 孝之 | 120 |
| 敬愛する高柳俊一先生へ | 野谷 啓二 | 125 |
| 高柳先生とピューリタン研究 | 増井志津代 | 130 |
| 恩師高柳俊一先生のこと | 飯野 友幸 | 133 |
| T・S・エリオットと高柳俊一先生 | 佐藤 亨 | 136 |
| 吾輩はワニである——高柳先生の思い出 | 石塚 久郎 | 139 |
| 高柳俊一先生へのご恩返し | 加藤めぐみ | 142 |
| 「私はハッピーです。」 | 下楠 昌哉 | 149 |
| 高柳先生と「愛」 | 山口 和彦 | 152 |
| Transevaluation and Apocalypse | 深谷 公宣 | 156 |

デイヴィッド・ジョーンズの『アナセマタ』 ——カトリック文学の精髓——

“the Mass, where ‘sign’ & ‘thing signified’ are said to be one” (Blissett 45-6)

野谷 啓二

はじめに

本稿の目的はまずキリスト教文学、とりわけカトリック文学の特質を明らかにし、その上で、その特徴がデイヴィッド・ジョーンズ (David Jones) の『アナセマタ』 (*The Anathemata*) にどのように現れているかを確認することである。世俗化した西洋近代において、カトリック教会の秘跡とモダニスト文学理論が合致するとする、ジョーンズの「発見」に注目する。

ジョーンズといえば本邦ではほとんど無名に近く、かろうじて『括弧の中で』 (*In Parenthesis*) によって第一次世界大戦の「戦争詩人」として知られているのかもしれない。¹ 英語圏においてすら、「失われた偉大なモダニスト」 (Dilworth, *Jones* xi) とされ、十分に評価されていないという状況である。『アナセマタ』は八部構成、詩人自身による「序文」と詳細な脚注を含め、全体で243ページに及ぶ長編詩である。モダニズム文学の例にもれず、多方面の学問的知識に依拠している。この詩は文化人類学、歴史学、神話学、キリスト教神学、地質学、進化学に基づき、西洋文明・文化、さらには造山活動、氷河の形成、生物の登場など自然界の変動も扱う。相当な努力を傾注しても簡単には理解が進まない作品である。しかしジョーンズ研究の第一人者に、「『アナセマタ』を理解しなければジョーンズの詩人としての偉大さが分ならず、その結果、モダニズム文学の見取り図を見誤ってしまう」 (Dilworth, *Reading* 7)、と言われれば臆することなく挑戦しなければならないだろう。

確かに、自然と人間のすべてのダイナミズムの中にジョーンズは何かを見ようとしている。それは何か。

本論では第一部“RITE AND FORE-TIME”（「儀礼と先史」）を中心に読みたい²。理由は、本稿の目的であるカトリック性が最も如実に表れているからである。ここにはジョーンズの創作の背景にある問題意識——西洋近代が「荒地」化した原因を文明の「有用性」「utile」偏重に求め、豊饒化の手立てとして「無償性」「gratuity」とのバランスを回復させる必要がある——が明瞭である。人類史の全体に、そして神の天地創造にも見られる無償の祭儀に焦点が当てられ、本来の人間性に立ち返ることが求められる。有用性、すなわち第一義的使用目的を超えるものがアートであり、真のアートは無償性の中に自らを現し、その範型は祭儀に、なかでもキリスト・イエスによる聖体の制定に存する、このようなジョーンズの思考が浮き彫りにされているからである。キリスト教最大のドラマは、神のことがばが受肉（托身）し、その体が聖体（The Eucharist）として時の終わりまで継続すると信じるところにある。二千年前にゴルゴタの丘で一回限り起った救いの業が、アナムネーシスとして現在化されるのは、イエスによって制定された聖体の秘跡というアートの賜物なのである。『アナセマタ』の核心はこの聖体の神秘である。

1. カトリック文学とは

まず世俗文学とキリスト教文学との違い、そしてカトリック文学の特徴について考察したい。西洋近代思想の世俗化の展開は、一般にルネサンスの西洋古典（それは中世のキリスト教絶対主義の観点からは異教の産物であり、人間中心的なものに映る）の復活を契機に始まり、16世紀の宗教改革と17世紀の宗教革命を経て、18世紀の啓蒙主義によって本格化したと考えられる。理神論では神は完璧な時計職人に譬えられ、欠陥なき世界の創造後は、人間世界に介入する必要性はないとされた。神は歴史の表舞台から姿を消す。いわゆる「暇な神」（deus otiosus）の現出である。

当然文学もこの変化の影響を受け、人間と人間、人間と社会、人間と自然との関係、葛藤を描くようになる。この「自然」（大文字のNature）には汎神論的な神の残像があるが、正統キリスト教の神からは相当かけ離れている。このような文学には「縦軸の意識」が希薄である。ここでいう縦軸とは、神による人間の時間・世界への介入を意味する。第一義的には神の一人子の受

肉がそれであり、人間の時間を表象する横軸と交差し、十字架形をなす。この神の縦軸と人間の横軸の交差を「十字架モデル」と称してもいいだろう。モダニズム詩人の代表でありながら精神的にはアンチモダンの相貌が際立つ T.S. エリオットの特徴は、この十字架モデルの強烈さ、モダンな時代にアンチモダンに見える信仰を生きる相剋の的確な描写にある。人間的時空の横軸に超自然的な神の縦軸が交差する、その一点 “The point of intersection of the timeless / With time” のドラマを追及するところに醍醐味がある。縦軸は人間の横軸に働く摂理 (Providence) であり、具体的には神からの呼びかけ・召命 (calling) として意識化される。当然、これは人間側の応答を呼び起こし、縦軸は上下運動のモーメントとして理解される。キリスト教文学と世俗文学との最大の違いは、後者には縦軸がないか、その意識がきわめて薄いことにある。³

それではキリスト教文学の中でも、カトリック文学の特質とは何であろうか。それはたんに言って、七つの秘跡の決定的重要性が提示されていることであろう。プロテスタンティズムの特徴は聖書の重用視と言えらる。宗教改革運動の原動力の一つは、識字率の画期的上昇に伴い都市の有産階級が、神のことばである聖書を、中世キリスト教世界のラテン語翻訳ではなくルネサンスを背景に整備された原典で読み (ad fontes)、それを各地域語に翻訳し共有するという文化運動であった。ロンドンのウェストミンスター宮殿、つまり英国国会議事堂の正面中庭にはオリヴァー・クロムウェルの立像がある。像自体は、19 世紀後半にカトリック再興運動が盛んになったとき、それを抑える反カトリックの象徴として建立されたものだ。議会制擁護の英雄としてのほか、⁴ 外国勢力としてのカトリシズムを牽制する意味合いがアイルランドを蹂躪した彼に持たせられているのだ。クロムウェルの右手には剣が、左手には聖書がある。ここで思い出されるのは、青山学院大学正門のジョン・ウェズリー像である。メソディズムの創始者である彼の左手にもやはり聖書が握られている。聖書がプロテスタンティズムにとってどれほど大事か、二つの像はよく示している。

では仮にカトリックの偉人が本を持つとしたら何を持つであろうか。それはミサ典書 (missal) であるに違いない。カトリック教会は宗教改革に対抗して開かれたトリエント公会議以降、七つに確定された秘跡 (Sacrament) を生きることを信仰の中心にしてきた。すなわち、洗礼、堅信、叙階、婚姻、

病者の塗油（終油）、ゆるし（告解）、聖体である。では秘跡とは何か。『キリスト教百科事典』によれば、それは「聖寵を施すための記号」で「たんなる象徴ではなく効力を与える力を持つ」⁵ 神の恩寵が信者に受け渡される、目に見える「道具因（causa instrumentalis）」である。その効力は人効（ex opere operantis）ではなく事効的（ex opere operato）に生じる（1392-1393）。つまり秘跡を執行する人間とそれを受ける人間、両者の善悪にかかわらず、秘跡そのものに神の恩恵を施す力があるというのである。

神の愛の表れである秘跡のうち、洗礼から病者の塗油までの五つは、印号（character = 消えない資格）を与えるので一回限りであり、最後の二つのみが繰り返し受けることができる。なかでも聖体の秘跡の重要性は特別である。文化史家クリストファー・ドーソン（Christopher Dawson）とともに戦間期イングランドのカトリック知識人を代表し、エリオット、エリック・ギル（Eric Gill）、ジョーンズらとも交流したイエズス会員マーティン・ダーシー（Martin D'Arcy）は、「すべてのカトリック者はミサがカトリック礼拝の^{セントービース}中核であるを知っている」（v）と述べている。ミサが最重要なのは聖体が信者に与えられるからだ。パンとぶどう酒が司祭の聖別（consecration）によって、その偶有性（accident）を残しながらも実体（substance）は、キリストの体と血に変化（transubstantiation）する。信者はパンとぶどう酒の形色（species）のもと、実体変化したキリストの聖体を拝領するのである。

聖体の秘跡は、十字架刑に処せられる前夜の「最後の晩餐」——ユダヤ教のきわめて重要な出エジプトを記念する^{パスオーバー}過ぎ越しの祭儀——を弟子たちとともに祝った際に、イエス自身が定めた。「皆、これを取って食べなさい。これはあなた方のために渡されるわたしの体である」（マタイ 26：26-28）。これは晩餐の host（主人）が hostia（聖体）となった瞬間であり、ここにユダヤ教からキリスト教への変化の第一歩を見ることができる。だが本論との関連で重要なのは、人間の罪を贖うために「神の小羊」（Agnus Dei）として自らを捧げるイエスの行為が、最後の晩餐で自身を供物（oblation）にする秘儀に始まり、カルヴァリオの丘でユダヤ体制派とローマ帝国官憲によって実際に生贄（immolation）となることで完結する、一連の過程だということである。信者がイエスの受難の実りを味わい、キリストとともにあるようにと、イエスは聖体の祭儀を制定した（D'Arcy 74）。司祭としてのイエスは、パンとぶどう酒のしるしを使って自己を奉獻する祭儀を、翌日十字架上で生贄の

死を死ぬことを先取りして、その死とその実りを世の終わりまで記念するために定めた。そしてその先にはもちろん復活のドラマがある。だからミサでは、復活したイエスの受難を感謝と喜びをもって聖体の秘跡の制定から思い起こし、司祭はイエスが命じたとおり、パンとぶどう酒を毎日十字架である祭壇の上で聖化する。歴史的な受難とミサとの間の違いは「哀しみと喜びの違い」(D'Arcy 81) だけなのである。

聖体の秘跡をダーシーの説明にしたがって見てきたが、実はダーシーはフランスのイエズス会員であるモーリス・ド・ラ・タイユ (Maurice de la Taille) の見解を敷衍しているのである (D'Arcy vii)。最後の晩餐での犠牲は、歴史上一回限り起った十字架上の血の出る受難そのものではないけれども、それを血が出ない形 (representative—symbolical—sacramental—mystical) (de la Taille 231) で表している。カトリック者にとって聖体の秘跡の重要性は、新しいマナとしてのキリストの体を拝領することにあるが、近代の改革教会からは批判の対象となる。実体変化が問題とされたのだ。坂口昂吉の説得力ある指摘は傾聴に値する。

古代に発し中世に確立した実体変化説から、近代における共在説、象徴説、受領者主義への変遷は、宗教的信仰が客観主義から主観主義へ変化していく移行過程を示すものである。それはまた宗教が典礼・儀式を尊重する立場から、主体的信仰のみを重んじる態度へ変化していくのを端的に示しているのである。中世から近代への重大な時代精神の転換を把握する意味で、この聖体観の変化に注目するのは必須のことである (167)。

カトリシズムの特徴は、神との関わりにおいて、秘跡を中心とする客観主義であることが理解されよう。その中でも極めて重要なのが聖体である。聖体の秘跡によって、最後の晩餐からゴルゴタにおける受難、死に打ち勝ち復活に繋がる救いの業が、何度も繰り返され「いま・ここで」再現前化 (re-presentation) されるのである。カトリック信仰は、この「アナムネシス」(anamnesis) を保障する使徒伝来の秘跡で成り立っており、「使徒継承性」(Apostolic succession) は教会に保存されている。⁷

では、「アナムネシス」とは何か。御受難会司祭、国井健宏師による『新

カトリック大事典』の「記念」の項を参照しよう。「アナムネーシス（記念、想起、記憶して行うこと）は、単に過去の出来事を主観的に思い起こすことだけではなく、想起をとおして、偉大な救いの業を現在の恵みの働きとして、現在化するものである」(II 166)。これに T.S. エリオットそして誰よりジョーンズに高く評価されたアングロ・カトリックのグレゴリー・ディックス (Gregory Dix) の言葉を重ねてみよう。

It [anamnesis] is not quite easy to represent accurately in English, words like 'remembrance' or 'memorial' having for us a connotation of something *absent* which is only mentally recollected. But in the scriptures of both the Old and New Testament *anamnesis* and the cognate verb have a sense of 'recalling' or 're-presenting' before God an event in the past that it becomes *here and now operative by its effects*. (Dix 161)

過去の出来事が再現前化され、「いま・ここで」その効験が発揮される。いわば過去が現在に存在し続けるのである。救世主イエスが、聖体の秘跡によって、過去にも現在にも未来にも、存在し続ける、このきわめてカトリック的な信仰が、ジョーンズの詩にも結晶するのである。

聖体の秘跡が持つ「過去と現在の共時性」という特質こそが『アナセマタ』の中心をなす。しかしながらジョーンズが聖体にそれほどまでに魅了されたのは信仰心からばかりではない。何よりもまず、それが「もの」（パンとぶどう酒）であるにもかかわらず実体としてはそれ以外のものになっているという神秘と、making other というモダニスト詩学の根底にある理念が見事に一致しているからだ。秘跡とアート、司祭とアーティストは類比関係にあるのである。作品は既存の「もの」を聖化し、新しく別の「もの」にする (Domestic 82)。⁸ 救済とアートとしてのもの作りは、カトリック信仰の秘跡神学によって共鳴するのである。エズラ・パウンド (Ezra Pound) は“make it new”と主張したが、ジョーンズは“making this thing other”を自身の詩学の骨格としたのである。

2. ジョーンズの問題意識

「はじめに」で述べたように、ジョーンズの認知度はモダニズム文学研究者の間でも高くはない。研究対象がパウンド、ジョイス、エリオットら、いわゆる盛期モダニズム文学に偏している印象はぬぐえない。ところが最近、第二次世界大戦後の後期モダニズム詩を、神学的モダニズムとしてキリスト教神学との関連で論じる動きが出てきた。⁹ 長きにわたって批評家たちは、モダニズム文学を世俗的なものとみなしてきたが、今や『アナセマタ』のような神学と詩学とを協働・共振させた作品を研究する時代を迎えたのである。

神学的モダニストに共通するのは世俗化に対する危機意識である。世俗化は、人間を自由にするどころか、人間を永遠から切り離し、無意味な歴史的時間に放擲することを意味した。したがって人間性の喪失を招くものだった。歴史的時間が存在論的にも目的論的にも根拠を失い、ただ漂流する。このような事態を防ぐには、歴史が聖化される契機としての受肉、そして受難と復活のように、俗と聖の結合、歴史と永遠の出会い、すなわち縦軸の意識化が不可欠である。19世紀に影響力を持ち始めた自由主義プロテスタンティズムでは、神は超越性を失い、人間化されて、結果的に信仰は内面的宗教感情と社会的道徳規範に重点が置かれるようになった。戦間期から始まる神学的モダニズム文学の担い手は、こうした潮流に対する不満を根底において共有し、心情によって安易に揺るがない確固たる教義を求めた。

ジョーンズはエリオットと同じように、西洋近代社会に「荒地」を見ていた。彼がその明白な兆候とするのは、ものを作るという人間の行為に本来あるべき有用性と無償性のバランスが崩れ、前者が極めて優位になっていることである。このような状況下では、人間が美から切り離され、非人間化され、孤独化され、ひいては疎外されるのも無理もない。ものをその機能のみを目的に、効率よく、素材も考慮せずに作れば、金銭的利益は上がるだろうが、それでは人間性に不可欠なアートが死んでしまう。¹⁰

そもそもジョーンズは、人間は誰しも「しるしを作る者」であり、すべての人間にアーティストの性質が備わっている、と考えていた。「アートは人間の、唯一没目的の活動である」“Art is the sole intransitive activity of man” (Jones, *Epoch* 149)。何かの目的のためだけに作るというのではなく、ものの有用性から離れる。没目的な活動には必ず無償性がある。「人間の本性はものを作ることであり、作られるものには、日常の生活に必要というだけでな

く、それ以外のものの、しるしとなるものが必ず含まれる」(Ibid 150)。無償性は伝統的に宗教儀礼やアートと結びついているので、有用性が重要視されれば宗教、アートが軽視されることになる (Dilworth, *Reading* 4)。あまり意識されていないが、社会の荒地的状況はエリオットの 1922 年より、ジョーンズの『アナセマタ』が出版された 1952 年の方がさらに悪化していた (そして現在はもっと悪化している)。「ジョーンズの神学では、天地創造は神によって無償で行われた」のであり、「アーティストはこの創造を自身の作品で真似る」ものなのである (Corcoran 19-20)。創造したものをすべてを良しとされた神の創造原理を範とするジョーンズにとって、「人間の能力が創造であり崇拜でもあるカルチャーを犠牲にして、利益と権力を得るための技術的達成に向けられるとき、それは罪となる」(Hague, *Commentary* 2)。

ジョーンズが「もの」を作る人間に強くこだわるのは、彼が元来、エリック・ギルと共に生活し、クラフトにつよい関心を抱き、版画や彫刻といった造型に才能を発揮したからであろう。ジョーンズはギルらの私有財産配分主義 (Distributism) の実践活動であるディッチリングの共同体に参加し、ギルの家族とともにウェールズ、バッキンガムシャーと場所を変えながら工房生活を実践した。しかもドミニコ会第三会員 (tertiary) としてである。彼は詩人である前に、彫刻、版画、絵画の道に生きていた。資本家の利益のために大量にものを生産する、分業による効率至上の生産方式は人間性を奪うものという考えは、トマス・アクィナスの、そしてその背景にあるアリストテレス哲学のアルス (ars) 理解から強い影響を受けている。¹¹

しかし、ジョーンズは彼らの運動に先行した 19 世紀後半のウィリアム・モリスらによるアーツ・アンド・クラフツ運動にも批判的であり、私有財産配分主義の理想の限界をも認識していた。「シンプルな生活をし、ものを作りクラフトを実践するのは大変結構だが ... 十分な私有財産もクラフトもないパーミンガムの実に多くの人々はどうなる」(Blissett 110)。質の高いものは高価になり豊かな人々に消費されるだけで、理想の生活をする手段を欠く都市部の住人たちは、非人間化される過程に完全に組み込まれており、彼らの疎外を止めることはほぼ不可能なのだ。確かに帰農運動 (back-to-the-land movement) があった。しかしそれに参加できるのは一部の知識階級に限られるという現実を直視していたのである。

しかしこのような状況でも、ジョーンズは絶望しない。むしろ、しるしを

作るアートを秘跡と結合させることで、荒地の中にも救いのヴィジョンを見ようとする。一般の人間もアーティストになれる、否、人間たる者はアーティストであることから免れられないのだ。この事実を雄弁に語る「スーザンの誕生ケーキ」の説明を読もう。スーザンのために焼かれたケーキはアート作品である。なぜかと言えば、ケーキはケーキであることを超え、愛情のしるしとして提示され、彼女の誕生を過去から呼び起こし、いまここに再現前化し、また将来の誕生日を待ち望む、無償のものとして作られた愛のしるしとなっているからだ。「人間は秘跡から切っても切れない存在であり、人間が作るものには秘跡の特質がある」(Jones, *Epoch* 155)。

ここで詩人、アーティストの責任は「正当なしるしを提示すること」“He has ... to lift up valid signs; that is his specific task” (*Anthemata*, Preface 23)にある。その使命が果たせないと、深刻な問題として把握される。ジョーンズが無償でものを作る者 (poeta) として直面する最大の課題は、しるしが正当かどうか、それが手に入るかどうかということである。彼は「木」(wood) からどれだけ「十字架」が想起されるか、という例をあげ、キリスト教信仰のあるなしにかかわらず、その可能性がない場合、文化内で共有されるミュトス (mythus) が機能していない危機だという (Ibid)。1920年代後半から30年代前半にかけて、ジョーンズが属していたトム・バーンズ (Tom Burns) ¹² を中心とするカトリック知識人グループは、社会にあるべき「共通の背景」(common background) の欠如を感じ取り、それを The Break と名づけていた (Preface 15-16)。『アナセマタ』の注のおびたしさは類を見ない。これはジョーンズが社会に文化的共有財が欠けていると判断していたことを示している。この分断がアーティストの深刻な問題となるのは、しるしが何を指し示しているのか伝わらないため、ものが持つ秘跡性が事実上無意味化するからである。

このような困難な状況で、ジョーンズは『アナセマタ』を書いた。ジョーンズの真摯な問いは「効果的なしるしの材料として何が手に入り、何が正当か」(25)であった。しかし彼は、しるしとして共有される素材が見つげにくくなっているからといって、これは「知っているべきだ、感じるように努めよう」などと急いではいけないう。「永遠の相の下」(*sub specie aeternitatis*) で見ることができるのは、ただ実際に愛し知っているものだけだから」(24)だ。永遠性を獲得できるのは「いま」「ここで」、真の意味で

経験し、知覚するものなのである。キャスリーン・レイン (Kathleen Raine) に言わせれば、「いま・ここに」の現在は、「すべての過去と未来との関係性において、私たちが立つ場」であり、「過去と未来が出会い、実体化され、受肉される場」なのである (Raine 10)。

しるしが通じなくなる断絶を生きる者は「内なる傷」“inward wound”を負っている。¹³ ジョーンズは自分自身の内なるしるしを求めるほかない。彼を形作っているのは「西洋キリスト教のもの」“the Western Christian *res*”である。それはさらにグレートブリテンの住人であること、「ロンドン市民、ウェールズとイングランド人の親を持ち、プロテスタントして育ち、カトリック信仰を受け容れたこと」(Preface 11) によって限定されている。『アナセマタ』の素材は詩人の実体を構成する「もの」であり、それらはすべて西洋キリスト教の *res* で、ジョーンズが歴史的過去から受け継いだものなのだ。彼はその遺産を ‘deposits’ という言葉で表現する (Ibid 14)。これはエリオットが「25歳を過ぎてても詩人であるために、労力をかけて身に着ける必要がある」と若き日に説いた伝統と同じと言ってもよいであろう。確かにジョーンズは、西洋キリスト教世界の「ローマのブリテン」¹⁴ としてのウェールズの ‘deposits’ を拾い上げようとして、恐ろしい博識の持ち主となった。しかし、彼が文化的断絶として認知した危機をいかにすれば打破できるかという深刻な問題は、解消されないまま残るように思われる。

3. 『アナセマタ』を読む

ここからは『アナセマタ』の第一部“RITE AND FORE-TIME”（「儀礼と先史」）を読んでいこう。上述の解決困難な問題にジョーンズはどのように挑んだのであろうか。この長編詩は1938年から1945年まで執筆され、出版前年の51年まで断続的に改訂された (Preface 15)。ジョーンズ自身、「自分が手掛けた作品のうちで最高のもの」であり『括弧の中で』の「50倍の価値がある」と評価している (Dilworth, Jones 271)。

『アナセマタ』はジョーンズを成立させている「もの」、いわば彼の中にある“deposits”をめぐる長編詩である。実際に読んでみると多くの断片で構成されていることがわかる。ジョーンズはこの断片性を「ミサ中の想念」“trains of distraction and inadvertence” (Preface 31) であると説明している。別の表現で ‘meanderings’ (33) だとも言っている。光のスピードはものすご

く速いが、「思考の敏捷性“agility of thought”に比すれば無に等しい」(32)ので瞬時に世界を旅し、歴史の中を移動でき、その一つひとつを「いま・ここに」現在化できるというわけである。

断片性はモダニズムの特徴であり、それは伝統が解体し継続した一体的表現が適合しなくなった現実を見れば必然と言えよう。それでも何かその断片を統合するテーマがあるはずだ。これから読もうとする第一部は、「無償のしるしの作成である」聖体の秘跡が中心であり、それに歴史的に先行する秘儀的なものの全体、さらには「作る」という観点から、地球の生成、氷河の活動なども組み入れられている。

耳慣れないタイトルは元々ギリシア語で、新約聖書で否定的にしか使われない同系の語「アナセマ」とは真逆の「愛しいもの」「devoted things”を意味する(Preface 27-29)。この原義にジョーンズはつぎの意味を読み込む。「有用性を超え、無償性を帯びるもの」、「何らかのあり方でそれが意味しているもの自体でもあるしるし」、「神々のために、取り分けられ、捧げられるもの」(28-29)。この定義に、聖体に実体変化するパンとぶどう酒が含まれることは明白である。人類史上最大のアナセマタはイエスによる自身の奉獻ということになる。

この詩の書き出し部分は、ミサに出席したジョーンズが祭壇で行われていることを目撃し、さまざまな思いが展開し、それが断想として記録され始める形になっている。

We already and first of all discern him making this thing
other. His groping syntax, if we attend, already shapes:
ADSCRIPTAM, RATAM, RATIONABILEM ... and by pre-
application and for *them*, under modes and patterns altogether
theirs, the holy and venerable hands lift up an efficacious
sign. (49)

一行目の“him”はコンテキストから司祭であることがわかる。すでにミサは進行し、言葉の典礼が終わって聖変化の場面である。司祭はパンを取り、それをパン以外のものに変化させている。実体変化が完了すると、それは「効能を有するしるし」となり、会衆に向かって高く顕示される。罪を贖うため

に生贄となった神の小羊の肉、キリストの効験ある聖体は「そこにあって、そのもの自体というより、何かそれ以外のもの」となっている。“set apart,” “make other,” “obliterate” は『アナセマタ』の鍵語であるが、取り分けられたパンとぶどう酒が聖変化後に贖罪の生贄として神に捧げられる。この神秘を繰り返してきた「アナムネーシス」であるミサの、その最重要の祭儀が始まったのだ。この儀礼は戦勝のアブラハムを迎えたメルキゼデクに始まり、最後の晩餐でイエスによって、「先に適用」“pre-application”された方式で行われる（創世記 14 章）。聖変化のことばはラテン語である。周知のように、1965 年に終わった第二ヴァティカン公会議以降のミサは通常現地語で行われるが、時代はそれ以前である。以前のミサ典書の訳から引用すれば、「神よ、願わくは、この捧げ物を祝し、嘉納し、全く認め、真の価値あるいけにえと成し給え。これが、我らの為に、御身の最愛の御子、我らの主イエズス・キリストの御体、御血とならんことを」となる。“them” はパンとぶどう酒の祭儀を司り、それに参加してきた人々全員であろう。

目に見えないものは「しるし」で表される。秘跡もまた目に見えない神の恩恵をしるし（ある形＝rite）で表したものだ。エピグラフのことば「しるしと、それが表しているものが一つ」である聖体の秘跡の特質こそ、ジョーンズが人間本来のもの作り、アートに存在する無償性として発見したものであった。秘跡とアートが重なり合う。ところが続けて、

These, the sagging end and chapter's close, standing
humbly before the tables spread, in the apsidal houses, who
intend life:

between the sterile ornaments
under the pasteboard baldachins
as, in the young-time, in the sap-years:
between the living floriations
under the leaping arches. (49)

と、ジョーンズの心には一見して否定的な思いが去来する。まず“These”（ミサを司式する現在の司祭たち）の時代を「弛んだ端であり章末」だと認識する。対照的なのは‘as’以下の「若い時代、盛期の時代」とされる中世だろう。教

会堂は、かつては「躍動する天井の生きた花模様の装飾」であったが、今は「ボール紙の天蓋の不毛の飾り」となってアートの面影はない。しかしながら、彼らはそれでもミサをあげ続け、‘intend life’「いのちを意図する」ことに変わりがない。彼らはまたつぎのように表現される。

These rear-guard details in their quaint attire, heedless of
incongruity, unconscious that the flanks are turned and all
connecting files withdrawn or liquidated—that dead symbols
litter to the base of the cult-stone, that the stem by the palled
stone is thirsty, that the stream is very low.

The utile infiltration nowhere held
creeps vestibule
is already at the closed lattices, is coming through each door.
(50)

現代の司祭は元軍人のジョーンズらしい表現で「奇異な服を着た後衛特殊部隊」とされる。彼らは「(ミサを祝う自分と世間との) 不調和に無頓着で、側面が崩され、縦列のすべてが退却もしくは全滅したこと、死んだ象徴が祭儀の石壇の下に散らばり、覆いをかけられた祭壇の石の脚は渴き、水の流れはととも低くなっていることに気がついていない」。水不足のメタファーは荒地のイメージを呼び覚ます。詩人は荒地化の原因を「有用性の侵食」に求めていた。現代の荒地でミサを捧げる司祭の姿を想い描く。

The cult-man stands alone in Pellam’s land: more precariously
than he knows he guards the *signa’*...
...
This man, so late in time, curiously surviving, ... shows every day
in his hand the salted cake given for this *gens* to savour all the
gentes.’ (50)

ペラムとは自注にあるとおり、トマス・マロリー (Thomas Malory) の『アー

サーの死』に登場する荒地の王であり、この詩が聖杯伝説に通じることを示す。中世盛期からずっと遅れた現代の荒地に奇妙にも生き残る司祭は「しるし」を護っているが、その務めは危うくなっている。それでも司祭は一日一回ミサを立てるのである。ラテン語の“gentes”は“gens” (race) の複数形で、神と特別な契約を結んだ選民ユダヤから他のすべての民族に、救いが広まることを「味付ける」“savour”と表現されている。ジョーンズの自注は、ローマのウェスタの祭儀で使われるスペルト小麦と塩で出来た“mola salsa”に言及しており、その形は聖体と同じである。塩には「地の塩」の意味も込められているのだろう。“mola”には“immolation”と語源的に関連がある。ウェスタの儀礼は異教のものであるが、ジョーンズは人間性と深く結びついた普遍的儀礼に関心があり、時代と宗教の違いを自在に超えて行く。

ミサの描写は聖体の秘跡が定められた最後の晩餐の部屋へと移行する。

Within the railed tumulus
he sings high and he sings low.

In a low voice
as one who speaks
where a few are, gathered in high-room
and one, gone out.

There's conspiracy here:
Here is birthday and anniversary, if there's continuity
here, there's a new beginning. (51)

最初の引用箇所で、教会の後陣「アプスで」“in the apsidal houses”と表現された場所は、ここでは「柵が立てられた古墳」となっている。祭壇と信者席の間は柵で仕切られ、また自注にあるとおり、カトリックの教会の祭壇の下には、その教会ゆかりの聖人の聖遺物が「埋葬」されなければならないからだ。司祭はイエスが過ぎ越しの祭りを祝った“upper room”（詩人の想いは時空を超えてエルサレムの高間“cenacle”）へと向かっている。詩では“high-room”となっている。「一人出て行った」のはユダである。“conspiracy”には

「陰謀、共謀」という意味のほか、語源にしたがって、仲間として同じ場の空気を「一緒に呼吸する」という意味も読み取れよう。「誕生日」であり「記念日」であり「継続」と「新しい始まり」があるというのは、秘跡の特質である「アナムネーシス」を言い当てている。弟子たちの準備を伝える“In the high cave they prepare / for guest to be the *hostia*.” (52) には「主人、多数、聖体」という三重の重ね言葉がある (Dilworth, *Reading* 121)。客“guest” (=Jesus) が主人“host”となり、さらに聖体“hostia” (=victim) となり、それを拝領する信者は招かれた者で、その数は「多数」(“host”) だからだ。

弟子たちが準備を整えた高間でイエスは、いよいよ聖体の秘跡を制定する。

In the prepared high-room
he implements inside time and late in time under forms in-
delibly marked by locale and incidence, deliberations made
out of time, before all oreogenesis

on this hill
at a time's turn
not on any hill
but on this hill. (53)

神の小羊として受肉し人間の「時間の中に入った」“inside time” イエスは、メルキゼデクの「時に遅れて」“late in time”、ユダヤの過ぎ越しの祭りの形式で、「すべての造山活動の前」、「時間の外で」“out of time”、決められた「熟慮」“deliberations”を「成し遂げる」“implements”。世の初めから決められていた救いの計画が、イエスによって時の中、歴史の中で実現される。“late in time”にアポカリプスの状況を読み込むこともできよう。この丘とはゴルゴタのことであり、他でもないこの丘で、イエスは十字架刑に処せられ、救世主キリストになる。まさに「時の転回点」“time's turn”である。

つぎに詩は 55 頁から 58 頁まで括弧で囲まれた部分が続く。¹⁵ 内容はまず「変転する岩の上で」(‘On this unabiding rock’) とエルサレム、続いてウェールズの地勢が導入され、アーサー王、ブリテンの住人たちが「トロイア (Hissarlik) の子供たち」として言及される。¹⁶ トロイアは“matrix for

West-*oppida* / for West-*technic* / for West-*saga*” (57) 「西洋の町、西洋の技術、西洋の物語の鋳型」なのである。不安定な人間世界と恩恵の神の世界の対比が暗示されている。

括弧の部分が終わると世界の中心、‘Omphalos’ 「臍」としてのエルサレムが登場する。¹⁷

At this unabiding Omphalos
.....
at the turn of time
not at any time, but
at this acceptable time.
From the year of
the lord-out-of-Ur
about two millennia.
Two thousand lents again
since the first barley mow.
Twenty millennia (and what millennia more?)
Since he became
man master-of-plastic. (58-9)

ゴルゴタでの時の「決定的な変わり目」に、過ぎ越しの感謝の日として「ふさわしい時に」、「ウルから来た首長（アブラハム）から数えて二千年」、聖体の素材となる「大麦が最初に刈り取られたのはさらにその二千年前」。「人間が造型の職人となって二万年以上」。不安定な地上の世界にあって、人間は無償のものを作ることで救いの計画に入っていく。

この歴史の中でジョーンズが特筆するのは「ヴィレンドルフのヴィーナス像」“the Willendorf stone”である。“stone”は「祭壇」としても登場するが、ここでは「豊饒女神」の石像で、職工が忙しく「かたちを作っている」。“...already he’s at it / the form-making proto-maker / busy at the fecund image of her.” (59) ジョーンズは自問自答する。

Chthonic? why yes

to her sweetest dear
her fairest bosom have shown? (74-5)

ギリシア語で「イエス、キリスト、神の、子、救世主」の頭文字を揃えると名詞「イクトゥス」(魚)という語になる。禁教時代からキリスト教徒の「しるし」として使われたが、それを「輝かせる」。ジョーンズの褒め称えるのはたんなる自然ではなく、神の恩寵である光に照らされて作られたものなのである。魚類の誕生にイエスの受肉を重ね、そこに救いの萌芽を見るのである。中生代に子宮のある生物が生まれ、その継続である哺乳類の鮮新世では、彼の光はいや増す。彼らは確かにキリストのことを称えているからである。自注にあるとおり、17世紀の音楽家ジョン・アテイ (John Attey) のアリアから「なまめかしきシルヴィーは美しき胸を愛する人に見せるべきであったか」が引用される。肉欲も肯定され得るのだ。それがなければ私たちは存在しないし、“He-with-us” (Emmanuel) と呼ばれるイエスも誕生しない。彼が「マリアの子宮を拒まなかったから」“because he did not abhor the uterus” (75)、女性の乳房は最も愛おしく最も威厳ある丘になったのである。

ジョーンズの想いは聖母マリアの存在が不可欠であることへと向う。世を再創造するという、父なる神から与えられた使命を完遂するのに、マリアの存在は決定的に重要である。『アナセマタ』最長の第五部に登場するラヴェンダー売りの女は“her fiat is our fortune, sir: like Helen’s face / ‘twas that as launched the ship.” (128) と言う。彼女の「仰せの如く我になれかし (fiat = Let it be)」という同意がなければ、受肉はない。ここでヘレンに譬えられるのはマリアである。「船を出港させた」ヘレンの美貌がなければトロイア戦争もなく、トロイアの血をひくアエネーアースのローマ、さらには曾孫ブルトゥスのブリテンも存在しない。同様にマリアこそは人間救済のための動力因なのである。さらに最終部「聖木曜日とヴィーナスの日(金曜日)」には“He that was her son / is now her lover”という詩句が現われる。ここでの“her”はマリアと教会の両方を意味する。イエスとマリアとの関係はまた“Sophia’s child that calls him master / he her groom that is his mother.” (235) である。これはダンテによって「あなたの息子の娘」“Figlia del tuo figlio”¹⁸と表現される「神の母」の神秘である。イエスのマリアの胎内での様子は、つぎのように表現される。

Marquis of demarking waters
Warden of the Four Lands
from her salined deeps
from the cavern'd waters
(where she ark'd him) come.
.....
Grown in stature
he frees the waters. (224-5)

イエスは「侯爵」“Marquis”とされる。“Marquis”とは元来「国境地帯の支配者」のことであり、ここでは旧約と新約の間を管理する者を表している。旧・新を「分かつ水」とは洗礼の水と解される (Summerfield 135)。イエスはまた「四つの国」、つまり天国、現世、煉獄、地獄の「管理者」でもある (Ibid)。そのイエスをマリアは胎の羊水に浮かべていた。ノアの箱舟、ユダヤ民族の契約の箱の両方を指す「アーク」の意味は守護である。こうしてマリアは新しい「契約の箱」(*foederis arca*)となる (Hague, Commentary 237)。月満ちて彼は「水を解き放つ」。マリアが破水してイエスが誕生する。この水は洗礼の水であり、さらには荒地を潤す水でもあるだろう。これは『アナセマタ』で最も美しい行ではないだろうか。

再び恩恵の光がすべてのものに照らされるモチーフが繰り返される。永遠の光は時の始原から、アナムネーシスとしてイエスを想起するよう、祭壇で日々ミサを祝うために集う一人ひとりの上に輝く。

野谷 啓二

From before time
his perpetual light
shines upon them.
Upon all at once
upon each one
whom he invites, bids, us to recall
when we make the recalling of him
daily, at the Stone. (81)

そして第一部は、「私はあなた方のパンである」“I am your Bread”と宣言する大麦が、風化した岩、腐植土から芽を出すことを確認して閉じる。その腐植土の暗闇で、ずっと働き続けるミミズにも神の計画に欠かせない存在“the essential and labouring worm”としての祝福が与えられている。

おわりに

『アナセマタ』は人間は誰しもサインメーカー（すなわちアーティスト）であると信じるジョーンズが、文化を共有できない「断絶」と、無償性を疎んじ有用性ばかりを追う荒地的状況に直面して、「正当なサインを提示」(Preface 23) しようと、最初のもの作りと言える神の天地創造以降の変化、生命の誕生、その生命の特質としてのもの作り（ラスコー洞窟壁画、ネアンデルタール人の埋葬、ヴィレンドルフのヴィーナス）について、そして何よりも聖体の秘跡について、時空を超えて想いを巡らせる長編詩である。ジョーンズはカトリック神学の秘跡論、特に聖体論に魅了された。パンとぶどう酒を位相の異なったものにする、make otherのアートがとりわけ司祭の行為であること、司祭と詩人の仕事が重なり合うこと、そして「大事なものを置き置き、正当なしるしとして提示し、捧げものにする」というアナセマタが、まさにパンとぶどう酒を取り、自分の体として奉献し、弟子たちに何度もアナムネーシスとして実行できるように制定したイエスの行為に求められることを認識した。荒地の豊饒化の契機はこの目に見えているものの実体、しるしの実体を感じ得ることにある。そして言葉のアートである文学の本質は、言葉を紡ぐことによって隠れている真実を明らかにすることにある。ジョーンズは「すべての神秘は何かを開示するよう意図されている」(Preface 33) と言っている。

る。アーティストと司祭に共通する秘儀のアートに救いの契機を見たのではないか。「私たちを作った存在＝神のしるしとなるには、私たちによって何かが作られなければならない… 人の手をとおして生み出されたものがなければキリスト教はない」(Ibid 31) と喝破している。

後期モダニストとして、カトリック神学の聖体の秘跡に自身のアート観との一致を発見したジョーンズが『アナセマタ』の最終行としたのは、“What did he do yet other / riding the Axile Tree?” (243) である。受難のイエスはすでに生きているかのように宇宙樹を乗りこなしている。十字架は世界が回転する中心に位置する宇宙樹に変容しているのである。この変容は神の創造のわざそのもののダイナミズムでもある。世の始めのアルファから終末のオメガまで、横軸の存在の一つひとつに、縦軸から発出される恩寵の光が降りそそぐ。このクロス的神秘を理解するとき、“life is changed / not taken away” (81) と言い切ることができ、死も克服されるのである。ジョーンズにとって、生きていることは「変化すること」metamorphosis であり、彼は進化すらも受け入れる。『アナセマタ』は「創造主である神が贖い主イエスになり」“God the creator who becomes Jesus the redeemer” (Dilworth, Shape 153、世の終わりまでその体を残す、この畏怖をも感じさせる秘儀を見事に言語化したカトリック文学の精髓と言えよう。

注

本稿は「デイヴィッド・ジョーンズの詩学——神学的モダニズム序説——」(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要『国際文化学研究』第51号(2018年12月)、デイヴィッド・ジョーンズ著、拙訳「アートと秘跡——人間のアートとキリスト教の秘跡との不可分の関係性について、現代の技術社会との関連で考える」(神戸大学近代発行会『近代』第121号、2020年5月)およびAnthony Domestico, *Poetry and Theology in the Modernist Period* (Johns Hopkins University Press, 2017)の書評、「神学的モダニズム——神を殺し、人を殺した後の批評の行き先」(日本T.S.エリオット協会 *T.S. Review* No. 29, 2018)での問題意識をより鮮明にしようとするものである。

1. 草光俊雄『明け方のホルン』(みすず書房、2006年)は、もっぱら大学出の士官であった詩人について多くを語り、一兵卒のジョーンズについ

- ては「はじめに」に名前をあげているだけである。長いばかりか難解でおまけに日本人好みの抒情性が欠如していると避けられてしまったのかもしれない。
2. ラヴェンダー売りのエレン・モニカが登場し、15世紀後半のロンドンのイーストエンドでの生活をコックニーで生き生きと語る第五部は、コーコランが言うとおりに (Corcoran 58-9)、この作品の白眉であり取り上げたいところではあるが、別の機会を待ちたい。
 3. 筆者は価値を論じているのではない。横軸のみの文学でも、人間が社会の中で人間性を失い、非人間化、疎外化が起こり、その苦しみと克服をテーマにする優れた作品が誕生することもあるだろう。
 4. トラファルガー広場まで足を延ばせば、クロムウェルの代表する議会に向けて視線を向ける馬上のチャールズ一世の像がある。
 5. ジョーンズの言葉では“efficacious sign” (Anathemata 49) となる。
 6. ジョーンズもこうした見解に呼応して“the Mass is a showing again in an unbloody manner what was done once and for all in a bloody manner” (Hague, *Dai* 190) と述べている。
 7. ここで思い出されるのは遠藤周作が抱え込んだ苦悩である。彼はキリスト教を和服に仕立て直そうともがいたわけだが、彼がプロテスタントであれば教会権威など意識することもなく、自分の思い通りの信仰に進んでいったと思われる。原理的に、個人化した信仰には悩みなど生ぜず、インカルチュレーションという重要な問題も惹起されない。
 8. ドメスコはジョーンズの芸術的営為を“sacramental othering と見なししている。
 9. 「神学的モダニズム」というと、カトリック教会内の「近代主義」が想起されるかもしれない。ここではもちろんピウス 10 世によって断罪された反スコラのジョージ・ティレル (George Tyrrell) らの運動を指すのではなく、むしろ新スコラ学を代表したジャック・マリタン (Jacques Maritain) の思想的影響下にあった文学上の傾向を意味する。上記 Domesco の研究書の他にも、W. David Soud, *Divine Cartographies: God, History, and Poiesis in W.B. Yeats, David Jones and T.S. Eliot* (Oxford UP, 2016) などがある。
 10. もの作りにおける「有用性」と「無償性」の問題、そしてアートにとっ

- て後者が決定的に重要であるというジョーンズの見解を知るのに最適なエッセイは“Art and Sacrament” in *Epoch and Artist* (Faber and Faber, 1959), 143-179 である。
11. 第一次世界大戦後のカトリック思想界に大きな足跡を残した新スコラ学の先導者ジャック・マリタンの存在は見逃せない。ジョーンズに洗礼を授けたジョン・オコナー (John O'Connor) は、チェスタトンのブラウン神父のモデルでもあるが、その彼の訳になる *The Philosophy of Art* はギルの序論つきで Ditchling の St Dominic's Press から刊行され、ジョーンズも参加していたこのギルド共同体の愛読書になった。
 12. パーンズの最大の功績はカトリック出版社 Sheed and Ward の編集者としてカトリック知識人をリードしたことであろう。Cf. Tom Burns, *The Use of Memory: Publishing and Further Pursuits* (Sheed and Ward, 1993).
 13. ジョーンズは『アナセマタ』の「序文」の冒頭、『ブリトン人の歴史』の著者ネンニウスが「自身にとって大切なものが煙の如く消散してしまう恐怖によって引き起こされる『内なる傷』』について語っている。「見つけられ得るものすべてを集める」のは歴史家の順当な態度である。詩人のジョーンズは純正な「もの」を探求する。
 14. Roman Britain に込められる意義に注意する必要がある。イングランド中心主義からすると、どうしてもアングロ・サクソンに比重がかかりすぎるが、ローマ帝国の一部であったブリテン、すなわち先住者のケルトの方がキリスト教受容の先行者であったことから、近代においてマイノリティ化したとはいえ、いやむしろそれだからこそ、ケルト系の人々の誇りの源泉となった。
 15. ヘイグはこの部分に「創造界の非永続性の主張」(Commentary, 34) を読み取っている。
 16. 「新しいトロイ」としてのロンドン。Troy Novant: Trinovantum ブルートスはアエネーアースの曾孫。Cf. Hooker, 43.
 17. 海洋生物学者で創造論を熱心に信奉したプリマス・プレスレンの信者フィリップ・ゴス (Philip Gosse) が思い起こされる。彼はダーウィンの『種の起源』の二年前に母を持たないアダムにも臍があるのが自然とする *Omphalos* を出版した。フィリップは評論家エドマンド・ゴスの父

である。

18. (daughter of your son) *Divina Commedia*, Paradiso, Canto XXXIII.

引用文献

- Blissett, William. *The Long Conversation: A Memoir of David Jones*. Oxford UP, 1981.
- Corcoran, Neil. *The Song of Deeds: A Study of The Anathemata of David Jones*. University of Wales Press, 1982.
- D'Arcy, Martin. *The Mass and the Redemption*. Benziger Brothers, 1926.
- De la Taille, Maurice. *The Mystery of Faith and Human Opinion Contrasted and Defined*. Sheed and Ward, 1930.
- Dilworth, Thomas. *The Shape of Meaning in the Poetry of David Jones*. University of Toronto Press, 1988.
- . *Reading David Jones*. University of Wales Press, 2008.
- . *David Jones: Engraver, Soldier, Painter, Poet*. Jonathan Cape, 2017.
- Dix, Gregory. *The Shape of the Liturgy*. Dacre Press, 1945.
- Domesticco, Anthony. *Poetry and Theology in the Modernist Period*. Johns Hopkins UP, 2017.
- Hague, René. *A Commentary on the Anathemata of David Jones*. University of Toronto Press, 1977.
- . ed., *Dai Great-Coat: A Self-Portrait of David Jones in His Letters*. Faber and Faber, 1980.
- Hooker, Jeremy. *David Jones: An Exploratory Study*. Enitharmon Press, 1975.
- Jones, David. *The Anathemata*. Faber and Faber, 1952.
- . *Epoch and Artist*. Faber and Faber, 1959.
- Raine, Kathleen. *David Jones and the Actually Loved and Known*. Golgonza Press, 1978.
- Summerfield, Henry. *An Introductory Guide to The Anathemata and the Sleeping Lord Sequence of David Jones*. Sono Nis Press, 1979.
- 小林珍雄編『キリスト教百科事典』エンデルレ書店、1960年。

デイヴィッド・ジョーンズの『アナセマタ』
——カトリック文学の精髓——

坂口昂吉『中世キリスト教文化紀行——ヨーロッパ文化の源流を求めて——』
南窓社、1995年。

上智学院『新カトリック大事典』II 研究社、1998年。

『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987年。

本稿はJSPS 科研費 19K00393 による「神学的モダニズム文学研究」の
成果の一部です。

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax
and Word-Order
in *The Peterborough Chronicle* 1122-1154."

Daisuke MIYABAYASHI

I

The language in the Continuations (the annals from 1122 to 1154) of the *Peterborough Chronicle* shows the transitional stage of the English language from Old to Middle/Modern English. In her edition of the *Peterborough Chronicle*, Cecily Clark says, "The modernity of this language [i.e., of the Final Continuation] appears also in its syntax" (lxvi). She also notes, "certain constructions typical of Old English, such as inversion of subject and verb after an introductory adverbial phrase, are here abandoned in favour of word-order nearer to that of Modern English" (lxvi).

On the other hand, Bruce Mitchell,¹ with his close descriptions of word order in the Continuations, concludes his article entitled "Syntax and Word-Order in *The Peterborough Chronicle* 1122-1154" with the following statement: "The syntax and word-order are still in many important respects Old English" (144). More precisely, dividing clauses into three categories, namely, main clauses (and simple sentences), subordinate clauses, and clauses beginning with *ond* and *ac*, he states that word order is "more modern" in subordinate clauses and clauses beginning with *ond* and *ac* in the Continuations than that in Ælfric's *Homily on the Passion of*

St. Stephen, which is treated as a specimen of the Old English language, whereas it is “less modern” in main clauses beginning with an adverb (139). The word “modern” refers to the similarity to Modern English word order. Fundamental word order in Modern English is SVO/C with several exceptions such as “the initial placing of objective pronouns in relative clauses” (Quirk et al 51). That word order is “modern” indicates the occurrence of this basic word order of Modern English.²

Mitchell’s description is thorough, but it seems that he does not deal with word order of relative clauses in the Continuations because his categorization does not include relative clauses as a standalone category and his category of subordinate clauses does not include relative clauses either. He mentions the *X. wæs gehaten* construction, which is interpreted as a type of relative clause (Fischer et al. 61); nevertheless, he does not discuss it in his study (115-116).

Therefore, the purpose of this present article is to describe and analyze word order of relative clauses in the Continuations of the *Peterborough Chronicle* and examine its “modernity.”

II

The edition employed in the present article is Irvine’s *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition, Volume 7, MS. E*. All punctuations and emendations are hers. The references henceforth are to this edition by annal number and line. All line references are to the line in which the sentence or clause begins in the annal. The part of the *Peterborough Chronicle* which begins with the year 1122 is divided into two, the First and Final (Second) Continuations. Annals from 1122 to 1131 are the First Continuation and annals thereafter the Final Continuation.

Relatives found in the Continuations are *þe*, *þet*, *se*, and zero relatives for relative pronouns, and *þa*, *þær*, and *þet* for relative adverbs. Examples for each relative are:³

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

(1) ... 7 forbearnde ealle þe minstre 7 ealle þa gersumes *þe* þærbinnen
wæron foruton feawe bec 7 .iii. messe-hakeles; (1122/7)

(... and burnt out all the minster and all the treasures *which* were
therein except a few books and three Mass-chasubles;)

(2) Siððon on þæs dæi .vi. idus Septembris, *þet* wæs \on/ Sancte Marię
messedæi, ... (1122/14)

(After the sixth day before the ides of September, *which* was on Saint
Mary's Mass-day, ...)

(3) On þes ilces geares forðferde se eadig biscop Ernulf of Roueceastre
se æror wæs abbot on Burch; (1124/33)

(In this same year died the blessed Bishop Ernulf of Rochester, *who*
before was abbot in Peterborough;)

(4) ..., 7 hine bebyrigde se biscop of Ceastre, Rotbert Pecceþ wæs
gehaten. (1123/13)

(..., and him buried the bishop of Chester, *who* was called Rotbert
Pecceþ.)

(5) ... swa þet on þa tun *þa* wæs tenn ploges oðer twelfe gangende,
(1131/7)⁴

(... so that on the town *where* ten or twelve plows was going.)

(6) Ðes ilces gæres on þone lententide wæs se eorl Karle of Flandres
ofslagen on ane circe *þær* he læi 7 ... (1127/12)

(This same year in the Lent time the earl Carl of Flanders was killed
in one church *where* he lay and ...)

(7) ..., þet wæs þes Sunendæies *þet* man singað Exurge Quare Obdormis
Domine?, (1127/59)

(..., which was on this Sunday *when* men sing Exsurge, quare

obdormis Domine?,)

Clauses introduced by *swa hwam swa swa / swa hwar swa* could also be regarded as relative clauses, although their function is not necessarily adjectival in a sentence (Mitchell, *Old English Syntax* 86; Vol. 2). An example of such a construction is:

(8) ..., þa bed se kyng heom þæt hi scoldon cesen hem ærcebiscop to Cantwarabyrig *swa hwam swa swa* hi woldon, (1123/18)
(..., then the king asked them that they should choose for themselves *whosoever* they would as the Archbishop to Canterbury.)

These types of relative clauses represented in (1)-(8) in the Continuations are the data investigated in this study.

Relative pronouns have case differences in the Continuations as well as in Modern English.⁵ Since possible word order in relative clauses varies depending on the case of relative pronouns, their case differences are taken into account in the analysis and discussion.

III

First, zero relatives in the Continuations are non-“modern.” Modern English does not introduce relative clauses when relative is nominative (Brown and Miller 180-181).⁶ However, all zero relatives in the Continuations are nominative. Most are the *X wæs gehaten* construction, which Mitchell regards as an Old English idiom and excludes from his data (115-116). (4) given above is an example of this construction.

(4) ..., 7 hine bebyrigde se biscop of Ceastre, Rotbert Pecceþ wæs gehaten. (1123/13)
(..., and him buried the bishop of Chester, who was called Rotbert Pecceth.)

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
 A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
 in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

Table 1 shows that the Continuations contain non-“modern” zero relative clauses in a significant number.

Table 1

| Word Order | the First Continuation | the Final Continuation |
|-----------------------------|---|------------------------|
| <i>X wæs gehaten</i> | 9 (1123/13, 1123/31, 1123/37, 1123/65, 1123/69, 1124/39, 1125/13, 1127/9, 1127/22) | 2 (1132/11, 1154/9) |
| <i>X hatan</i> ⁷ | 3 (1123/32, 1124/5, 1124/20) | 0 |
| VC ^s | 1 (1123/51) | 0 |
| Totals | 13 | 2 |

Three relative clauses in the First Continuation are of the *X hatan* construction. (9) below is an example cited from 1123/32.

- (9) ..., he was canonie of mynstre Cicc hatte, (1123/32)
 (... , he was canon of minister which is called Cicc.)

Cicc, the name of a minster and not the name of the *he* mentioned immediately before, should be interpreted as a complement rather than a subject. This type of expression (*hatan* + complement) is frequent in German, as in (10).

- (10) Ich heie Peter Meier.

Peter Meier in (10) is a complement since the subject is *Ich*. As well as this German example, 1123/32 is interpreted to bear a zero relative. Neither this verb nor this type of expression for one's name survives in Modern English apart from the verb *be*. Thus, Table 1 includes the *X hatan* construction.

1123/50, which is the only clause for VC with a zero relative, may be

confusing. 1123/50 with the preceding clause is given in (11).

(11) ..., 7 mid him ferde se biscop Bernard of Wales 7 Sefred abbot of Gleastingbyrig 7 ... (a series of people's names) 7 Gifard, wæs þes kinges hirdclerc. (1123/48-51)

(..., and with him went the bishop Bernard of Wales, and Sefred, Abbot of Glastonbury, and ... and Giffard, who was this king's court-chaplain.)

This punctuation seems reasonable in syntax, meaning, and context, but there is another reading possible: a period before 7 *Gifard*. This interpretation is not impossible because it becomes syntactically correct⁹ and does not spoil the context. In this case, 1123/50 is not a relative but a main clause. However, the present article follows Irvine's punctuations as mentioned in II, and regards 1123/50 as a zero relative clause.¹⁰

Non-“modern” zero relative clauses appear in a number which cannot be taken as fortuity in the First Continuation, and the *X wæs gehaten* construction, which is an Old English idiom, has not yet become extinct in the Final Continuation. It can be said that Old English elements are still observable both in the Continuations.

IV

In nominative relative clauses, V normally precedes C/O in Modern English. Table 2 summarizes nominative relative clauses whose word order is “modern” in the Continuations. 1122/14 given in (2) is an example.

(2) Siððon on þæs dæi .vi. idus Septembris, *þet* wæs \on/ Sancte Marię messedæi, ... (1122/14)

(After the sixth day before the ides of September, which was on Saint Mary's Mass-day, ...)

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
 A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
 in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

Tables first set rough categories of word order, with the symbols illustrated in endnote 8, and then close descriptions and discussions are given thereafter.

Table 2

| Word Order | the First Continuation | the Final Continuation |
|------------|---|--|
| VC | 20(1122/14, 1123/4, 1124/17, 1124/27, 1124/28, 1124/29, 1124/33, 1124/35, 1125/3, 1125/19, 1127/3, 1127/6, 1127/27, 1127/40, 1127/46, 1127/59, 1127/65, 1128/2, 1129/10, 1129/19) | 5(1135/17, 1137/25, 1137/28, 1140/7, 1140/19) |
| V | | 1(1137/63) |
| VO | 5(1123/59, 1123/59, 1125/5, 1127/23, 1131/8) | 1(1137/66) |
| AVC | | 1(1140/18) |
| A | | 1(1135/8) |
| Totals | 25 | 9 |

It should be noted that the number of relative clauses cannot always be exact because some clauses allow several interpretations. However, the number is not large enough to have considerable influence on the general view of the "modernity" of word order of relative clauses in the Continuations.

Onions says, "Adverbs should therefore come if possible immediately before the words they qualify" (144). Thus, clauses such as 1124/33 and 1127/6 are regarded as "modern" clauses. 1124/33 has already been shown in (3), and 1127/6 is given in (12).

(3) On þes ilces geares forðferde se eadig biscop Ernulf of Roueceastre
se æror wæs abbot on Burch; (1124/33)

(In this same year died the Blessed bishop Ernulf of Rochester, who before was abbot in Peterborough;)

(12) ..., þe ær wæs ðes caseres wif of Sexlande; (1127/6)
(..., who before was this emperor's wife of Saxony;)

In (3) and (12), *æror* and *ær* modify the verb *wæs*, that is to say, the adverbs come immediately before the verb. By Onions' description, (3) and (12) are "modern." On the other hand, there are three non-"modern" clauses due to the places of the adverbial phrases, two of which are given in (13) and (14).

(13) ... þe waren sum wile rice men, (1137/41)
(... who were for some while rich men,)

(14) ... þa hæfde at an market an pund, (1124/30)
(... who had at one market one pound,)

In (13) and (14), the adverbial phrases (*sum wile* in (13) and *at an market* in (14)) intervene between V and C/O. According to Quirk et al., adverbs or adverbial phrases usually do not appear between V and C/O in Modern English (49-50).¹¹ 1137/41 and 1124/30 thus are regarded as non-"modern" relative clauses.

When a clause does not contain C/O, adverbials seem to appear after the verb(s) in Modern English. 1137/63 given in (15) is an example of this "modern" word order in the Continuations.

(15) ... þe lien to þe circewican; (1137/63)
(... which lie to the Christian office;)

1140/24 given in (16) is regarded as a non-"modern" clause in this respect.

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

- (16) ... þe mid [him h]eoldon 7 ... (1140/24)
(... who held with him and ...)

The adverbial phrase *mid him* would be postverbal in Modern English word order.

Scholars have different criteria for the treatment of adverbials.¹² Therefore, in this study, it is clearly stated that 1137/41, 1124/30, and 1140/24 are regarded as non-“modern” clauses because of the places of the adverbials.

1135/8, which is the only example of A in the Word Order category in Table 2, may be controversial. The whole clause containing the relative clause is:

- (17) ..., for æuric man sone ræuede oþer þe mihte. (1135/7)
(..., for every man soon robbed others who could.)

The antecedent of the relative in 1135/7 is *æuric man*, and the verb *ræuede* would be redundant if it appeared after the auxiliary *mihte*. Such omissions of main verbs are observable in Modern English.¹³ Thus, 1135/8 is considered “modern.”

Some scholars may counter that Table 2 does not include 1131/35. It is given in (18).

- (18) ..., þa wæron wiðinne mynstre 7 wiðuten, (1131/35)
(..., which were within and without minister.)

This clause at first glance can be interpreted as VC: *wæron* is the verb and *wiðinne mynstre 7 wiðuten* is the complement. However, the complement in 1131/35 is problematic. The prepositions *wiðinne* and *wiðuten* would be appositional before *mynstre* in Modern English word order. Moreover, such separation of coordinate modifiers is common in the case of nouns and adjectives in Old English. Davis says that in Old English, “When two

co-ordinate adjectives qualify a noun, they are usually separated as in the traditional ‘good men and true’ (59). 1131/35 is, at first glance, VC and “modern,” but its word order is rather of Old English and impermissible in Modern English grammar.

Table 2 and the discussions above show that approximately 35 nominative relative clauses are “modern” in the Continuations (25 in the First Continuation + 9 in the Final Continuation, although the number can be variable depending on the interpretations of the clauses). The next section will give a general sketch of nominative relative clauses whose word order is not “modern.”

V

In nominative relative clauses, V fundamentally does not precede C/O in Modern English. Table 3 sums up non-“modern” nominative relative clauses in the Continuations in the same way as Table 2.

Table 3

| Word Order | the First Continuation | the Final Continuation |
|-------------------------------|--|------------------------|
| CV | 5(1122/7, 1123/28, 1123/35, 1124/9, 1127/5) | 2(1132/6, 1137/44) |
| OV | 5(1124/46, 1124/49, 1124/50, 1130/19, 1131/3) | 1(1137/56) |
| OAV | 2(1129/11, 1129/16) | |
| VC/O (discussed in IV) | 2(1131/35, 1124/30) | 1(1137/41) |
| Adverbial V (discussed in IV) | | 1(1140/24) |
| Totals | 14 | 5 |

1130/19, OV in the Word Order category, is arguable because it is a proverb. The whole quote which contains the relative clause is given in (19).

(19) ‘Hæge sitted þa aceres dæleth.’ (1130/19)

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

(‘Hedge which divides across sits.’)

This proverbial passage could not be regarded as an innate language of the Continuations since features of the older stages of a language tend to remain in proverbs. However, this quote is attested in the First Continuation, and thus this clause is sorted into Table 3 which summarizes non-“modern” nominative relative clauses.

1137/56, which is regarded as OV, is also open to debate due to the case system of the language in the Continuations. The clause containing 1137/56 is:

(20) ..., 7 fand þe munekes 7 te gestes al þat heom behoued 7 ...
(1137/56)

(..., and provided the monks and guests all which for them is needed and ...)

Heom in 1137/56 can be regarded as either an adverbial element or the object of the verb *bihoven*. According to the *Middle English Dictionary*, the verb *bihoven* is used with dative personal objects. Thus, *heom* in 1137/56 is regarded as O of the verb *behoued*. However, dative objects correspond to indirect objects in Modern English and they are rather adverbial.¹⁴ In this case, 1137/56 is categorized in Adverbial V in Table 3. It is, however, noted that the treatment of dative objects is not a main concern of this study since its interest is the “modernity” of word order of relative clauses in the Continuations. Either dative objects are regarded as adverbials or O does not change the non-“modernity” of 1137/56 since dative personal pronouns generally do not precede verbs in Modern English.

All the complements which precede verbs in relative clauses in the Continuations are *þær* or compounds with *þær*. They are; *þærbinnen* (1122/7); *þær* (1123/28,¹⁵ 1123/35, 1127/5); *þærabuton* (1124/9) in the First Continuation and; *þer* (1132/6); *þarinne* (1137/44) in the Final Continuation. These adverbs regarded as C in this study are always preverbal in the Continuations. Mitchell in his *Old English Syntax* says

that in Old English, “an adverb (element) can intervene between S and V” (965; vol. 2). These CV clauses in Table 3 are remnants of Old English grammar since these adverbs follow verbs in Modern English word order.

It can be claimed that quite a few relative clauses contain word order which does not occur in Modern English (14 in the First Continuation and 5 in the Final Continuation). Moreover, the residual of Old English grammar is also observed in relative clauses in the Continuations. These data confirm the non-“modernity” of the language in the Continuations.

VI

In objective relative clauses, S precedes V in Modern English. When a relative clause contains direct and indirect objects, one becomes the objective relative and the other remains after the verb in the clause. In objective relative clauses with a single object in the Continuations, S always precedes V. However, not all of them are “modern” due to word order of the elements other than S and V. When a relative clause contains direct and indirect objects, the object remaining in the relative clause can precede the verb in the Continuations. This non-“modern” pattern of word order is found in 1123/62, which is given in (21).

- (21) ... þet se papa him onleide ... (1123/62)
(... which the pope imposed on him ...)

The indirect object *him* in 1123/62 would be postverbal in Modern English word order. Pronouns are frequently preverbal in Old English (Koopman 58), and this trait of Old English grammar is observable here.¹⁶

Modern objective relative clauses and non-“modern” objective relative clauses are summarized individually in Table 4 and Table 5. Table 4 is for modern clauses and Table 5 is for non-“modern.”

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
 A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
 in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

Table 4

| Word Order | the First Continuation | the Final Continuation |
|------------------|--|------------------------|
| SV | 5(1123/18, 1123/23, 1124/2, 1125/11, 1127/66) | 2(1137/65, 1140/67) |
| SA | 1(1123/30) | |
| SAV | 2(1125/24, 1127/55) | 1(1137/11) |
| SV (indirect) O | | 1(1137/33) |
| SAV (direct) O | | 1(1138/3) |
| SAV (indirect) O | | 1(1140/9) |
| Totals | 8 | 6 |

Table 5

| Word Order | the First Continuation | the Final Continuation |
|------------------|------------------------|------------------------|
| S (indirect) OV | 1(1123/62) | |
| SV | 1(1124/18) | |
| SAV (indirect) O | 1(1126/4) | |
| Totals | 3 | 0 |

1123/62 has already been discussed in (21). 1124/18 given in (22) is regarded as a non-“modern” relative clause because of the word order of the preposition and its object.

- (22) ... þa his wiðrewines healden him togeanes. (1124/18)
 (... which his enemies held him against.)

Togeanes is a preposition meaning *against* in 1124/18. That objects precede their prepositions is possible in Old English (Mitchell, *Old English Syntax* 447; vol. 1), but is not in Modern English. Thus, 1124/18 is considered non-“modern.” It would be *togeanes him* in Modern English word order.

Onions says, “When an adverb qualifies a compound tense its usual position is between the auxiliary and the participle or the infinitive”

(145). 1125/24 is “modern” and 1126/4 is non-“modern” by Onions’ description. They are given in (23) and (24).

(23) ... þa Anselm ærcebiscop¹⁷ hæfde æror beboden 7 ... (1125/24)
(... which Anselm archbishop had before decreed and ...)

(24) ... þet he æror hafde giuen þone kasere Heanri o(n)f Loherenge to wife. (1126/4)
(... whom he before had given to Emperor Henry of Lorraine as wife.)

In objective relative clauses, “modern” word order prevails in the First Continuation and all relative clauses are “modern” in the Final Continuation. The claim of relative clauses in the Continuations to the “modernity” lies in word order of objective relative clauses.

VII

Word order in nominative and objective relative clauses has been discussed so far. Remaining undiscussed types of relatives in the Continuations are the concern of this section. They are possessive (genitive) and adverbial ones, with the former represented in (25), and the latter (6).

(25) ..., þæt minstre hi makeden. (1154/2)
(..., whose minster they made.)

(6) Ðes ilces gæres on þone lententide wæs se eorl Karle of Flandres ofslagen on ane circe þær he læi 7 ... (1127/12)
(This same year in the Lent time the earl Carl of Flanders was killed in one church where he lay and ...)

Their total number is not as high as that of nominative or objective relative clauses in the Continuations. They are summarized in Table 6.

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
 A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
 in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

Table 6

| Word Order | the First Continuation | the Final Continuation |
|------------------------|--------------------------|------------------------|
| "Modern" | | |
| SV | 2(1127/13, 1130/15) | 2(1137/28, 1137/74) |
| and VO | 1(1127/14) | |
| SVO | 1(1127/59) | |
| SVC | | 1(1137/24) |
| OSV | | 1(1154/2) |
| "Non-modern" | | |
| VS | 1(1131/7 ^{1b}) | |
| Totals of "Modern" | 4 | 4 |
| Totals of "Non-modern" | 1 | 0 |

1127/14 is a clause beginning with 7, which Mitchell separates from the other types of clauses (131). However, 1127/14 is the only relative clause beginning with 7 in the Continuations. According to Mitchell, "the *Peterborough Chronicle* 1122-1154 can claim to be more modern here [in the clauses after *ond* and *ac*]" (133). 1127/14 is one of the grounds for his argument. 1127/14 is given in (26) with the preceding relative clause.

(26) ... þær he læi 7 bæd hine to Gode tofor þone we\o/fede among
 þane messe ... (1127/13)

(... where he lay and offered himself to God before the alter during the
 Mass...)

The first adverbial relative clause in 1127/13, *þær he læi*, is SV in Table 6, and the clause after 7 is also "modern." The treatment of clauses beginning with *ond* and *ac* is different from that in Mitchell's, but it has almost no effect on the general view of the "modernity" since 1127/14 is the only clause for this type.

OSV may at first glance seem non-"modern" because O precedes the other elements. One of the OSV clauses in the Continuations has already

been given in (25).

(25) ..., þæt minstre hi makeden. (1154/2)
(..., whose minster they made.)

However, objects can precede the other elements in possessive relative clauses in Modern English, which is exemplified in (27).

(27) The house whose roof you can just see is Mr. Baker's.

The object of the main verb *see* in the possessive relative clause in (27) is the (*whose*) *roof*. It is obvious that in possessive relative clauses, objects can precede subjects and verbs in Modern English.

It can be claimed from Table 6 that the “modernity” prevails in word order of possessive and adverbial relative clauses in the Continuations. Only 1131/7 is a non-“modern” clause. The total number of items in Table 6 is, however, less than ten, and therefore a general view is hard to conclude.

VIII

Both “modern” and non-“modern” relative clauses are observed in the Continuations. Any claim to the “modernity” thus rests on the relative percentages of “modern” word order in relative clauses. Table 7 sets out the approximately percentages of “modern” relative clauses apart from section III since all clauses discussed in III are not “modern.”

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

Table 7

| Section | Type of Clause | the First Continuation | the Final Continuation |
|----------|---|------------------------|------------------------|
| IV and V | Nominative Relative Clauses | 66% (25/38) | 64% (9/14) |
| VI | Objective Relative Clauses | 73% (8/11) | 100% (6/6) |
| VII | Possessive and Adverbial Relative Clauses | 80%(4/5) | 100% (4/4) |
| Totals | All Types of Relative Clauses above | 69%(37/54) | 79% (19/24) |

As mentioned at the beginning of the present article, the language in the Continuations looks transitional. As the total percentages given in the bottom row of Table 7 increase from the First to the Final Continuation, it can be concluded that word order of relative clauses is not an exception to the claim that the language in the Continuations is transitional from Old to Middle/Modern English in general.

It also can be said that word order in objective, possessive, and adverbial relative clauses is "modern." Mitchell's calculation of the "modernity" in subordinate clauses is 41 percent in *Homily on the Passion of St. Stephen*, 72 percent in the First Continuation, and 80 percent in the Final Continuation (138). Old English word order in relative clauses is not examined in this study, but Quirk and Wrenn say that S O/C V, which is non-"modern" word order, is "fairly regular" in Old English (94). Given that the 41 percent of the "modernity" in subordinate clauses in *Homily on the Passion of St. Stephen* is similar to the percentage of relative clauses in Old English, the claim to the "modernity" of word order of relative clauses in the Continuations is tenable.

However, undue reliance on statistics is perilous. First of all, it is significant that producing statistics can be difficult as it heavily depends on the interpretations and treatments of the data which, as Mitchell

points out, vary among scholars (135, fn. 3). For example, as mentioned in IV, scholars have different criteria for adverbials.

It is also notable that Table 7 does not include the data discussed in III. There are a certain number of zero nominative relative clauses (13 in the First Continuation and 2 in the Final Continuation) which are the impermissible constructions in Modern English grammar. Some complements precede verbs in nominative relative clauses in the Continuations, and close descriptions in section V have revealed that all of them are a single adverb *þær* or a compound with *þær*. In Old English, other types of complements (e.g., adjective or prepositional phrase) can also precede verbs, although they are always postverbal in the Continuations. Here, the syntactical mechanisms themselves seem “modern,” but a residue of Old English grammar is also observable.

Several Old English features which generally cannot be seen in Modern English remain in the language of the Continuations. The separation of two coordinate modifiers with a single noun is observed in (18) and the preverbal placement of pronominal objects is seen in (21). The object precedes its preposition in (22), which is also a remnant of Old English word order.

The language in the Continuations of the *Peterborough Chronicle* shows the transitional stage from Old to Middle/Modern English. This study reveals that word order of relative clauses in the Continuations is “modern” in general. However, close descriptions also manifest that several characteristics of Old English remain in the Continuations. Word order of relative clauses in the Continuations itself is close to that of Modern English, but features of Old English grammar still exist in various places in relative clauses as well.

Notes

1. Citations referred to Mitchell in the present article are from his own “Syntax and Word-Order.” His *Old English Syntax* is also referred to with specification.

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

2. Mitchell does not regard word order in sentences such as "Came the dawn," "A prince was he," and "God save the King" as possible word order in Modern English (120).
3. In this section, relatives are italicized by the present writer. He also attached the literal translations throughout the present article.
4. 1131/7 is treated as an adverbial relative clause in this study, but it also could be a nominative relative clause. It depends on the interpretation of *ploges*. When the word *ploges* is regarded as a grammatical subject of the clause meaning *plow animals*, the clause becomes an adverbial relative clause. The *Middle English Dictionary* agrees on this reading (see, plough n. 2). Another reading is that the word *ploges* means a unit of land measure. In this interpretation, 1131/7 is a nominative relative clause and *ploges* is a complement. In this study, the present writer follows the reading of the *Middle English Dictionary*. In either case, however, the non-"modernity" of 1131/7 does not change since *tenn* and *twelfe* would be appositional in Modern English word order.
5. E.g., the relative *who* is used for nominative case while *whom* for objective case.
6. According to Onions, nominative relatives can be omitted in "colloquial," "poetry," and "older" English language as seen in, "There's somebody wants to see you," "It's an ill wind blows nobody any good," or "There is no power in Venice can alter a decree established" (60). However, it seems legitimate to disregard these omissions of relatives.
7. *Hatan* is the infinitive of the verb. The attested forms in the First Continuation are different as shown below Table 1.
8. S = subject, V = verb, O = object, A = auxiliary, C = complement, e.g., "a fireman" in "He is a fireman." In cases where the verb is *be* and a single adverb or adverbial phrase without O or C is present in a clause (e.g., he is *there*, or he is *in the town*), the adverbial is represented by C in this study since its place seems to be the same as

that of C.

9. When a period is put before 7 *Gifard*, *Gifard* is S, *wæs* is V, and *þes kinges hirdclerc* is C. Hence, this clause becomes a main clause whose word order is SVC.
10. Mitchell also agrees on this reading. He says that there is an “unexpressed relative” in 1123/51 (116).
11. Adverbs appear before C when they modify C. (e.g., “In 1945 the country became *totally* independent.”) Quirk et al regard *totally independent* as C.
12. West, for example, says, “the grammatical structure of sentence may be unimpaired by the shifting of the adverb from one place to another” (271).
13. A Modern English example is, “If Mary buys a computer, then John will, too.”
14. The sentence “I bought *him* a book” is interchangeable with “I bought a book *for him*.”
15. The attested form in 1123/28 is *ðær*.
16. Mitchell, though, says that preverbal pronominal objects are a variation of S.V., which is regarded as “modern” word order.
17. To be precise, 1125/24 could be regarded as a non-“modern” objective relative clause because when a title is not long it usually comes before a name in Modern English. In the case of 1125/24, the title *ærcebiscop* seems to come before the name *Anselm* in Modern English word order. However, in the present article, these are treated as a chunk of nouns and word order within them is not a main concern. Thus, 1128/2 (... *þet wæs betwene him 7 his nefu ðone eorl of Frandres*.) is also regarded as VC in Table 2. (The title *ðone eorl of Frandres* is long, and from this point of view word order of 1128/2 looks “modern” as well, though.)
18. About 1131/7, see endnote 4.

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:
A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in The Peterborough Chronicle 1122-1154."

Works Cited

- Brown, Keith and Jim Miller. *A Critical Account of English Syntax: Grammar, Meaning, Text*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2016.
- Clark, Cecily, ed. *The Peterborough Chronicle 1070-1154*. London: Oxford University Press, 1958.
- Davis, Norman, revised. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. 9th ed. Oxford: Clarendon, 1953.
- Fischer, Olga, et al. *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- Irvine, Susan, ed. *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition, Volume 7, MS. E*. Cambridge: Brewer, 2004.
- Koopman, Willem. "Transitional Syntax: Postverbal Pronouns and Particles in Old English." *English Language and Linguistics*. 9.1 (2005): 47-62.
- McSparran, Frances, et al. *Middle English Dictionary Online Edition*. Ann Arbor: University of Michigan Library, 2000-2018. Accessed on 13th May, 2023.
- Mitchell, Bruce. *Old English Syntax*. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1985.
- . "Syntax and Word-Order in *The Peterborough Chronicle 1122-1154*." *Neuphilologische Mitteilungen*. 65.2 (1964): 113-144.
- Onions, Charles Talbut. *Modern English Syntax*. 7th ed. London: Routledge, 1971.
- Quirk, Randolph, et al. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman, 1985.
- , and C. L. Wrenn. *An Old English Grammar*. London: Methuen, 1955.
- West, Alfred S. *The Elements of English Grammar*. revised edition. Cambridge: Cambridge University Press, 1907.

くり返される『ダロウェイ夫人』—— 『めぐりあう時間たち』とフィリップ・グラスに よるミニマリスト的サウンドトラック¹

小室龍之介

序論

イギリスのモダニスト作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) の代表作のひとつに数えられている『ダロウェイ夫人』 (*Mrs. Dalloway*, 1925) は、映画化やアダプテーションに向けたテキストであるようだ。ヴァネッサ・レッドグレイブが主演を務めた同タイトルの映画が1997年に公開されたかと思えば、その翌年以降に『ダロウェイ夫人』のアダプテーション作品が相次いで発表された。それは、ジェイムズ・シッフがその論考の中で、マイケル・カニングガム (Michael Cunningham, 1952-) による『めぐりあう時間たち』 (*The Hours*, 1998)、ジョン・リピンコット (Robin Lippincott,?) による『ミスター・ダロウェイ』 (*Mr. Dalloway*, 1999)、そしてジョン・ランチェスター (John Lanchester, 1962-) による『ミスター・フィリップス』 (*Mr. Phillips*, 2000) を紹介および考察をしているとおりである。『めぐりあう時間たち』についてはその映画版が2002年に制作されただけでなく、その20周年という節目となった2022年11月には『めぐりあう時間たち』のオペラ作品が新たなアダプテーション作品として加わることとなった。日本では、このオペラは映画上映という形で2023年2月に公開された。

従来の英文学研究であれば二つ以上のテキストを考察したりテキストと映像という組み合わせで議論を進めたりするのが王道なのであろうが、本考察

においてはテキストとサウンドトラックという組み合わせで議論を行なっていく。具体的には、ウルフの『ダロウェイ夫人』とカニンガムの『めぐりあう時間たち』という両テキストに加え、後者の映画版やそのサウンドトラックを考察対象とするということである。『めぐりあう時間たち』の映画版はスティーヴン・ダルドリー (Stephen Daldry, 1960-) を監督に、ニコール・キッドマン (Nicole Kidman, 1967-)、ジュリアン・ムーア (Julianne Moore, 1960-)、そしてメリル・ストリープ (Meryl Streep, 1949-) を出演陣に、そしてイギリス現代演劇界の巨星といえるデヴィッド・ヘアを脚本担当に迎えて制作されたことは日本においても認識されていると思われる。だが、アメリカのミニマリスト音楽の中心的存在として知られる現代音楽作曲家フィリップ・グラス (Philip Glass, 1937-) が『めぐりあう時間たち』のサウンドトラック担当者であったことは、グラスの知名度が低くないにもかかわらず、日本ではあまり認知されなかったのではなかろうか。後述するように、グラスが自身のキャリアの最初期から用いていたくり返しを重視するミニマリスト的作曲アプローチが、本考察においてはとりわけ重要なポイントとなる。

ヴァージニア・ウルフやマイケル・カニンガムのテキストをフィリップ・グラスのサウンドトラックを通して考察するのは、故なきことではない。というのも、ウルフやトマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) らを視野に入れた多岐にわたるイギリス小説群を、「くり返し」という観点でユニークかつ精緻な読みを展開したという点において現在でも最重要文献の一つとして数えられてきているヒリス・ミラーの『小説と反復 (*Fiction and Repetition*)』に収められた論考「死者の蘇りとしての反復 (*Mrs. Dalloway: Repetition as the Raising of the Dead*)」とグラスのミニマリスト的作曲アプローチには、高い親和性が見て取れると考えられるからである。『ダロウェイ夫人』にもグラスによる映画『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックにも、ひいては『めぐりあう時間たち』というテキストにも、「反復」が通奏低音のように存在しているのである。

『めぐりあう時間たち』の先行研究を確認すると、二種類に大別できる。第一には、先行テキスト『ダロウェイ夫人』とカニンガムのテキストとをアダプテーションというポストモダニズム的な観点で考察するもの、第二には『ダロウェイ夫人』におけるセプティマスの死やクラリッサとサリーのキスト

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

いったレズビアニズムに直結するテーマが『めぐりあう時間たち』の中でどう描かれ反復され解釈できるのかというものだ²。また、シッフとのインタビューにおける、『めぐりあう時間たち』は「すでに存在する過去の偉大な曲をベースに即興演奏したいと望んでいた」(113)というカニンガムの発言から、このテキストと『ダロウェイ夫人』とはメタフィクショナルな関係性でありながらも露呈させてしまう差異ことが、『めぐりあう時間たち』をメタモダニズム的にしていると指摘する廣田論文もある。

『ダロウェイ夫人』と『めぐりあう時間たち』の関係性は、先行テキストのテーマやプロットの進め方などが後続テキストにおいて反復される形で作られる。さらに、どちらのテキストも映画という別ジャンルによって反復されたと言うこともできる。反復を通して可視化される興味深いこの一連の現象は、ある意味においてこれらのテキストや映画を分析する際の核心となっているのかもしれない。語りにおける時制の使用法やテーマから『ダロウェイ夫人』における「反復」という問題に向き合ったヒリス・ミラーによる先行研究がその一角を占めるのは言うまでもないが、『めぐりあう時間たち』に登場する三人の女性たちもまた、後述するようにウルフやクラリッサの反復を生きていくことを鑑みれば、サウンドトラック担当者がグラスであることは単なる偶然ではなかろう。ここで本論の狙いと手順を示すこととしよう。本考察はヒリス・ミラーの犖みにならい、『めぐりあう時間たち』のテキストや映画を、そのサウンドトラックをベースに「反復」という観点から考察することを目的とする。まずはミニマリスト音楽、およびフィリップ・グラスについての紹介ならびに議論を行い、ミニマリスト音楽における特徴とはくり返しを多用すること、そして、そこには時間に関する一般認識に対する異議申し立てが込められていることを説明する。次に、ヒリス・ミラーの『ダロウェイ夫人』論に触れることでこのテキストにおけるくり返しについて吟味し概観する。その後、『めぐりあう時間たち』の概要を示し、このテキストおよび映画におけるくり返しや時間感覚の狂いについて考察し、『めぐりあう時間たち』の原作テキストならびに映画作品が、その形式面や内容面において、フィリップ・グラスによるサウンドトラックの屋台骨となるミニマリスト的作曲技法とどれほど一致しているのかを検証する。

1. ミニマリスト音楽の特徴とフィリップ・グラス

ミニマリスト音楽とは、1960年代から70年代にかけて、ニューヨークのイースト・ヴィレッジ付近を拠点として展開していった前衛音楽のひとつの流派で、その中で最もキャノン化された作曲家にはスティーヴ・ライヒ (Steve Reich, 1936-) とグラスが挙げられる。その他キャノン化されている作曲家としては、ラ・モンテ・ヤング (La Monte Young, 1935-)、テリー・ライリー (Terry Riley, 1935-) らがいる。シャルルマーニュ・パレシュタイン (Charlesmagne Palestine, 1947-)、トニー・コンラッド (Tony Conrad, 1940-2016)、フィル・ニブロック (Phill Niblock, 1933-) などキャノン化されていない作曲家も少なくない。ミニマリスト的音楽はまた、ポピュラー音楽との相性が良かったり、インド (古典) 音楽で多用される持続音 (ドローン) に特別な意味を見出した結果、作品の中に取り入れたりする作曲家もいるなど、ミニマリズム音楽と一口に言ってもそれほど単純なものではない³。

このミニマリスト音楽の特徴や定義について、シュワルツは以下のように説明している。

Minimalist music is based on the notion of reduction, the paring down to a minimum of the materials that a composer will use in a given work. In the classic minimalist compositions of the 1960s, practically every musical element – harmony, rhythm, dynamics, instrumentation – remains fixed for the duration of the work, or changes only very slowly. And the chief structural technique is unceasing repetition, exhilarating to some, mind-numbing to others. (9)

ラ・モンテ・ヤングによるミニマリスト音楽の定義「手段を最小限にして創られたもの (That which is created with a minimum of means)」(9) に触れつつ、「削ぎ落とし」を根幹とし、和音やリズム、強弱の変化、そして器楽編成を最小限にとどめること、そして「絶えることのないくり返し」がミニマリスト音楽における最大の特徴となっていることが理解できる。

In traditional Western classical music, repetition is used within

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

the context of a dramatic, directionalized form. (Think, for instance, of the development section of a symphony, where the repetition of motivic fragments enables the movement to build to a frenzy of excitement.) But in minimalism, repetition is used to create what Glass has called “intentionless music”, which replaces the goal-oriented directionality with absolute stasis. (9)

西洋の古典音楽を参照点とした時、どのようなミニマリスト音楽の特徴が浮かび上がるだろうか。西洋の古典音楽では、モチーフとなる断片を反復させることで楽曲の方向性を定めることが可能となり、たとえば楽章にクライマックスをもたらすという結果が期待できるとされている。それとは対照的に、ミニマリスト音楽におけるくり返しは「グラスの言う「意図のない音楽」を作る」ために用いられ、そこでは「ゴールに向かう方向性」は破棄され「絶対的な制止」が重視されることが理解できる。

Like so much non-Western music, minimalist pieces do not drive toward climaxes, do not build up patterns of tension and release, and do not provide emotional catharses. They demand a new kind of listening, one lacking in ‘traditional concepts of recollection and anticipation’, as Glass has put it. In minimalism, you will not find the contrasts – loud and soft, fast and slow, bombastic or lyrical – that are the substance of Western classical music. In fact, minimalism challenges our perception of time itself, since the music changes almost imperceptibly over minutes or even hours. (9)

この「絶対的な停滞」により得られる効果とは、先述した「クライマックスに向けた動きを取らない」ことに加え「緊張と緩和というパターンを構築しない」こと、そして「感情に訴えるカタルシス」を生み出さないこととある。このような聴取の方法を「回想や予測という伝統的なコンセプト」に依存しない「新たな聴取体系」としているが、これらすべては、「時間というものについての私たちの認識に対する異議申し立て」がミニマリスト音楽における

肝要なポイントであるという理解につながる⁴。つまり、アメリカのミニマリスト音楽における反復の効果とは、聴き手の時間感覚を狂わせることにあると言える。執拗に同じ（ような）フレーズに何度もさらされると、リスナーは聴取中に流れる時間とは別の、時間が止まった感覚、ひいては時間が逆行する感覚を得ることになるはずだ。

上記のようなミニマリスト音楽の特徴や性質は、フィリップ・グラスの音楽にも認めることができる。今や現代音楽の教科書的記述には必ず登場し、交響曲や協奏曲、そして映画のサウンドトラックといった幅広いジャンルを横断する多作で著名な作曲家グラスのミニマリスト的作曲アプローチが開花したのは、初期オペラ三部作の第一作においてである⁵。彼の初期代表作である舞台作品『浜辺のアインシュタイン』（*Einstein on the Beach*, 初演1976年）は短いフレーズの執拗な反復によるグラス流のミニマリズムが初めて前景化した前衛的作品で、その前衛性は、短いフレーズが4時間以上にわたって延々とくり返されること、そして、そのためにスコアが幾何学的構造を有することにある⁶。

ミニマリスト音楽に対しては次のような批判が向けられている。それは、ある決まったフレーズを長時間にわたり執拗にくり返される場合、その呼称はミニマリスト音楽よりもマクシマリスト音楽とした方が適切なのではないかという批判であるが、実はグラス自身もミニマリズムと括られることの違和感を露わにしている⁷。また、グラスは商業的成功や名声に囚われる傾向が強く、『浜辺のアインシュタイン』に聴ける前衛的作風は現在ではかなり希薄化してしまっているという指摘もある⁸。

グラス作品における前衛的作風の希薄化は『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックについても言えるかもしれないが、楽曲を分析すると、そこには細かいリフや決まったフレーズをくり返すミニマリスト的アプローチをしっかりと聴きとることができる。『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックでは弦楽器の小規模なアンサンブルがいわゆるコンヴェンションに則ったフレーズで楽曲全体を覆っていることが多く、そのためにミニマリスト的アプローチが聞き取りにくくなり、グラスに特有の前衛性は影を潜めていると言えなくはない。だが、たとえば『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックにある“Why Someone Have to Die”のピアノスコアを確認すると、同じようなリズムや音形を執拗にくり返していることが理解できる。しかも、四分

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

音符の連打が20小節まで続き、その後21小節以降に使用される新たなフレーズは他の楽曲——たとえば“The Poet Acts”——においても再利用されている。つまり、ある楽曲のフレーズがその曲の中だけでくり返されるのではなく、他の楽曲の中でもくり返されていくという特質が認められるのである。グラスによる意図的な作法により、『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックは十分にミニマリスト的特徴を有していると言えよう。

2. 『ダロウェイ夫人』におけるくり返し

ヒリス・ミラーの『小説と反復』における『ダロウェイ夫人』論（「死者の蘇りとしての反復」）を簡単に振り返ることにしたい。反復という観点でこのテキストを考察するためにミラーが言及するのは、ウルフ自身が日記において持ち出した「トンネルのプロセス」（182）である。これは表面上こそばらばらでも深部でつながっている登場人物たちの関係性を表すものとして理解されている。ミラーに言わせれば、「トンネルのプロセス」とは「登場人物が生きる現在の中に過去を蘇らせる」（189）こと、すなわち「連続性」（184）を可能とし、「登場人物にとって、現在とは永遠に過去をくり返すこと」（184）を意味している。

この論をやや具体的な文言に取めると、ミラーの論考の副題にある「死者の蘇りとしての反復」に落ち着くと考えられ、クラリッサとは長らく会えないままにいる旧友二人、すなわちサリーとピーターがそれぞれ、同日に、それもクラリッサがパーティーを開催する日に相次いで登場し、クラリッサとの久々の対面を果たすということがそれに相当する。

夜を迎えクラリッサのパーティーがいよいよ開催されると、ピーターとサリーがそれぞれパーティー会場に姿を見せる。三人の間に過去と現在との「連続性」が一見ここで作られそうに思えるが、そうはならず失敗するとミラーは言う。ピーターもサリーもクラリッサの批判の対象であること、特にクラリッサとサリーの間には階級問題があることが「連続性」を阻む要因となっているという解釈がその第一の理由としてある（195）⁹。加えて、「連続性」で可能となる「親交」（196）はほんの一瞬しか実現せず、パーティーの終了後、クラリッサ、サリー、ピーターの「連続性」は跡形もなく消失してしまうというのが第二の理由となる。

そんな中、「連続性」「親交」が唯一可能な登場人物はセプティマスだとミ

ラーは議論する。すなわち、死のみが戦死者エヴァンズとの「連続性」、「親交」を可能とするというのだ。ゆえに、「連続性を成功裡のものにできる唯一の過去のくり返しは、自殺行為である」(196)とミラーは結論づけている。ミラーはまた、作家ウルフ自身の自殺がセプティマスの自殺の再演となっていることを指摘し、ウルフの『ダロウェイ夫人』はテキスト内だけでなく彼女の実人生においてもくり返されていることを示唆している。

3. 『ダロウェイ夫人』を反復する『めぐりあう時間たち』

『めぐりあう時間たち』は時代も場所も異なる三人の主人公——『ダロウェイ夫人』の著者としてのヴァージニア・ウルフ、1949年のロサンゼルスで、夫のダン、子供のリッチーと暮らすローラ・ブラウン、そして20世紀末のニューヨークに住むクラリッサ・ヴォーン——を軸に展開していく。年代こそ異なるが、どの場面も6月のとある一日が共通の設定となっている。三人の登場人物を紹介しつつ『めぐりあう時間たち』の概要を示そう。

『めぐりあう時間たち』のプロローグを飾るのは1941年にヴァージニア・ウルフが入水自殺する瞬間であり、それ以降は1923年当時のロンドン郊外にあるリッチモンドのホガース・ハウスに居住中のウルフが描かれる。『ダロウェイ夫人』の執筆に勤しむウルフは自宅からの脱走を図ったり頭痛に悩まされたりしており、取り掛かっているテキストの構想——主人公クラリッサが女性を愛すること、クラリッサではなく詩人のヴィジョンをもった誰かが死ぬのだろうという構想——を練るのに余念がない。作家ウルフを描く場面は概ね、伝記的事実に基づいて記述されている。

ローラ・ブラウンは、第二次世界大戦終結から4年が経過した1949年のロサンゼルスに、帰還兵である夫ダンと三歳のリッチーと共に暮らしている¹⁰。妊娠中のローラはリッチーと共に誕生日を迎える夫のためのバースデイケーキを作ろうと意気込むものの、思うように調理ができず心が折れてしまう。そんな折、ローラを訪ねてきた近隣住人のキティーから重たい事実を突きつけられる。その後、自らの運転でホテルに向かう。その目的は『ダロウェイ夫人』の世界に浸り自殺に及ぶことだったが、果たすことなく帰宅の途につく。ローラはその夜、まるで何もなかったかのように誕生日を迎える夫を祝う。

ウルフが『ダロウェイ夫人』で構想したクラリッサ像や作家ウルフ自身が

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

ローラには投影されている。ローラの自宅をキティーが訪問する場面において、キティーは自分の不妊症に関連すると思われる病の検査入院があることをローラに告げると、二人は恐怖を分かち合いつつ惹かれあいキスをする。この場面は『ダロウェイ夫人』の回想場面において若い頃のクラリッサとサリーとがキスする場面を彷彿とさせる。また、ローラには作家ウルフの姿も投影されていると考えられよう。『ダロウェイ夫人』の読書に耽ろうとホテルの一室を借りたローラは、ウルフの姿を自分に重ね合わせ自死を考える（時系列的に考えれば、ローラは作家ウルフの自殺を知っているはずであり、ひいては『ダロウェイ夫人』に登場するセプティマスが自殺を遂げることも知っているはずだ）。ローラが自殺未遂直後に帰宅する場面の一節である以下の引用において、彼女の半分は日常生活における彼女自身が占めながらも、残りの半分以上を占めているのはヴァージニア・ウルフに他ならないと語り手は述べている。

... she is Virginia Woolf; and she is this other, the inchoate, tumbling thing known as herself, a mother, a driver, a swirling streak of pure life like the Milky Way, a friend of Kitty (whom she's kissed, who may be dying), ... (187)

また、ウルフの『ダロウェイ夫人』の世界に埋没しようとホテルの一室へ逃避するローラのさまは、ウルフの『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929)を想起させつつ、ウルフがリッチモンドからロンドンへの脱走を図った場面を連想させる仕掛けにもなっている。ローラ・ブラウンにはウルフ像が投影されており、ローラがウルフの反復となっていることは自明だ。

三人目の登場人物であるクラリッサ・ヴォーンは、20世紀末のニューヨーク在住の、出版社勤務の編集者である。彼女はエイズに罹患した詩人リチャードからはミセス・ダロウェイと愛称で呼ばれている。クラリッサは文学賞を受賞したりチャードの様子を見に伺い受賞記念パーティーへの出席をリチャードに促すも、彼はそれを頑なに拒んだ末、最期はクラリッサの眼前で投身自殺を果たしてしまう。その直後、クラリッサのもとへと駆けつけたのは他でもなくローラであった。自殺したりチャードの母とは、1949年のロサンゼルスに登場したローラだったのだ。

『めぐりあう時間たち』に登場するクラリッサは『ダロウェイ夫人』に登場するクラリッサの反復となっている。ファーストネームが共有されていることは言うまでもないが、冒頭部分において花を買いに外出すること、どちらの娘も年上の教師役の女性との濃密な関係性を保っていること、パーティーの準備中の自宅に突如現れた旧知の男性から、道ならぬ恋に落ちてしまったことの苦しみを聞かされることが、どちらのクラリッサにも共起している。このように、『めぐりあう時間たち』に登場するローラもクラリッサも、ウルフやダロウェイ夫人を反復されている形で具現化しているのは明白となる。

4. 『めぐりあう時間たち』内の反復と時間感覚の狂い

『めぐりあう時間たち』における反復というコンセプトやフィリップ・グラスのミニマリスト的作曲技法を考える際、20世紀末のニューヨークに設定された場面に登場するリチャードほど適切な登場人物はいない。クラリッサは『ダロウェイ夫人』に登場するクラリッサの反復であるように、リチャードは『ダロウェイ夫人』に登場するセプティマスの反復となっている。それは、両者とも共通して、住居の自室から投身自殺を図ることで最期を迎えること、リチャードはルイスとの、セプティマスは戦死者エヴァンズとのホモエロティックな関係性を有していること、古典ギリシャ語の歌を幻聴の中で聴いてしまうこと、リチャードはエイズという病に、セプティマスは戦争後遺症と思われる疾患に苦しんでいることから明白だ。以上のことから、クラリッサとリチャードが登場する場面は『ダロウェイ夫人』が強く意識されるトポスであるわけだが、この二人の言動は先行テキストである『ダロウェイ夫人』をくり返しているというよりは、むしろ『ダロウェイ夫人』に寄せているのではないかとさえ思わせる節がある。午後を迎えクラリッサがリチャードをパーティー会場へ案内しようと彼の部屋を訪れた際、リチャードもクラリッサも『ダロウェイ夫人』の場面を反復させていることが——それも意図的に反復させていることがわかる。

“Tell me a story, all right?”

“What kind of story?”

“Something from your day. From today. It could be the most

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

ordinary thing. That would be better, actually. The most ordinary event you can think of.”

“Richard—”

“Anything. Anything at all.”

“Well, this morning, before I came here, I went to buy flowers for the party.”

“Did you?”

“I did. It was a beautiful morning.”

“Was it?”

“Yes. It was beautiful. It was so... fresh. I bought the flowers and took them home and put them in water. There. End of story. Now come inside.”

“Fresh as if issued to children on a beach,” Richard says.

“You could say that.” (198-99)

リチャードがクラリッサに対し物語を話すようリクエストすると、クラリッサは「パーティー用の花を買いに行った」と応じる。このフレーズは、『めぐりあう時間たち』のクラリッサ自身がその朝の行動をリチャードに対し実際に語っているに過ぎないものの、これは同時に『ダロウェイ夫人』のクラリッサがその冒頭において花を買い出しに行く場面を意識して口にした言葉でもある。

問題は、『ダロウェイ夫人』を意識しているのはクラリッサだけにとどまらないことだ。「海辺の子どもたちが迎えた朝のように新鮮で」というリチャードの一節が『ダロウェイ夫人』の冒頭からの引用であることを考慮すれば、彼もまた『ダロウェイ夫人』を意識している。ゆえに、この直後に起こるリチャードの転落による自殺は、同じく転落による自殺を果たした『ダロウェイ夫人』のセプティマスの単なる反復とは言えないのではないだろうか。というのも、リチャードが『ダロウェイ夫人』を意識している以上、彼は意識的に自殺に及んだのではないかという可能性がどうしても出てしまうからだ。もう一つの可能性としてややメタ的に考えざるを得ないのは、『めぐりあう時間たち』の作者カニングガムがリチャードを転落死へと仕向けてはいないかということである。

詩人として活躍してきたリチャードは、自分の生い立ちを自作の中に書き込んできた。彼とは長い友人関係にあったクラリッサであればこそ、リチャードの作品に登場する人物は彼の母親だと特定することができた。クラリッサと、息子リチャードの転落死を知りすぐさまクラリッサのもとへ駆けつけたローラとのやりとりから、リチャードはいわば自伝的作品を執筆することで、自分の幼少期における母親との出来事を追体験、すなわち反復させていることがわかる。

They [Clarissa and Laura] settle into another silence, one that is neither intimate nor particularly uncomfortable. Here she is, then, Clarissa thinks; here is the woman from Richard's poetry. Here is the lost mother, the thwarted suicide; here is the woman who walked away. It is both shocking and comforting that such a figure could, in fact, prove to be an ordinary-looking old woman seated on a sofa with her hands in her lap. (220-21)

リチャードの作品そのものも、ある意味、反復による産物である。具体的に言えば、1949年の場面において、一度は自殺を決意しホテルに向かうローラに取り残された幼いころのリチャード（リッチー）が味わったはずの擬似的な母の死を、詩人リチャードは自作の中で、女性登場人物を突如死なせる形で再演させているのだ。これは『めぐりあう時間たち』の一場面が、その登場人物の著作物の中でくり返されたということでもある。

リチャードにとっての自伝的著作は擬似的な母の死を反復させる機能を持っているが、クラリッサやローラにとって彼の著作は別の意味合いを持つことが次の一節から明らかだ。

“You've read the poems?”

“I have. And the novel.”

She [Laura] knows, then. She knows all about Clarissa, and she knows that she herself, Laura Brown, is the ghost and goddess in a small body of private myths made public (if “public” isn't a term too grand for the small, stubborn band of poetry

readers who remain). She knows she has been worshipped and despised; she knows she has obsessed a man who might, conceivably, prove to be a significant artist. Here she sits, freckled, in a floral print dress. She says calmly, of her son, that he was a wonderful writer. (221)

クラリッサやローラにとって、この場面は「ゴースト」との対面に他ならない。リチャードは母親を自作品中に投影していると考えるクラリッサにすれば、リチャードの作品においても彼の実生活においても死んだものでしかなかった母親が急に目の前に姿を現したのだ。ローラにとってもそれは同じだ。リチャードはクラリッサの名前を変えることなく自作の中で用いている¹¹。つまりこれは、ローラにすれば、息子の作品の中でしか知りようのない「ゴースト」的で実体のないクラリッサとの対面なのだ。これらのことをヒリス・ミラーの論考に引き寄せて考えれば、リチャードがその執筆活動の中で行った「連続性」への試みは、母親ローラを作中で殺すことによる反復、そして自らの命を絶つことによる反復を通して、クラリッサとローラという互いに「ゴースト」でしかなかった相手どうしが対面する場を設けるに等しい。

反復以外にリチャードを際立たせるのは、彼の持つ時間感覚の狂いである。クラリッサがリチャードのアパートを訪れ、彼の文学賞受賞記念パーティーの開催を彼に伝える際にこれは最も顕著となる。これには2つの事例がある。第一の事例として、授賞式はその夜に開催される予定であるにもかかわらず、リチャードはすでに受賞済みだという誤解をしてしまうことが挙げられる(63)。第二の事例としては、池のほとりでしたキスをクラリッサは数万年前のような遠い過去のことと捉える一方、リチャードは現在進行形で捉えてしまうことが挙げられる(66)。リチャードは自分の時間感覚の狂いをはっきり自覚しているのが、次の引用から読み取れる。

“Sorry. I seem to keep thinking things have already happened. When you asked if I remembered about the party and the ceremony, I thought you meant, did I remember having gone to them. And I did remember. I seem to have fallen out of time.”

“The party and ceremony are tonight. In the future.”

“I understand. In a way, I understand. But, you see, I seem to have gone into the future, too. I have a distinct recollection of the party that hasn't happened yet. I remember the award ceremony perfectly.” (62)

この引用箇所は極めて重要だ。というのも、リチャードはこの箇所において、パーティーや受賞は「すでにあったことだと考え続けているようだ」とか、「まだ行われていないパーティーのはっきりした記憶がある」とかとクラリッサに対して語ってしまっているからだ。よって、「自分は時間というものから抜け落ちてしまったようだ」というクラリッサへの語りは、時間感覚の喪失をリチャード自身が認識していることの証となる。このことは、ミニマリスト音楽がくり返しを多用することで生み出される効果、つまり、「時間というものについての私たちの認識に対し異議申し立て」を、さまざまなレベルで反復を内包する『めぐりあう時間たち』がリチャードを通して示しているということになる。

ところで、ヒリス・ミラーの見解に則れば、『ダロウェイ夫人』のセプティマスは自殺に及んだ末に、死者エヴァンズとの「連続性」を得ることができた。『めぐりあう時間たち』のリチャードは果たして何を得たのだろうか。

自殺することでリチャードに得るものがあるとするれば、それは、彼が幻視や幻聴によって常日頃感じる目にみえない死者との「連続性」を得ることになる¹²。ここでは二通りの考え方が可能だろう。一つはジェイムズ・シッフの論考が提示しているように、ウルフの『ダロウェイ夫人』の背景が第一次世界大戦後の世界であるように、リチャードの住む 20 世紀末はエイズ感染がその背景になっているという指摘だ (367)。となれば、リチャードの「連続性」とはエイズによる死者との「連続性」ということになる。もう一つの視座は、リチャードと母ローラとの「連続性」だろう。先述したとおり、幼い頃のリチャードが味わった母ローラとの擬似的な死別が、自作の詩の中で母親を曖昧な形であろうとも書き込むよう彼を駆り立てたのではなかろうか。

結論

このテキストは冒頭にあるヴァージニア・ウルフの自殺場面から開始し、

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

リチャードの自殺場面で結部となることを考慮すると、このテキスト自体が死で始まり死で終わる円環構造に特徴づけられるくり返しの構造を有していると言える。また、ローラやリチャードといった登場人物に焦点を当てると、ウルフの『ダロウェイ夫人』がカニンガムの『めぐりあう時間たち』の中でくり返されていること、また、カニンガムのテキスト内における自律的なくり返しも立ち現れてくる。

問題提起をして本論を締めることとしたい。それは、『めぐりあう時間たち』はミニマリスト小説、もしくはミニマリスト映画と言えるのかという問題だ。換言すれば、フィリップ・グラスの音楽は、内容面や形式面で『めぐりあう時間たち』とどれほど一致しているだろうかという問いでもある。まずはサウンドトラック CD のジャケットに寄せられたカニンガムの文章を参照しよう。

For me, Glass can find in three repeated notes something of the strange rapture of sameness that Woolf discovered in a woman named Clarissa Dalloway doing errands on an ordinary summer morning. We are creatures who repeat ourselves, we humans, and if we refuse to embrace repetition – if we balk at art that seeks to praise its textures and rhythms, its endless subtle variations – we ignore much of what we mean by life itself. (8)

この引用の中でカニンガムは、くり返しこそが私たち人間の生き方を特徴づけると言っている。つまり、カニンガムは『ダロウェイ夫人』をコピーすること以上に、「反復」「くり返し」を作品に持ち込むことを戦略的に行ったと理解してよかろう。「100年前も人間は本質的に同じように見えた」(25)というのはクラリッサというフィルターを通した語り手の地の文にある一節だが、ヴァージニア・ウルフからローラ・ブラウンを経由してクラリッサ・ヴォーンに至るまで、人間のあり方がくり返しにすぎないことを『めぐりあう時間たち』は物語っている。反復という観点から見れば、『めぐりあう時間たち』は見事なミニマリスト小説といえるのではなかろうか。

では、フィリップ・グラスによる映画サウンドトラックはどうだろうか。グラスは『めぐりあう時間たち』のブルーレイ版で視聴可能な特典映像“The

Music of *The Hours*”において、「テーマのヴァリエーションが繰り返されるから——冒頭の曲がずっと流れてる印象になる」と語っている。彼がミニマリスト的技巧を作曲に持ち込む限り、グラスの意図は映画サウンドトラックにおいて実現されていると言って良いだろう。最後になすべきことは、この映画サウンドトラックに収められた楽曲がどのように使用されているかという点について検証することだ。

映画で用いられた楽曲について精査すると、ある同一の楽曲が複数の場面で使用されることが判明した。“The Poet Acts”はブルーレイの第1章と第15章において、“I’m Going to Make a Cake”は第4章と第7章において、そして“Escape!”は第4章と第13章において使用されている。これらの事例により、「冒頭の曲がずっと流れている」印象を与えようとするグラスの狙い以上の効果が生み出されることになるだろう。『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックCDを一通り再生するだけでも「冒頭の曲がずっと流れている」作りになっているところを、映像作品でグラスのスコアを当てていく際、特定の楽曲を複数の場面で使用することにより、時間という概念に対して持たれている認識への異議申し立ての度合いが増すことが容易に想像できるからだ。

これらのことを考慮すると、映画『めぐりあう時間たち』におけるサウンドトラックの使用法は、映画制作側の思惑以上に、形式面でも内容面でもミニマリスト的であったと指摘できるのではなかろうか。映画のサウンドトラックにおけるミニマリスト的作曲技法はカニンガムの『めぐりあう時間たち』の持つ形式や内容と合致するのである¹³。

この結論に対して疑義も提示されよう。まずは人選に絡んだ問題である。ダルドリーやカニンガム、デイヴィッド・ヘアラ映画『めぐりあう時間たち』の制作側がフィリップ・グラスを映画のサウンドトラック担当者に抜擢した経緯や狙いについて詳細に触れる文献は、人選というセンシティブな事情に直結するためか残念ながら確認できなかった。だが、その唯一の情報源であるブルーレイの特典映像では、作曲家候補はグラス以外にも存在していたことが明かされている（他の候補者がもし公表されていればグラスとの比較が可能となり、制作側の意図がより明確にできたかもしれない）。つまり、少なくとも、映画『めぐりあう時間たち』はグラスありきで制作された映画ではない。第二に、グラスは映画制作側の意向を汲み取りつつサウンドトラック

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

を制作するのだから、そのサウンドトラックが映画の形式や内容面と合致するのは当然ではないか、という問いがある。この問いへの応答として喚起ならびに強調したいのは、本論での焦点はこのサウンドトラックのモダス・オペランディとでも言うべきミニマリスト音楽の作曲技巧にあることだ。そこで以下の事例を参照しよう。先述したサウンドトラックのうち、“I’m Going to Make a Cake”はグラスのオペラ『サチャグラハ』の“Protest”からの、“Tearing Herself Away”は旧作『グラスワークス』(*Glassworks*, 1982)の“Islands”からの、そして“Escape!”は旧作『ソロ・ピアノ』(*Solo Piano*, 1989)の“Metamorphosis Two”からの引用で構築されている。これら三曲は映画『めぐりあう時間たち』のサウンドトラックのために新たに生み出されたのではなく、グラスの旧作の一部からの引用(すなわちくり返し)なのだ。換言すれば、グラスが長年こだわってきたミニマリスト的作曲技法という形式と『めぐりあう時間たち』というテキストや映画との関係性こそが本論の考察対象であることに注意を払われたい。

本論はヒリス・ミラーによる『小説と反復』の響にならい、ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』やマイケル・カニングガムの『めぐりあう時間たち』の映画および原作小説を、フィリップ・グラスによるサウンドトラックを通して考察することを狙ったものである。グラスのミニマリスト的作曲技法は反復を執拗に多用することが最大の特徴であり、時間に対する一般的な認識に対する異議申し立てとして機能する。グラスによるスコアの特徴は、同じく反復を特徴とするカニングガムのテキストやその映画版の特徴との高い親和性をもたらすものであり、映画制作においてカニングガムとグラスが組んだタグは、テキスト、映像そして音楽それぞれの形式面や内容面が高度に合致する極めて稀有な事例と言えるのである。

注

1. 本論考は2023年3月5日、オンライン上で開催された2022年度日本ヴァージニア・ウルフ協会第126回例会での口頭発表を大幅に加筆および修正したものである。例会参加者、とくにコメントをくださった方々には深く感謝いたします。
2. 前者のタイプに属す先行研究には、デングラー、ヒューズ、シッフ、スポーラーらの研究があり、後者のタイプに属す先行研究にはアリー、ダー

シー、ハフィー、オルク、ウッドらの研究がある。また、本論考と類似の照準を定めたヒルマンとクリスプの共著による“Chiming the Hours: A Philip Glass Soundtrack”もグラスによるサウンドトラックを考察の対象としているものの、映画の冒頭のみ限定しているため決して有益ではなかった。

3. ロック・ミュージシャンのルー・リード (Lou Reed, 1942-2013) の音楽や彼の最初期のバンドであるヴェルヴェット・アンダーグラウンドの楽曲が前者の例である。また、後者の例としてはラ・モンテ・ヤングがその代表例であるが、テリー・ライリーもフィリップ・グラスもインドでの音楽修行を経ている。
4. バーナード (121-22) は「時間というものについての私たちの認識に対する異議申し立て」のことを「エンディングの不在 (endlessness)」と説明しているようだが、グラスの音楽を含めたミニマリスト音楽の特徴を「完全に時間性を否定することはしないが、いかなる直線的な時間感覚とも決別すること」(122) とし、特にグラスは「旧来のタイプの時間 (conventional time variety)」(122) を捨て去っていると議論している。
5. グラスのオペラ初期三部作とは、『浜辺のアインシュタイン』(*Einstein on the Beach*, 1976)、『サチャグラハ』(*Satyagraha*, 1979)、そして『アクナーテン』(*Akhnaten*, 1983) のことを指す。彼のその他の作品に、1984年のロサンゼルス・オリンピックゲームにおける式典で用いられた『オリンピアン』(*The Olympian*, 1984) やエドガー・アラン・ポーの作品を下敷きとする『アッシャー家の崩落』(*The Fall of the House of Usher*, 1988) がある。
6. 『浜辺のアインシュタイン』は日本では2度目となる公演が2022年10月8、9日に横浜で行われた。
7. 例えばフィリップ・グラスとの対談となっているダックワース (342) を参照。
8. グラスとステイーヴ・ライヒは1970年代半ばに音楽活動の商業性が顕著となり、この二人の作曲家を「ミニマリスト」と呼ぶことの意義が1980年代はじめには消失したとシュワルツは指摘している (12)。グラス自身、集客が現実的問題としてあることをダックワースとの対談の中で述べている (339-40)。

9. ウルフは『ダロウェイ夫人』を執筆中に、このテキストが社会批判を意図していたことをミラーは踏まえている (194)。
10. ローラが登場するロサンゼルス時代設定が第二次世界大戦終結の4年後であることに対しては、違和感を禁じ得ない。というのは、『ダロウェイ夫人』の設定となっているのは1923年であり、これは第一次世界大戦の5年後であるからだ。
11. クラリッサの自宅をアポイントメントなしで訪れるルイスは、このことをクラリッサに指摘している (129)。
12. 『めぐりあう時間たち』において、リチャードはクラリッサに対し幻視や幻聴について語っている (59、198)。
13. ヒルマンとクリスプは、映画のサウンドトラックは「時間の型づくり (time patterning)」(289) に適しているとして、グラスによる音楽を高く評価している。

引用文献・音源

- Alley, Henry. “Mrs. Dalloway and Three of Its Contemporary Children.” *Papers on Language and Literature*, vol. 42, no. 4, fall 2006, pp.401-19.
- Bernard, Jonathan W. “The Minimalist Aesthetic in the Plastic Arts and in Music.” *Perspectives of New Music*, vol. 31, no. 1, winter 1993, pp. 86-132.
- Cunningham, Michael. *The Hours*. Fourth Estate, 1998. マイケル・カニンガム. 『めぐりあう時間たち 三人のダロウェイ夫人』. 高橋和久訳. 集英社, 2003年.
- Cunningham, Michael and James Schiff. “An Interview with Michael Cunningham.” *The Missouri Review*, vol. 26, no. 2, 2003, pp. 111-28.
- D’Arcy, Sara. “Mourning, Gender Melancholia, and Subversive Homoeroticism in Virginia Woolf’s *Mrs. Dalloway* and Michael Cunningham’s *The Hours*.” *Leitura Flutuante*, no. 4, 2012, pp. 43-58.
- Dengler, Mary. “‘An Emptiness about the Heart of Life’: A Reformed Approach to Virginia Woolf’s *Mrs. Dalloway* and Michael Cunningham’s *The Hours*.” *Pro Rege*, vol. 39, no. 3, 2011, pp. 10-18.

- Duckworth, William. *Talking Music: Conversations with John Cage, Philip Glass, Laurie Anderson, and Five Generations of American Experimental Composers*. Da Capo Press, 1999.
- Glass, Philip. *Philip Glass: The Piano Collection*. Hal Leonard, 2006.
- . *The Hours*. Nonsuch Records, 2002.
- Haffey, Kate. “Exquisite Moments and the Temporality of the Kiss in *Mrs. Dalloway* and *The Hours*.” *Narrative*, vol. 18, no. 2, 2010, pp. 137-62.
- Hillman, Roger and Deborah Crisp. “Chiming the Hours: A Philip Glass Soundtrack.” *Virginia Woolf and Music*, edited by Adriana Varga. Indiana UP, 2014, pp. 288-310.
- Hughes, Mary Joe. “Michael Cunningham’s *The Hours* and Postmodern Artistic Re-Presentation.” *Critique*, vol. 45, no. 4, 2004, pp. 349-61.
- Miller, J. Hillis. *Fiction and Repetition: Seven English Novels*. Harvard UP, 1982. ヒリス・ミラー. 『小説と反復——七つのイギリス小説』. 玉井ほか訳. 英宝社, 1991年.
- Olk, Claudia. “Vision, Intermediality, and Spectatorship in *Mrs. Dalloway* and *The Hours*.” *Amerikastudien/American Studies*, vol. 49, no. 2, 2004, pp. 191-217.
- Potter, Keith. *Four Musical Minimalists: La Monte Young, Terry Riley, Steve Reich, Philip Glass*. Cambridge UP, 2000.
- Schiff, James. “Rewriting Woolf’s *Mrs. Dalloway*: Homage, Sexual Identity, and the Single-Day Novel by Cunningham, Lippincott, and Lanchester.” *Critique*, vol. 45, no. 4, 2004, pp. 363-82.
- Schwarz, Robert. *Minimalists*. Phaidon Press, 1996.
- Spohrer, Erika. “Seeing Stars: Commodity Stardom in Michael Cunningham’s *The Hours* and Virginia Woolf’s *Mrs. Dalloway*.” *Arizona Quarterly: A Journal of American Literature, Culture, and Theory*, vol. 61, no. 2, summer 2005, pp. 114-32.
- “The Music of *The Hours*.” *The Hours*. Directed by Stephen Daldry. 2002. Miramax International / Paramount Pictures, 2021. Blu-ray.
- Wood, Olivia. “Time, Place, and “Mrs. D”: Uptake from *Mrs. Dalloway* to

くり返される『ダロウェイ夫人』——『めぐりあう時間たち』と
フィリップ・グラスによるミニマリスト的サウンドトラック

The Hours.” *Virginia Woolf Miscellany*, no. 93, Spring/Summer 2018,
pp. 26-28.

Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. 1925. Penguin, 1992. ヴァージニア・ウルフ. 『ダロウェイ夫人』. 丹治愛訳. 集英社, 1998年.

Zwerdling, Alex. “Woolf’s “The Hours.”” *English Literature in Transition: 1880-1920*, vol. 41, no.1, 1998, pp. 94-98.

廣田園子. 「“The Woman in the Book” ——『ジ・アワーズ』における文学的不滅の希求」. 『ヴァージニア・ウルフ研究』 32号, 2015, pp. 52-65.

【書籍紹介】

舟川一彦

『ウォルター・ペイターの
ギリシア研究』（金星堂、2023年）



町本 亮大

近代イギリスの思想世界のなかで、ウォルター・ペイターは固有の位置を占めている。特別に専門的な関心を持つのでない限り、この文人は1873年に出版された『ルネサンス』——厳密に言えばこの時点では『ルネサンス史研究』というタイトルが与えられていた——という一冊の芸術批評の書により、イギリスの唯美主義とデカダンスの文学潮流を作り出した人物として記憶される。作り出したという言い方では、この控えめで用心深い性格の批評家について実態とは大きく異なった印象を与えてしまうかもしれない。この本を自分にとっての「黄金の書」といったオスカー・ワイルドによって、またフランス象徴主義を英語圏に紹介した批評家アーサー・シモンズによって、『ルネサンス』はデカダンスの文学運動における聖典とみなされるようになった。しかし、ペイター自身のその後のキャリアはといえば、『ルネサンス』の引き起こしたセンセーションの沈静化、弁明、埋め合わせの過程として理解されなくてはならないところがある——少なくとも、『ルネサンス』の切り開いたラディカルな地平、転覆のポテンシャルを突き詰める方向には行かなかったのである。サウンディングズ英語英米文学会前会長の舟川一彦名誉教授（上智大学）が先ごろ上梓された新著『ウォルター・ペイターのギリシア

研究』は、まさに『ルネサンス』のその後の研究である。

とはいえその後を語る前に、『ルネサンス』の何がそれほど衝撃的であったのか、ある程度のことを知っておく必要がある。とりわけ守旧派から危険視されたのはその刹那主義的な「結語」であり、刻々と移りゆく一瞬一瞬に沈潜して唯一無二の印象を捕捉し経験それじたいに至高の目的を見出す瞬間の美学である。ヴィクトル・ユゴーのいうように、われわれはみな「死刑囚」である——結語を締め括るのに持ち出されるのがこの不穏な隠喩である。

私たちはある期間を与えられているが、やがてこの地上から姿を消してしまう。ある者はこの期間をもものぐさに過ごし、またある者は崇高な情熱に、また少なくとも「この世の子らたち」〔ルカによる福音書〕のうちで最も賢明な人びとは、芸術と歌で過ごす。というのも、私たちに与えられた唯一の機会、その期間を引きのばし、できる限り多くの脈動を、その与えられた時間のなかにつぎ込むためにあるからだ。大いなる情熱は、この生き生きとした生の感覚、愛の恍惚と悲哀、無私のものであれ、利己的なものであれ、私たちの多くに自然に訪れる、さまざまな形式の熱烈な活動を私たちに与えることだろう。〔…〕詩的情熱、美への欲求、芸術のために芸術を愛好する心によってこそ、そうした英知が最も多く得られる。なぜなら、芸術は、刻々過ぎてゆく瞬間に、またただそれらの瞬間のためだけに、最高の特性のみを与えることをはっきりと意図しているからである。（『ルネサンス』富士川義之訳、白水Uボックス、236頁）

「ほんのわずかの時間内に、最も微妙な感覚によって認めうるものすべてを見逃さず、「硬い、宝石のような焰で絶えず燃えていること、この恍惚状態エクスタシーを維持すること、これこそが人生における成功ということにほかならない」。習慣を形成するのは、経験の特有性を捉え損なう「目の働きの粗雑さ」ゆえである。哲学であれ、神学であれ、道徳規範であれ、「経験の一部を犠牲にするよう私たちに要求する理論や、観念や、体系は、私たちにに対して実際に何も要求する権利はない」（234-35頁）。

これが芸術至上主義のマニフェストとして若者たちに歓迎されたとしても無理のないことであった。それからおよそ20年後、ワイルドは『ドリアン・

グレイの肖像』に付した挑発的な序文のなかで、「道徳的な本とか、不道徳な本というものは存在しない」と言った——「本は上手く書かれているか、出来が悪いか、それだけである」。道徳的感化に役立つかどうかは、芸術作品の価値とはまるで関係がない。

役に立つものを作るなら、それに惚れこんではいけない。役に立たないものを作るなら、かならずそれに激しく惚れこむのでなくてはいけない。

あらゆる芸術は、まったく役に立たないものだ。

ワイルドの序文は、ペイターの結語が不可避免的に導く一つの終着点だった。

ペイターの結語では、宗教の前提する永続的価値が否定されているように見える。じっさい『ルネサンス』は、教会勢力から集中的なバッシングを受け、同書の第二版からは結語の削除を余儀なくされた。これらの経緯は『ウォルター・ペイターのギリシア研究』でも簡単に紹介されている。のちに『プラトンとプラトン哲学』と題した著作で共感的に描かれるソクラテスと同じように、ペイターは「青年に悪影響を及ぼし、国が認める宗教を軽んじたとして断罪された」（23頁）。ペイターは1862年にオクスフォード大学を卒業し、まもなくブレイズノーズ・カレッジのチューターとして学生の指導をしながら、講師として大学でギリシア哲学を講じるようになる。そこで学生を墮落させる教師として目をつけられたのである。オクスフォードの主教ジョン・マカーネスは、1875年の演説のなかで「わざわざ『ルネサンス』結語の一部を引用して大学内に広がる不信仰と世俗精神に警鐘を鳴らし」、こう問いかけた——「一世代前にオクスフォードで立派に活躍した人が、自分が学んだのとこれほどかけ離れた教を息子に吸収してほしくないと思ったとしても、何の不思議があるのか？」（舟川訳、24頁）

もう一点、〈その後〉を語るためにどうしても知っておかなくてはならないのが、ウィリアム・ハーディングという名のベイリオル・カレッジの学生とのあいだの「スキャンダル」である。文学的野心に燃えるハーディングは、自らの詩に同性愛的なほのめかしを書き込む大胆さを持つ派手な人物で、ペイターがこの学生と互いを‘darling’と親密に呼びあう手紙の存在が発覚したのである。ベイリオルの学寮長でペイターのかつての師でもあるベンジャミ

ン・ジャウエットはこのことを知り、ペイターの^{プロクター}学生監への選任を妨げた——この1874年の学内人事の顛末は、実は伝記的資料の不足のために確固たるエヴィデンスに基礎づけられたものとはいえないようだが、研究者のあいだで繰り返し語られ一つの定説のようなものになっている。19世紀後半の歴史叙述において、ルネサンスという文化現象はしばしば性的な放埒や逸脱と結びつけられた。同時に、とりわけジャウエットによるプラトン導入以後のオクスフォードでは、古代ギリシアのテキストがホモセクシュアル・アイデンティティの形成において重要な媒介者として機能したと考えられている。こうした事情から、ペイター自身はハーディングとの一件以後、学内者の顔色を窺いながら慎重に著述活動に取り組むようになったわけだが、「スキャンダル」にまつわる伝記的事実を発掘したビリー・アンドルー・インマンの1988年の報告から現在に至るまでのペイター研究においては、『ルネサンス』もその後のギリシア研究も、セクシュアリティの観点から解釈するアプローチが主流となった——学術的批評の世界でペイターに対する興味が衰えることなく現在も活況を呈しているのは、かなりの程度このアプローチのおかげであることは間違いない。

*

『ウォルター・ペイターのギリシア研究』の本論は、三つの章により構成される。

第一章 オクスフォードのペイター——プラトン論と大学教育の問題

第二章 ギリシア神話論と十九世紀古典学の新方向

第三章 彫刻は倫理的観念の伝達者たりうるか

これらの章で扱われるのは、主として二つの書物である。一つは、既に言及した『プラトンとプラトン哲学』、1893年に出版されたペイターにとって生前最後の著書である。もう一つは死後出版の『ギリシア研究』で、遺稿管理人のC・L・シャドウェルによって1895年に刊行された。『ギリシア研究』の前半を構成するのは70年代後半に書かれた一連の神話論で、後半は80年代以降に発表された彫刻論を再録したものと考えれば同書の輪郭をだいたいのところ正しく捉えたことになる。ここで上掲の目次に戻って言えば、どこで何が議論の対象になっているか、容易に想像がつかだろう。ペイターの

古典学者としての側面を正面から扱う研究は英語圏においても珍しいものだから、本書のシンプルかつ見通しのよい構成、『ギリシア研究』に収録された各エッセイの初出に関する情報と同書にまとめられるまでの経緯を整理した一覧表は、『ルネサンス』以降のペイターを知らない読者にとってありがたいはからいである。

とはいえ、ペイターの古典学関連の文章を扱うことの何が面白いのだろうか？ ずいぶんニッチな問題設定であり、よほどマニアックな関心を持つ者にしか意味のないテーマではないだろうか？ そんなふうになってしまうのは、ヴィクトリア時代のオクスフォードで学んだ者にとって古典学が持った意味、当時の知識世界において古典古代のテキストが担われていた役割を、われわれが想像することが困難になっているからである。当時の大学で、「古典は現代の大学におけるような専門科目ではなかった」。ペイターの学んだオクスフォードにおいて、

それは学位を得ようとするすべての学生が卒業試験で習熟度を証明しなければならない必修科目であり、古典学の研究者になろうとする学生というよりはむしろ国教会聖職者や政治家、国家公務員や弁護士を目指す若者に課された一般教養科目だった。特に[…][近代作家による古典の例解]というオクスフォード特有の方法によって、古典古代を〈過去のもの〉と見るのではなく、近代（現代）の思想・文化・社会つまり「わがこと」と関連づけて考えることが奨励されていた。専門の学としての古典研究に必須の客観的学問の態度はそもそもここにはなかったのだ。したがって、ペイターの古典研究について語ることは、「業績」評価ではなく、彼が同時代の知的状況——教会や大学、出版界と読書界、知識人間のコネクション——をどう受け止め、それにどう働きかけようとしたかを語ることにほかならない。（2頁）

こうなると、『十九世紀オクスフォード——人文学の宿命』（Sophia University Press、2000年）という重厚な研究書で、当時の知的世界で展開した古典学と大学教育をめぐる論争やオクスフォード大学内の制度的変遷の過程を明瞭に整理し伶俐な分析を加えた著者が、このテーマに取り組む必然

性がみえてくる。ペイターは「人生の大部分をカレッジの自室とオクスフォードの自宅で過ごし、死後はオクスフォードの共同墓地に葬られた」人物である（11頁）。そんな彼にとって、「大学はいわば彼を取り巻く〈世界〉だったと言っても大袈裟ではない」のであり、それほどオクスフォードと結びつきが強く、古典学関連の著作も残っていて、しかもイギリスにおける芸術思潮の一つの流れを不可逆的に決定づけるほどのインパクトを残した批評家が、『十九世紀オクスフォード』においてまったく扱われなかったのは少し意外に感じられる。だから、『ウォルター・ペイターのギリシア研究』はそれじたいで完結した研究書であるけれども、著者の出発点といえる問題関心への回帰という側面も持っている。

たとえば、先の引用にある「近代作家による古典の例解」という論点。これは1830年の試験規定改訂において導入された新条項であり、そこには「試験の対象となる修辞学、詩学、倫理学、政治学は「古代の作家から導き出せる範囲」のものとするが、「随時、便宜に応じて、近代作家の著作によって例解（illustrate）してもよい」と書かれている」（18頁）。大学の試験規定の変遷にかかわるこのような枝葉末節にこだわってペイター解釈のために何の役に立つのか、と思われるかもしれない。しかし著者によれば、『ルネサンス』のラディカルな結語すら、このオクスフォード特有の「作法」に則って書かれているとみることができる。というのも、結語の議論にはフィヒテ、スペンサー、パークリー、カントら近代の哲学者たちの影響が認められるが、エピグラフに置かれるのはプラトンの『クラテュロス』からの一文であり、結語の全体はプラトンの引くヘラクレイトスの万物流転の思想を一連の「近代作家」に依拠しながら「例解」というオクスフォードの知的慣行に倣った議論を展開しているものと解釈することができるのだ。ペイターは「自身の過激な信条を表明するにあたって、[...] オクスフォードの哲学教師としてのプロトコルを守り、最低限の安全策を講じたつもりだったのだろう」（20頁）。もともと「例解」が導入された当初は、アリストテレスを国教会神学のレンズを通じて解釈するというような護教的目的を期待されるものであったが、世紀の後半になると「古典をだしにした近代思想それ自体の研究という側面が大きくなっていった」という（19頁）。試験規定の改訂という「枝葉末節」が唯美主義とデカダンスの震源となった一片のテキストのかたちを決定づける役割を果たしたのだとしたら、われわれは『十九世紀オクスフォー

ド』という書物から学ぶべきことをいまだ十分に消化しきれていないというほかないのではないか？

*

ペイターは、歴史的舞台を背景に想像上の人物を描く一連のフィクション作品を残している。『ウォルター・ペイターのギリシア研究』の決定的なところで、ペイターの造形した〈架空の肖像〉——1887年刊行の短編集のタイトル——への言及が挿入されるのが印象的だ。第一章が議論の対象とする『プラトンとプラトン哲学』は大学での講義をもとにしたものであり、ペイターは同書を通じて「文献講読による知性の鍛錬と倫理的向上というオクスフォードの古典教育を支えてきた理念に忠実に従って教育活動に邁進」する姿を見せつつ、学内者に対して「従順さ」のメッセージを発したとひとまずは解釈することができる（73頁）。それでも自己目的化した試験制度の功罪をめぐってジャウエットとは異なる判断を下しているように思える記述が散見されるのだが、「エメラルド・アスウォート」と題された短編をみると、古代スパルタ的教育と明白に重ね合わせられているイギリス古典教育の産んだ青年兵士アスウォート——作中で「若きアポロン」と呼ばれる——は、作者にとってとうぜん美しい人物でなくてはならなかったのだとわれわれは感じる。ペイターは競争試験に反対しながら、その抑圧的機構の創造する「作品」である従順な青年の美を賛嘆せずにはいられなかったのだろうか？

第二章で論じられる『ギリシア研究』所収の神話論は、初出時の発表媒体の政治的性向や、執筆にあたりペイターが影響を受けた学的アプローチ——比較言語学、比較宗教学、人類学、考古学——がジャウエット流のテキスト中心の伝統的アプローチと相容れないものであった事実を考慮に入れるなら、『ルネサンス』以後のペイターとしては危なっかしいほどラディカルな領域に足を踏み入れているところがある。このポテンシャルは、また別の架空の肖像「ドニ・ローセロワ」をみると明白になる。この短編の主人公は「中世におけるディオニュソスの化身」たる〈流刑の神〉——ハインリヒ・ハイネから継承したモチーフ——で、彼は「民衆煽動のカリスマ的な能力」をもっている。すなわちこれは19世紀人にとって「近い過去であるフランス革命における革命派の恐怖政治を想起させるイメージ」であった（74頁）。それ

では70年代後半のギリシア神話論が著者のあいかわらずのラディカリズムへの邁進を証しているのかといえ、そう単純にはいかない。神話論の一編「ディオニュソス研究」のある箇所に、ペイターは以下のような「いささか場違いな脚注」を付しているのだ。

ディオニュソスが秘かに民主制に肩入れしていたのではないかと勘ぐる人たちがいる。実際のところ、彼は大衆の心を自由にしたに過ぎず、彼がエレウテロス（解放者）だというのも、アッティカで最初に彼を受け入れてくれた小さな町エレウテライを終生忘れることがなかったからというだけのことなのに。（舟川訳、75頁）

第三章の締めくくりに触れられる〈架空の肖像〉はとりわけ印象的だ。この章は『ギリシア研究』後半の彫刻論を扱うものだが、理論や体系によって固有の経験への感度を鈍らせることに対する「結語」の警告を思えば、意想外に図式的な思考が一連の論考を統制しているような印象を受ける。万物流転に通じる「断片化と拡散——遠心的（centrifugal）な方向——に向かう傾向」すなわち「イオニア的傾向」と、「統一と安定」を志向する「求心的（centripetal）」な「ドーリス的傾向」、この二つの傾向の「和解」を達成したのがギリシア彫刻であったのではないか——この仮説がペイターの一連の彫刻論を動機づけていると著者は考える。二つの力の和解により、「彫刻がギリシア人の倫理的理想を表現し現代人を導くという重い任務に堪えうものになったことをペイターは示したかった」というのである（98頁）。けっきょくのところで、ギリシア彫刻のいわば弁証法的発展の真ん中の段階に至るところまで辿ったのち、ペイターが心臓発作により急逝し、このプロジェクトは完遂されなかった。

かわりにペイターは死の前年、ギリシア神話の神アポロンを描く〈架空の肖像〉——ここでアポロンはキリスト教の支配する中世まで生き延びフランスの片田舎で農場労働者に身をやつしている——「ピカルディーのアポロン」を発表する。副修道院長サン＝ジャンが、じつのところディオニュソス的人物として造形されるアポリオンの寝姿を初めて目撃したときの反応は、〈流刑の神〉に向けられる彼のまなざしが彫刻に対する際のそれと同種のものであることを示している。

低い垂木に吊るされたランプの輝きの下で、サン＝ジャン副院長は生まれて初めて人体の形姿を——神の手で作り出されたばかりのいにしえのアダムを——眺めているような気がした。この家の召使いか、あるいは作男だろうか。部屋の四隅に金の織物みたいにうず高く積み上げられた羊毛の上でたまたま眠り込んでしまったのだろう。農奴だ！ それにしてもこの安らぎようといったら、とても農奴とは思えない。このポーズには王者の、いや、神のような風格さえある。その豊かな、暖かみのある白い四肢の曲線に、一箇所でも手直しすべきところがあるなどと思う者がいるだろうか。また、束ねて不思議な結ばれをつくった金髪が秀麗な額にかかるその顔の高貴な目鼻立ちにも。それなのに、この眠れる若者の胸、喉、唇の自然な動きには何という愛らしい優しさもまた感じられることだろう。見た目にはこれほど穢れなきものが実は魔性を秘めていて、目に見えぬ悪で汚されているなどということがありうるものなのか。（舟川訳、116-17頁）

「彫刻作品を描写する一種のエクフラシス」として解釈できるこの一節は、「キリスト教時代に生きる異教の神アポリオンの姿にアポロンの秩序とディオニュソスの生命力の統合を映し出すこの短編を通して、彫刻論の目標が「ペイターの文学的想像力の中で」果たされたことを示唆しているのではないか——これが第三章の締めくくりに提示される見方である（122頁）。

しかし、これはべつだん「結論」として提示されるわけでない。「少しばかり詭弁を弄するならば」——これは著者じしんが用いている言葉である——こういうことが言えるのではないかと読者に向けてカジュアルに差し出されるのみである。これが「詭弁」であるというのは著者の学術的良心の表現であって、本書もまたこれまでの著作と同様、確実に言いうることをひとつひとつ積み重ね、丁寧に論旨を追う読者を道に迷わせることは決してなく、また妙にクリアカットで人目を引く結論をむりやり拵えようともしない。（多様な内容を扱うペイターの神話論や彫刻論の中身をここで一編ずつ紹介することをあえてしなかったのは、なにしろ本書じたいが各編の明晰な導入を提示しており、それを逐一ここに引き写す必要性を感じなかったからである。）神話や彫刻をめぐる評論でときに見晴らしのいい図式を提示するかと思え

ば、別の評論でそれと相矛盾することを主張し、またそれらの双方とのあいだにどう整合性を見出してよいのか分からない〈架空の肖像〉を魅力的に描き出す曖昧で捉え難い著述家を相手にする場合、これはかえって有効なアプローチではないだろうか？ アポリオンをまなざすサン＝ジャンの心中を覗きみる一節の巧みな訳文に触発され、読者もまたペイターのまなざすギリシアについて自分なりの「詭弁」を弄してみたくなるはずだ。

高柳俊一教授追悼特集



May 5, 2001

Shunichi Tabayama

「高柳俊一先生追悼号」刊行にあたって

下永 裕基

長年にわたり顧問としてサウンディングズ英語英米文学会を支えてくださった高柳俊一先生（上智大学名誉教授）が昨年7月、永眠されました。

英文学者として、またカトリック司祭として研鑽を積まれた高柳先生の歩みは、略述しても長くなりますが、以下にご紹介したいと思います。

- | | |
|------------|--|
| 1932年3月31日 | 新潟県に生まれる。 |
| 1954年 | 上智大学文学部英文学科を卒業、 同大学大学院西洋文化研究科修士課程に進学。 |
| 同 9月 | 米国ゴンザガ大学（ワシントン州）に留学。 |
| 1955年7月 | 同大学にて学位（MA）取得。 |
| 同 9月 | 米国フォーダム大学（ニューヨーク）大学院博士 課程に進学。 |
| 1958年7月 | 同課程修了、最終論文口述試験に合格後、帰国。 |
| 1958年9月 | 上智大学文学部英文学科専任講師。 |
| 1959年2月 | フォーダム大学より学位（Ph.D.）取得。 |
| 1960年3月31日 | イエズス会入会。これより広島で修練期。 |
| 1963年～65年 | 東京のイエズス会神学院で司祭養成課程（哲学）。 |
| 1965年4月 | 上智大学文学部英文学科に戻り、教鞭を執る。 |
| 1966年4月 | 上智大学文学部英文学科助教授。 |

下永 裕基

| | |
|------------|---|
| 1966年10月 | 西ドイツ（当時）ザンクト・ゲオルゲン大学で司祭養成課程（神学）。 |
| 1969年7月26日 | フランクフルトで司祭に叙階される。 その後ミュンヘン近郊で第三修練期（～同12月）。 |
| 1970年4月 | 上智大学文学部英文学科に戻り、教鞭を執る。 |
| 1974年4月 | 同・教授。 |
| 1977～83年 | 上智大学文学部英文学科長。 |
| 1979～83年 | 上智大学大学院文学研究科英米文学専攻主任。 |
| 1985～97年 | 上智大学キリスト教文化研究所所長。 |
| 1987～97年 | 上智大学大学院文学研究科英米文学専攻主任。 |
| 1996年～ | 同・特遇教授、特別契約教授。 |
| 1999～2003年 | 教皇庁国際神学委員会委員。 |
| 2002年～ | 上智大学名誉教授。 |
| 2004～2008年 | 日本T.S. エリオット協会会長。 |
| 2010～14年 | 日本基督教学会理事長。 |
| 2022年7月28日 | 東京の修道院（ロヨラハウス）にて逝去、享年90。 |

高柳先生の特筆すべき功績のひとつに、1979年より編纂委員として、91年以降は編纂委員会代表として『新カトリック大事典』の刊行を成功に導いたことが挙げられます（学校法人上智学院『新カトリック大事典』編纂委員会編、全4巻＋総索引＋別巻、1996～2010年、研究社）。この事典の刊行後も、先生はひきつづき電子版制作に向けて新項目を追加するなど尽力されました（電子版は研究社より2016年10月に公開）。増補・改訂に莫大な時間と労力を必要とする紙の書籍から、変化のスピードが著しい現代に対応した電子版への移行を、高柳先生は紙媒体からの「解放」と表現され、40年近くに及んだ大事業の成果を見事に新しい時代に適応されました。「〔急激に発展していく情報処理の技術を〕人間性を豊かに発展させ深めるための障害とするのでなく、緊張関係をとどめつつも、そのポジティブな性格を取り込むことが必要」¹と記す高柳先生には、ただ書齋に閉じこもって考察にいそむ学者ではなく、世間と向き合う実務家としての側面もありました。

キリスト教神学と強く結びつけられた高柳先生の文学研究の特色は、西洋の精神史という大きな文脈の中で展開されるところにありました。著書は多数ありますが、英文学分野の主著としては『精神史のなかの英文学』（南窓社、1977）のほか、いわゆる「T・S・エリオット三部作」——『T・S・エリオット研究』（南窓社、1987）、『T・S・エリオットの比較文学的研究』（南窓社、1988）、『T・S・エリオットの思想形成』（南窓社、1990）——が、そして神学分野の主著としては『現代人の神学』（新教出版社、1974）や『カール・ラーナー研究』（南窓社、1993）が挙げられるでしょう。多数ある論文のなかには、キリスト教伝承の流れに古英詩『ベオウルフ』を位置づけようとする論考も含まれ、先生が文学作品の解釈において古代・中世そして近現代を貫く精神史の流れをつねに意識しておられたことはそのことから感じられます。その他、訳書としてはM・ヒンメルファーブ『黙示文学の世界』（教文館、2013）、モース・ペッカム『悲劇のヴィジョンを超えて 一九世紀におけるアイデンティティの探求』（野谷啓二氏との共訳、上智大学出版、2014）、A・E・マクグラス『宗教改革の思想』（教文館、2000）などがあり、さらに監修の役を担われた書籍も多数あります。

戦後まもない頃の上智大学、そして米国の留学先で、高柳先生はイエズス会の学者たちから薫陶を受けられました。そしてニューヨーク市のフォードム大学留学中の1957年、ブロンクスの教会で受洗されました。修道会に入会するには受洗後少なくとも3年経過していることが必要ですが、高柳先生はその期間を経るとすぐにイエズス会の門戸を叩かれました。28歳の誕生日が、入会の日でした。西洋の精神伝統に深く根ざした学問研究の道にその全生涯をささげようという若き日の確固たる決意が、そこに読み取れるように思います。そしてその決意のとおり学者として、修道司祭としての道を高柳先生は歩みとおされました。生活の拠点は大学在職時はもちろんのこと、教職を退かれた後も——ご逝去のまさに1年前まで——上智大学内のS Jハウスにあり、先生は晩年まで書評を中心に熱心に執筆を続けられました。

本会に所属する会員には高柳先生に指導を受け、活躍している研究者が多数います。いただいた学恩に対し心からの感謝をこめ、先生の永遠の安息のためにお祈りしつつ、ここに今年度の本誌を「高柳俊一先生追悼号」として

下永 裕基

献げたいと思います。

注

1. 高柳俊一「『新カトリック大事典』電子版刊行にあたって」
(<https://kod.kenkyusha.co.jp/demo/catholic/honmon.jsp?id=0002040>)。2023年7月31日閲覧。

弔辞

舟川 一彦

高柳俊一先生を慕う数え切れぬほどの教え子のひとりとして、謹んで先生にお別れの言葉を述べさせていただきます。

四日前、先生が帰天されたという知らせを受け、言いようのない喪失感に襲われました。というのは、先生を失うことは、上智大学で学び上智大学で働く上で自分の支えとすべき精神を身をもって示して下さった方を失うことにほかならないからです。

五十一年前、英文科に入学する多くの新入生と同じように、英文学という学問がどういうものかろくに知らず入学した私にとって、ドイツから戻られて間もない若き高柳先生は、ドイツ語なまりの日本語で学生の理解を超える学問的知見をはにかみがちに語る、近づきがたい方でした。

大学院に入って指導教授になっていただき、研究者としての先生により近くで接するようになって、先生の学問の幅広さと奥深さが次第にわかるようになってきました。その真骨頂は、先生が文学と神学の両方を専門的に修業され、その両方をヨーロッパ文明の歴史的展開の文脈の中で理解する視座を得られたところにあります。そしてこれは、ヨゼフ・ロゲンドルフ先生から受け継がれた上智の伝統であり、上智大学文学部の精神そのものでありました。

私とその文学部に奉職し、先生の同僚となっても、長年にわたって先生は英文学科長、専攻主任、文学研究科委員長の職を務められ、学科や学部

舟川 一彦

の屋台骨を支えられるとともに、T・S・エリオットについての三部作をはじめ数々の研究書を上梓され、研究の第一線で活躍されました。そのうちの何冊かを書評という形で世に紹介するお手伝いができたことは私にとって光栄であり、誇りとするところです。また先生は、大学院英米文学専攻の学生を数多く指導され、個性豊かな研究者を育成されました。

初めて教室で訾咳に接した頃の先生の年齢をはるかに超えてしまった自分が、当時の先生にはるかに及ばない次元にとどまっていることに忸怩たる思いを持ちつつも、私が最後まで上智の精神から大きく外れることなく仕事をしてきたと自負できるのは、高柳先生が残して下さった教えがあったからです。

言い尽くせない感謝の念をもって、お見送りいたします。

令和四年八月一日

上智大学英文学科 舟川一彦

水魚の交わりであったような…

藤井 哲

四谷のキャンパスでお見掛けしていた頃の高柳俊一先生は、私のような怠惰な学生には近寄り難い存在でしたから、卒論指導を受ける1973年になってやっと御縁が始まったのです。もっとも注意点を立ち話で承るだけでしたし、修論時でもメモを手渡される程度でしたから、この怠け者は先生に指導意欲を掻き立てることなく卒業したことになります。したがって師弟関係は(あったにしても)きわめて希薄だったように思われるのです。そうした私が記憶する光景は断片でしかありませんが、それはそれで先生のお人柄を偲ぶ縁よすがになるかもしれません。

まずは1980年のこと、私の披露宴に遙々長崎までお運びくださった先生は、祝辞でも「つとに秀才の誉れ高く」といった嘘八百を並べたりはせず、「藤井君は就職でも結婚でも運に恵まれたけれど、それだって財産のうちで…」と満座の意表を衝いてきたのです。こうした寸鉄を帯びた物言いこそ「…らしいよね」と、先生の講筵に列したことのある卒業生なら思い当たるのではないのでしょうか。

そう出られると私としても「幸運、ばかりに頼ってもいられそうにありませんから、駄文を書くたびに先生に抜刷をお送りするようになったのですが、ウンともスンとも返事がありません。その堂々たる筆無精振りが如何にも先生らしく思ってしまうのも、やはりお人柄のしからしむところなのでしょう。といて常にも「我関せず焉、を極め込んでいたでもなく、見るべきは見てお

られたようでした。例えば、私が福岡大学へ転出して間もない1991年でしたが、ある会合ですれ違い様に先生から「アレは審査に回しておいたから…」と耳打ちされたことがあり、「アレって？」と戸惑わされた場面もありました。然り気ない風に（しかし不器用に）私の数年前の論考を褒めてくださったらしい稀有な例でした。そんな調子でしたから抜刷攻勢はほぼ空振りだったのですが、隔年くらいにキャンパス内のSJハウスまで先生をお訪ねしますと、楽屋落ちを交えた雑談に半時間ほどお付き合いくださったものです。そして、近著があれば手土産に持たせてくださるのですが、スマートな読者たり得ぬ私には何とも汗顔の至りでした。

ところが2006年の訪問でのこと、拙い自著の近刊案内を御覧に入れたところ、「そろそろ博士を考えてみたら？」と藪から棒式の御下問です。なにぶんにも超俗的なところのある先生のことですから、打診する相手を取り違えたのかもしれない。あるいは出版を^{ねぎら}ろうつもりが（それとても慣れない仕儀故に）話題の選択を誤ったのかもしれない。もちろん私なりに危うい展開も予想したのですが、成り行きに任せて学位は貰ってしまいました。例の「幸運」が御利益をもたらせたのでありましょう。但し、名に実が伴わぬチグハグ感が残っていて、やっと2014年になってライフワークのようなものを脱稿し、（これは手前味噌になりますが）遅れ馳せながら身の丈を学位に合わせられた気になったのです。そうした経緯もあって、私は刊行当日に先生を上智大学図書館までお遣い立して納本手続きを代行して頂きました。カウンターで先生は「私の教え子が出した本だから…」と鼻を高くされたのではないかと妄想しております。

幸いにして我が magnum opus は2019年にある賞を贈られることになり、授賞式の日 SJ ハウスまで御注進に及びましたところ、先生は小首を傾げながら口許をニッとさせて、何と！「もう書誌なんか流行らないんじゃない？」と呟いたのです。どうかすると nonchalant な雰囲気勝る先生でしたが、私のような雑魚が英文学界に游弋するのを遠目に見守っておられたのなら、そこはかたない師弟関係が漂っていたのでありましょう。惜しむらくは、私がそうした覚醒に至り、少々の混ぜっ返しにも動じなくなった11月13日の訪問こそが、はしなくも先生との今生の別れとなってしまったのです。

高柳俊一教授追悼



ここで上掲の写真について書き添えておきます。日本基督教学会が、当時会長であられた先生の肝煎りだったのでしょいか、2013年9月に福岡市の西南学院大学で大会を開催しました。早速それに便乗しまして、福岡大学英语学科に奉職する上智大学卒の前田雅晴氏（文英）・安井篤氏（外英）・中村ひろ子氏（外英）・藤井（文英）がおよそ20年先輩である先生を当地の「なだ万」にお招きし、全盛時代の母校に想いを馳せつつ打ち解けた歓談に興じました。しかしそれから10年が過ぎてみると、福大勢は退職して看板を「名誉教授」に掛け替えてしまい、上智大学の名声を世に高からしめてきた四ッ谷の教授陣は世代交代を果たしてしまいましたから、SJハウスにあって^{しんがり}殿を固めておられた高柳先生が2022年に長逝されるに及んで、私どもが仰ぎ見てきた時代がいよいよ終焉を告げたようにも思ってしまうのです。

Requiescat In Pace

故高柳俊一先生を偲んで

中山 理

今でも目を閉じると、筆者が上智大学院時代（1976～1981年）、いつも精力的に学術研究や講義に打ち込まれていた高柳先生のお姿が目には浮かびます。とりわけ先生から熱心なご指導をいただいたのは、大学院の博士後期課程でした。ミルトンの *De Doctrina Christiana* を全邦訳してレポートを書いたのも、先生から「神学の方法論は文学研究にも応用できる」というアドバイスをいただのがきっかけです。

博士課程修了論文を書き上げた後、英国でミルトン研究の泰斗、故 Alastair Fowler 先生のもとで研究をしたいと報告したとき、「では、博士論文をだしてみなさい」と思いもかけぬ励ましの言葉をいただいたことを今でも思い出します。

留学の成果の一つとして、イギリスの学術ジャーナルに掲載された論文、Proserpina, Jacob, the Fields of Ceres: Milton's Disjunctive Similes. (1984). *English*. The Oxford Univ. Press for the English Association, xxxiii (146) を先生にご覧いただいたところ、1985年、同論文にて上智大学英文学会より「ロゲン賞」（本賞）を授与されることになりました。また同年、共著で上梓した『挑発するミルトン—ミルトンと現代批評—』（彩流社）にも非常に的確な書評を書いてくださいました。

大学院を修了してから20年以上もの月日が流れた2002年、遅ればせながら、博士論文を提出することになりましたが、主査を引き受けてくださっ

高柳俊一教授追悼

たのは高柳先生です。その後、同論文は *Images of Their Glorious Maker: Iconology in Milton's Poetry*. (2002). Macmillan Language House として出版され、William Baker & Kenneth Womack ed. (2004). *The Year's Work in the English Studies Volume 83*. Oxford Univ. Press. (p.448) に好意的な書評が掲載されました。

数々の懐かしい思い出を造ってくださった先生は今、天国で何をなさっているのでしょうか。そのような想いを馳せる時、ミルトンの *Lycidas* の最後の一節が脳裏に浮かびます。

And now the Sun had stretch'd out all the hills,
And now was dropt into the Western bay;
At last he rose, and twitch'd his Mantle blew:
To morrow to fresh Woods, and Pastures new.

「今はとて、彼立ちあがり、／空色の、衣きぬをまとひつ、／明日こそは、新しき森、新しき野に」いらっしやるであろう先生の生前のご功績をたたえ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ネイティヴ以上 ——高柳先生とマシー先生

巽 孝之

大学院に入学したころといえば、右も左もわかっていない。学部時代にはウィリアム・カーリー先生の指導のもとでサミュエル・ベケットと安部公房の比較文学研究を仕上げたものの、院試の口頭試問で、生地竹郎先生がこの方向に疑義を呈された。そもそも「生きている作家」を扱うことが大学院以降の学術的研究に不向きであること自体、全然わかっちゃいなかったのである。

つまり、全く展望ゼロ、自覚ゼロのまま大学院生活に突入してしまったのが、当時の私だった。否応なしに1978年4月から大学院修士課程の授業が始まり、高柳俊一先生の演習ではジェイムズ・フレイザー『金枝篇』をめぐるジョン・ヴィッカーリーの研究書 *The Literary Impact of The Golden Bough* (Princeton UP, 1976) が教科書に指定される。このころ博士課程の舟川一彦先輩が新入生のシゴキ役として君臨しておられ、頼りない私にはテコ入れが不可欠と直感されたのか、授業の発表分担が決まるや否や「これだけは読んどけ」と巨大な紙バッグいっぱい詰まった参考文献をドサッと渡された。「え？こんなにたくさん読むの？」と言うのが正直な反応だった。物理的な重みと学問研究の重みを初めて実感した瞬間である。しかしまさにこの重みによって、以後の大学院教育における心構えをピシッと注入された気がしたものだ。もっとも、同じ授業には、学部からのクラスメートにして現在では上智英文同窓会で活躍しておられる竹之内祥子さんもいて、授業が進んでしばらくした頃の休み時間に「このヒト [ヴィッカーリー] って結局、どの章も言

うことおんなじよね」とクールに評していたのが強烈だった。当時は批評書研究書のたぐいを読むだけで大変だったから、こうした客観的評価をたちまち下せる実力派同級生と机を並べている事実には圧倒されたのである。

ちょうどそのころといえば、のちに『T・S・エリオット研究』（1987年）と並ぶ高柳先生の代表作となる『精神史のなかの英文学』（1977年）が出たばかりで、それも重要参考文献だった。『ユートピアと都市』（1975年）、『都市の神学』（1977年）では、いわゆる英米文学研究プロパーでは決して参照されることのないハーヴィー・コックスの『世俗都市』（1965年）が援用されているのも魅力だった。もちろん、そうした著作群から浮かび上がってくる先生の当時の関心、すなわち默示的想像力や世俗都市論、それに批評理論研究はいずれも理解するには相当な努力を要した。けれども、いま書棚からそれらの本を取り出すと、同書の随所に傍線や書き込みがあり、当時の自分が高柳先生の著書を通して、いかに英文学研究というものを理解しようと苦闘していたかがわかる。というのも、高柳先生の著作には絶えず欧米の最新研究動向に目配りをしつつ、必ずしもそれらを鵜呑みにすることなく、あくまで文学と神学を横断する独自の視座から率直な判断を下す姿勢が窺われたからである。当時、アメリカ新批評の影響が色濃い先生方が二次資料や先行研究を参考にすることを禁じた一方、高柳先生にはむしろ膨大な欧米の先行研究を読みこなし我がものとしつつ、そうしたネイティブの論客たちと拮抗し時に立ち超えていくような批評理論的姿勢があった。その姿勢に一切ブレがないことは、まだ二十代の時に書かれたノースロップ・フライ『批評の解剖』長文書評や『ペーオウルフ』論も、当時四十六歳だった先生の最新論考と遜色なく、『精神史のなかの英文学』に収められていたことから判明しよう。当時二十代だった自分も、そんな論文群が書けるだろうかと、自問したものだ。

こうして博士課程における高柳先生のリーディング・コースではM・H・エイブラムスの『自然的超自然主義』やフランク・カーモードの『終わりの意識』をめぐるペーパーを提出し、ヨーロッパ文学思想史の見地からごく自然に構造主義や記号論、脱構築に傾倒していく。そんな経緯がポーをめぐる博士課程修了論文に反映したのは当然だった。その結果、1983年1月の口頭試問で、劇的な光景が展開する。

論文を読んだフランシス・マシー先生が「これは文学の論文ではないでしょう」と全否定し、激怒したかのように、机の上に放り出したのだ。

ところがそれに対して間髪入れず、高柳先生が「いや、いまの欧米の文学研究の理論はこの方向なのです」と強力にかばってくださったのである。

マシー先生も高柳先生もともにイエズス会司祭であるが、にもかかわらず全く対照的な文学研究の姿勢を貫き、激突した瞬間だった。時に高柳先生は1932年生まれだから、当時51歳。マシー先生は1926年生まれだから、当時57歳。ほんの六歳差とはいえ、両者の間には新批評とポスト新批評という明確な分水嶺が存在するように思われた。加えて、当時の私はすでにポスト構造主義の文脈における批評理論の方向が定まってしまうので、今変更のしようもない。その結果、この博士課程修了論文の一章の和訳版「作品主権をめぐる暴力——*The Narrative of Arthur Gordon Pym* 小論」が翌年1984年、第七回日本英文学会新人賞の受賞作に選ばれるのだから、必ずしも「文学の論文ではない」こともなかった、ということになるのか。

ここで公平を期すならば、実はマシー先生には、1974年の学部入学時代から83年の大学院修了時点まで9年間、さまざまにお世話になっている。ウィリアム・フォークナーやソール・ベロー、ジョン・チーヴァーといったアメリカの主流文学作家を研究するとともに、夏目漱石の『門』や遠藤周作『おバカさん』の英訳をこなし、ラルフ・ウォルドー・エマソンと北村透谷の比較文学研究では余人の追随を許さない。そんな先生の教え方は情熱的にして厳しいもので、学生が誰かのノートを丸写ししているのが発覚すると、それを取り上げ、まっぴたつにビリビリ引き裂いたという強烈なエピソードが残っている。

さて私に関する限りは、毎回のレポートがお気に召したのか、先生の主宰する聖書研究会に誘われ、知らず知らずして同時代アメリカの最先端のキリスト教活動にふれることができた。先生がカトリック初台教会を舞台に、日本における指導的司祭として関わった「聖霊による刷新運動」(カリスマ・ミーティング)が過激で危険な性格を帯びていたのは、確かである。しかし、そのミーティングに参加するうちに、私はこれまで必ずしも広くは語ってこなかった、しかもどうてい人並みとはいえない体験をすることになり、その点でマシー先生には深く感謝しているからだ。結論からいえば、それはエクソシズム、すなわち悪魔祓いの儀式である。しかも、たんに傍観していたのではない。司式はマシー先生、被術者はほかならぬこのわたし自身であった。

ことのおこりは、学部三年だった1976年10月末。それに先立つ夏休み

の二ヶ月間、カリー先生を引率者として上智大学が主催する二ヶ月間にわたるアメリカ横断ホームステイ付き旅行に、私が参加したことに端を発する。このツアーにおいて、参加した学部生たちがとても仲良くなったので、さらに親睦を深めるため、静岡県三島はパサデナタウンというリゾートでバンガローを借り、10名ほどで一種の合宿を企画したのだ。このとき、宴会のあと興が乗った仲間のひとりが、わたしを含む四名を夜中のドライブに誘ったのだが、ハンドルを握る彼が飲酒していたのが発覚したときには、もう後の祭り。クルマはカーブを踏み外し崖から転落した。とはいえ、奇跡的にも車道からほんの数メートル下に段差があり、その茂みに引っかかったことで、かろうじて助かった。当時は携帯もスマホもない時代であったから、わたしは崖をよじのぼり、車道に出て、何とか公衆電話から救急車を呼んだという次第。もしもそこに段差や茂みがなかったら、その下は奈落だったのだから、いまここでこうした文章を書いてはいなかったはずである。

みな軽傷ではあったが、まったくの無傷というわけでもない。わたし自身も、頭を二針ほど縫うケガを負い、三島の病院にて一週間程入院した。

ほうほうのていで退院し、念のためということで、自宅の近くの東大医科学研究所にて脳波を測るが、結果は異常。いささか怖くなり、大学に戻って、マシー先生に報告したところ、即座にこう宣言された。

「悪魔祓いをしましょう。それしかありません」。

九死に一生を得たのは、むしろ天使がいたからではないか、という発想も頭をかすめたが、なにしろ圧倒的にパワフルな自信にみちみちた神父を前にしては、反論する勇気もない。この時私は、ちょうど三年前の1973年、ウィリアム・ブラッティ原作、ウィリアム・フリードキン監督のホラー映画『エクソシスト』が大ヒットしたことを、思い出さざるをえなかった。あの作品で描かれていたのは、舞台こそワシントン DCとはいえ、現代ではもはやとうに廃れたはずの中世的儀式ではなかったか？ 高度成長期ど真ん中の東京でエクソシズムなど、ほんとうにありうるのか？

そのような疑問も頭をもたげたが、しかし、あくまで聖霊の力に導かれるマシー先生は、いささかの迷いもないロゴス中心主義の権化であった。かくしてクルトゥル・ハイムにおける秘儀の終わりに、先生はこう言い放つー「悪魔よ、出て行け！」。このときの圧倒的な神父像がのちにジャック・デリダを読むさいどれだけ役に立ったことか。

以上の背景があったがために、聖霊による刷新運動からポスト構造主義的批評理論へシフトしていった私を、マシー先生がいささか苦々しく思っておられたであろうことは、推測に難くない。にもかかわらず、マシー先生からは単なるネイティヴの教授という以上にアメリカ聖霊主義の最先端を吸収したからこそ、高柳先生を經由したジョージ・スタイナーやデリダのベンヤミン經由によるバベルの塔の再解釈が実感を伴って迫ってきたのだ。

まさにこうしたアンビヴァレンスこそが、上智大学という知的環境から与えられた最大の賜物である。ネイティヴ教授が言語を超えた文化を異国に移植することから生じる接木の可能性と、ネイティヴ学者にも優る先鋭的学殖により文学研究の素朴な地域的制約を超えた脱国家的な可能性とが、今も私の批評的想像力を刺激し続けている。

敬愛する高柳俊一先生へ

野谷 啓二

高柳先生、いかがお過ごしですか。栄光の世界でも書物がふんだんにあることを祈ります。聖書やキリスト教神学の本だけでなく、ギリシア・ローマの古典から現代の世俗文献も必要ですね。いい意味でブックishだった先生のこと、本がなければ何も始まらないと勝手に想像しています。あまりに地上的でしょうか。本という他者との対話をとおして幸せを感じていらしたのですよね。そういえばT.S. エリオット、カール・ラーナー、ノースロップ・フライ、先生より遅れてそちらに行かれたヨゼフ・ラッツインガー師にはもうお会いになりましたか。今日は先生から賜りましたご厚誼を思い返しつつ、去来する思いを認めたいと思います。

私の先生への偽らざる気持ちは『上智英文 90 年』（彩流社、2018 年）に記したとおりです。私はその文章を、完成した『新カトリック大事典』を携えヴァチカンを訪れた「先生の姿をザビエルはどのように眺めていたであろうか」という問いで結びました。直接表現しませんでしたでしたが、先生のようなキリスト教ヒューマニズムに生きる人を生み出したイエズス会の東洋ミッションは成功であったと確信しています。こんなことを言うのは、オックスフォードのチャンピオン・ホール（ミルワード先生の母校）に行くと、一度ならず日本布教が成功であったかどうかと尋ねられたからです。思えばイエズス会は、当時のカトリック世界で実に優秀かつ貴重な人材を伝説の島ジバングにつき込んだのでした。確かに信者の数だけを見れば、資本主義の

費用対効果の観点からは、うまくいったとは言えないでしょう。それでも先生のようなイエズス会精神を体現し、上智の教員として長らく研究と教育に献身する会員を生んだことを考えれば、ザビエルは微笑を持って迎えられたに違いないのです。

人間のアイデンティティは複層的ですが、先生が先生であられるのはイエズス会員だからではないでしょうか。イエズス会は、ヨーロッパ中世を作り上げたベネディクト会やシトー会といった観想修道会とも、ドミニコ会やフランシスコ会といった中世盛期の托鉢修道会とも違います。彼らはすべて出家者集団で自らを俗界から完全に切り離しましたが、対抗宗教改革の旗手としてのイエズス会は、修道服を脱ぎ捨て、チャペルでの聖務日課も廃止し、機動力ある軍隊組織にも似た知的武装集団として組織されました。中世的な神信仰の枠を超え、近代の到来を告げるルネッサンス・ヒューマニズムの美德をも包摂したのです。創造主が人の子となったのだから人間性も評価する。この点、近代の個人の確立に影響を及ぼしたピューリタニズムがひどく人間性の悪にこだわりを見せたのとは対照的です。イエズス会はキリスト教文化を研究し広めていくのに最適な団体で、日本の数少ないカトリック総合大学である上智が *divinitas* と *humanitas* の両方を追求する修道会に経営されているのは誠に幸いなことです。AMDG (*ad majorem Dei Gloriam* = より大いなる神の栄光のために) はイエズス会の標語ですが、高柳先生はそのような会の精神を十分に生きられたと思うのです。

UNIVERSITAS SEDIS SAPIENTIAE、これが上智大学です。sedis は *sedes* (*seat, chair*) の単数属格、sapieniae は *sapientia* (*sophia, wisdom*) の単数属格ですから、知恵の座の大学ということでしょう。「上智」が *Divine Wisdom* のことであれば、キリスト・イエスを意味します。それを膝の上に抱くのは聖母マリアになります。上智の校章にはこのラテン語と鷲が図像として使われています。その♪「ソフィアの鷲のまなざし射るは *Lux Veritatis*」(真理の光) ♪なので、かなりの知的興奮を禁じ得ません。上智の座の大学、聖母マリアの大学で学んだ者は真理を追い求める人となるのです。この点においても、私は大先輩でもある先生の姿を認めるのです。先生はいわゆる *cradle Catholic* ではなく自らの意思で、あるイエズス会員の影響のもとでカトリック信者になられたのでした。日本の少子化以上の深刻さでイエズス会員は減少し、上智「らしさ」が無くなり、世俗化していく状況に

危惧を感じておられましたね。『新カトリック大事典』編集室の縮小移動や『ソフィア』の廃刊は確かに残念だと思います。

私も齢を重ねると来し方を振り返ることが増えてきました。そしてあらためて Providence という語が意識されるのです。初めてアメリカに行ったとき D.C. からボストンに向かう飛行機のパイロットはずいぶん饒舌な人で、今マンハッタンの上空、もう少しするとプロヴィデンスから降下してローガン空港に着陸する、とまるでガイドのようにアナウンスするのが印象に残りました。ロードアイランド州の州都プロヴィデンス。バプティストのロジャー・ウィリアムズがベイ・コロニーから追われて作った町で、フィラデルフィアと並んでアメリカ思想史上、重要な意義のある都市です。この事象を「神の計画」と捉える感覚は、神なき世界を生きる人間にはただの accident 偶然であり、必然 necessity とは到底思えないでしょう。ところが過去を相応の改悛の情を持って振り返るとき、私のような信仰が足りない者にもこれは摂理だと思えてくるのです。感謝の念が伴えばなおさら。

私は富山県のただの英語好きの高校生で、上智に行こうと思ったのは、たまたま南沙織のファンだったからです。イエズス会も大学についても無知でした。それがどうしたことか 4 年生の時に洗礼を受け、大学教員の道を選ぶことになったのです。高柳先生との接点は、ようやく前期課程修了時に就職の世話をしていただいたのが最初です。福島の桜の聖母短期大学です。学科長だった先生の研究室で推薦状を書いてもらいましたが、先生は何かの漢字が分からず、研究社の大英和を使って調べられました。なるほど、英単語から漢字を探す使い方もあるのかと妙に記憶に残っています。

先生とのお付き合いが深まったのは、日本 T.S. エリオット協会の活動をおしてでした。協会はエリオット生誕 100 周年を記念して 1988 年に結成されました。設立大会は梅花女子大学で開催されましたが、その折に先生と久しぶりにお会いすることになったわけです。その時、私は福島から神戸に移っていましたが、「何でここにいるの」という表情で、ご挨拶ただけでしたね。大学院までの私の研究対象はジョナサン・スウィフトでしたから、驚かれたのも無理はありません。年に 3, 4 回東京で個人的にお会いするようになったのは、先生が退職された後のことでした。エリオット協会で委員をするようになり、先生との距離がちょっと近づいたと嬉しく感じました。2004 年には前期課程のみで就職したにもかかわらず、博士の学位を取るために尽力

していただきました。論文は福原麟太郎出版助成金を受けて『イギリスのカトリック文芸復興』（南窓社）として出版されたので、学恩に少しはお返しができるのかもしれませんが。

先生とお会いする際、決まって利用したのは Ile de passion という四谷駅近くのこぢんまりとしたフレンチレストランでしたね。先日も一人で出かけてお店の方と思い出話をしてきたところですよ。1995年の開店だそうで、肉好きの先生はいつも肉料理を選択されていましたね。お店の名前は「情熱の島」ですが、神学やイエズス会や教会の話題を情熱をもって語ってくださいました。最後は2019年2月20日でした。先生にお会いしなければ、教会史に関心を持つこともなく、イエズス会の重要性にも気づかず、ヨーロッパ理解もより薄っぺらなものに終わっていたことでしょう。

先生へのオマージュとして一番ふさわしいのは、先生の著作を読み直し、それについて考え書くことであろうと信じます。昔、音声学か何かの授業で、文章を読むときの声は自分の声だ、と聞いたことがあります。しかし知っている人の本の場合、その人の声を聴くのではないのでしょうか。わたしは先生の声を聴くことができることをつくづく幸せに思うのです。先生は亡くなられても生き続けておられるのです、記憶と著作の中で。

『上智英文90年』でも書いたことですが（p. 126）、先生の学問はヨーロッパを強く意識したもので英文学、思想史、神学のトリニティを成すものでした。英文学科の教授だからといって、ただの英文学者ではないところに先生の持ち味があったのです。上智英文学の特色は思想史 intellectual history 系の科目があることで、先生が長らく担当されたヨーロッパ文学思想史は上智英文の強みでありました。

最後に先生の思惟の特徴が最もよく出ていると思われる文章を引用し、懐かしい先生の声を聴いてみましょう。

人間は事物をただ体験し、認識の中に受け入れるだけでなく、それらの背後にあるものを受け止め、理解し、さまざまな角度からの知解を一つの全体像にまとめ上げ、知識世界 (orbis scientiarum) をつくりだし、自分の意義を確認しようとしてきた。ギリシャ的思考において、「ロゴス」はこの観点の中心的な語である。それはある時は「言葉」、他の時には「理性」の意味を持っていた。ロゴスは語源から、「拾い集

めて、整理する」を意味する。しかしそうして集められた個別の知見が、総合的に一つにまとめ上げられるためには、知恵（ソフィア）が必要となる。ヘレニズム思想と接触した、旧約聖書の知恵文学において、ソフィアはロゴスと一体のものと考えられていたが、新約聖書はロゴス＝ソフィアによって、キリストの宇宙における中心的な役割を明らかにし、深めようとしている。

これは『『新カトリック大事典』のコンテクスト——百科事典の理念と思想史』（『ソフィア』234号[2009年、第58巻3号]、p. 40.）から抜粋したものです。上智の特色として、そしてそれを体現するイエズス会員高柳先生のアイデンティティとして語ってきたもののすべてを、この文章は含んでいると思うのです。見事な高柳節です。ここに語られている「人間」は先生ご自身であり、ヘブライの部族宗教が地中海の文化世界に放たれて以降起ったダイナミックな知的生成の見取り図がここまで鮮やかに展開されているのは、先生の生涯がこのドラマを追うものだったからでしょう。

カトリック信仰の中心は、イエス自身が弟子たちと過ぎ越しの祭りを祝った「最後の晚餐」で制定された「聖体の秘跡」(the Eucharist)であります。第2ヴァティカン公会議以前の典礼文は「主は、御受難の前日、その聖なる尊い御手にパンをとり、天に在す全能の御父なる御身の方に目を上げ、御身に感謝し、それを祝して、分け、弟子らに與えておおせられた。皆、これを受け、そして食べよ。実に、これは私の体である... あなたたちがこれを行うごとに、私のかたみとしてこれを行え」。私はこの「形見」という訳語はなかなか優れていると思うのです。

高柳先生の教えを受けた者は、先生の形見として行うべきことがあります。弟子たちが教えられ、使徒伝来の教会に保存されてきた聖体の秘跡に倣って、先生の形を見続け、力の限り実践して参りたいと思います。先生本当にありがとうございました。

高柳先生とピューリタン研究

増井志津代

かれこれ 25 年ほど前、秋山健先生の後任として上智英文学科に着任した私は、すぐに、秋山先生が指導しておられた院生の論文指導を担当することになった。その頃の大学院専攻会議の中心は渡部昇一先生と高柳俊一先生で、お二人が並んで座っておられるだけで部屋には緊張感が漂った。安西徹雄先生が専攻主任で、会議のまとめ役を務めておられた。比較的若手の教員は、ジョセフ・オレアリ先生、舟川一彦先生、池田真先生、そして着任したばかりの私の四名だった。

新しい環境で四苦八苦していたある日、研究室のドアをノックする音がした。開けると、高柳先生が立っておられる。ご著書『T.S. エリオット研究—都市の詩人／詩人の都市』（南窓社、1987 年）を、「私の書いた研究書です。どうぞ」と、プレゼントしてくださった。さらに、「実は私はピューリタニズム研究者を目指していたんですよ」との突然の告白。呆気にとられていると、先生は次のように説明してくださった。「私が最初のアメリカ留学時に出会った先生は、ペリー・ミラー（Perry Miller, 1905-1963）の指導生だったんです」。ミラーの弟子であったそのイエズス会士をたいそう尊敬し、高柳先生ご自身も、真剣に、ピューリタニズム研究を目指されたことがあると、この時、初めてお聞きした。

高柳先生に強い影響を与えたピューリタニズム研究者とは、ミラーの指導を受けてハーヴァード大学に博士論文を提出したイエズス会士、ウォルター・

オング (Walter Ong, 1912-2003) である。フランスの思想家ペトラス・ラムス (Petrus Ramus, 1515-1572) がケンブリッジ大学のピューリタンに与えた思想的影響を、オングは博論で取り上げた。高柳先生は、オングの研究に刺激され、ご自身もピューリタニズム研究に取り組もうとされておられたとのこと。留学してすぐにオング教授の研究を知り、熱心に学ぶ中、思想史研究を進めたいとの希望を抱き始めたそう。そのために実際に具体的な進路計画をあれこれ立て挑戦されたことを楽しそうにお話くださったのだが、イエズス会神父である高柳先生が、ピューリタニズム研究を目指しておられたという告白にはやはり驚いた。

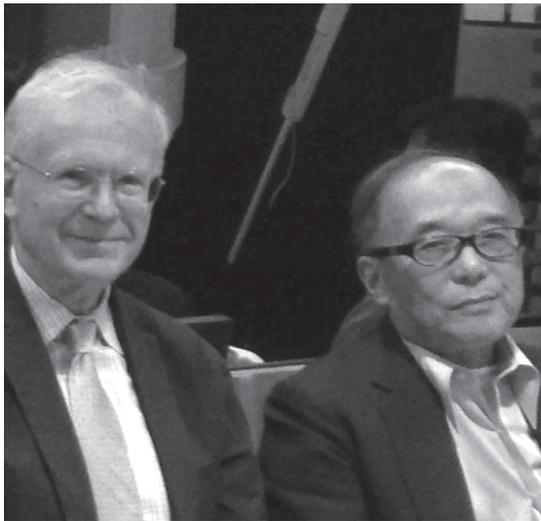
もう一つ驚いたのは、上智大学の英文学科においては、畏敬の対象だと思い込んでいた高柳先生が、実は大変ユーモアに満ちた方だったことだ。ご自身の留学体験を面白おかしく語られるので、私の方もずいぶん楽しい気分になった。高柳先生もまた、若い時代は学問と格闘する留学生のお一人であったことを確認し、先生との間を遮っていた壁のようなものが取り去られていく思いがした。結果的には、先生はピューリタニズム研究には進まなかったものの、米国留学時にオング教授の思想史研究に影響され、文学、宗教、思想を横断的に結ぶ学際研究が、先生のご研究の持ち味となったのだと思われる。植民地時代のマサチューセッツで、ネイティヴ・アメリカン宣教に熱意を燃やしたピューリタン牧師ジョン・エリオット (John Eliot, c.1604-1690) の子孫、T.S. エリオットを、主要な研究対象とされたのは、こうした背景を踏まえてのことだったのだろうか。

私自身は、母校の同志社大学でピューリタン研究に触れた。米国の大学院で博士論文の指導をして頂いたデイヴィッド・ホール先生は、学部生時代、ペリー・ミラーに教えを受けた初期アメリカ研究者である。第二次大戦後、ドイツと日本の復興を目的とする、アメリカ主導の文化政策が打ち出され、ピューリタン研究は一躍、アメリカ研究の主要テーマとなる。戦勝国アメリカによる文化政策の一環として、敗戦国ドイツと日本で開始されたアメリカ研究セミナーに最初の講師として参加したミラーは、独日両国でピューリタン研究を普及させ、戦後復興期のアメリカ思想史研究を方向づける。*ミラーの薫陶を受けたオング教授の影響から、高柳先生は思想史研究を経て、ピューリタンの家系に生まれたT.S. エリオットの研究へと進まれたのだろうか。

さて、話は変わって、7号館文学部のフロアで働く職員の方々の間で、高

柳先生の人気は高い。一見、あまり周囲に関心なさそうで、実は細やかな心配りをなさる先生は、海外からご帰国のたびに、学科や学部の助手や職員の方達にお土産を持ち帰られた。香水の小瓶で、それをいただくと、皆さん、なんだか微笑まずにはいられなかったようだ。一見、近寄り難い「ワニ」先生のイメージの向こうに、心優しい神父のお姿を見つけたからだろう。7号館の文学部職員の方達と、時折、高柳先生の思い出を語り合うことがある。何故だか決まって、最後は皆さん満面の笑顔になる。

* 合衆国による第二次大戦後の対独日文化政策とペリー・ミラーの役割については次の研究書に詳しい。George Blaustein, *Nightmare Envy and Other Stories: American Culture and European Reconstruction* (Oxford: Oxford UP, 2018).



2013年11月11日、ハーヴァード大学のDavid D. Hall先生来日講演時
(ホテルニューオータニ「ほり川」)

恩師高柳俊一先生のこと

飯野 友幸

高柳俊一先生には、指導教授として長年ご指導いただいた。

指導教授をお願いしたのは、大学院博士後期課程に入学してからのことである。博士前期課程では T. S. Eliot を修論のテーマに選び、指導は生地竹郎先生をお願いしていたのだが、博士後期課程に進んだタイミングで、引き続きエリオットを研究するなら指導はやはり私でなければ、という趣旨のことを高柳先生から半ば命令のように告げられた。若干のためらいを覚えたのは、その2年前に博士前期課程の入学試験を受け、口頭試問に臨んだ際に「試験の成績が悪い、学部時代の成績が良かったからといって（たしかに良かったのだが）、甘く見るな」と厳しい言葉をかけられていたからである。それでも、何か抗いがたい力のようなものを感じて指導をお願いした（ちなみに、生地先生はその年の7月に急逝されている）。

後期課程2年目の秋から MA を取得するためにアメリカの大学に2年間留学し、帰国してから数年後に修了論文（現在は「博士予備論文」）を書く際にも引き続きご指導を仰いだ——先生にご相談もなくさっさと留学してしまったにもかかわらず。そして、なんとか後期課程を満期退学することができたとはいえ、論文提出前には先生から「この論文は brilliant とは言えない」と耳の痛い評価を下されていた。

こうして課程博士論文を執筆する権利を得たものの、その後高柳先生とのご縁は薄れていった。すでに玉川学園女子短大での専任講師に就いていたし、

家庭でも子育てに振り回されていたこともある。

その後、日本大学に移り、1996年の夏、海外研修でボストン近郊のケンブリッジに1年間滞在していたとき、突然先生から手紙が届いた。ボストンに行くから、エリオット家のサマーハウスに連れていけ、という内容だった。そのサマーハウスとはボストンから50キロ近く離れたCape Annという岬にある——ヨーロッパに旅立つまではエリオットも毎夏をここで過ごし、そのことは*Four Quartets*中の“The Dry Salvages”に回想されている。レンタカーを借り、ボストンカレッジで先生を拾って助手席にお乗せし、出発した方がいいが、カーナビなどももちろんない時代、フリーウェイの乗り継ぎなどで苦慮する一方先生はひたすら喋り続けるという二重苦のなか、今から思えばよく事故もなく辿り着いたものだと思う。

サマーハウスの前で、先生は写真を撮れとおっしゃる。カメラを向けると、それまで見たことのないほど柔和でちょっと照れて歪んだような表情をされ、こちらは戸惑うばかり（あとになって、あれは違う場所だったと先生から指摘されたのだが）。しかも、近隣のRockportという町ではランチにロブスターをご馳走になった。何から何まで、これまでのイメージが完全に覆る経験だった。

それから4年後。筆者は上智で教えはじめることになり、指導教授と同僚、という何とも居心地の悪い状況になるわけだが、このときも数年後には課程博士号を取得するようにと尻を叩かれ、3年後に冷や汗ものとしかかない博士論文を提出。実は、このときにはエリオットをはじめとするモダニズムの研究からは離れていて、むしろポストモダンに属するJohn Ashberyの研究に筆者は熱を上げていた。それでも、エリオットを放棄した筆者の論文を主査としてご指導くださるとは、なんと寛大なことだったろうか。何しろ、この時までに先生は『T・S・エリオット研究』（1987）、『T・S・エリオットの比較文学的研究』（1988）、そして『T・S・エリオットの思想形成』（1990）——いずれも南窓社刊——を矢継ぎ早やのペースで出版されていたのである。

2014年、筆者は上智からサバティカルを許可されて、マンハッタンに5ヶ月滞在していた。デジャヴュというべきか、ふたたび高柳先生からメール（今度は電子の）をいただいた。母校のフォーダム大を訪ねる機会を得たので、どこかで食事をしようというお誘いであった。指定されたカーネギーホール近くのカトリック関係の宿舎へお迎えに上がり、通りに出て歩きはじめるや

高柳俊一教授追悼

「かつては一泊 30 ドルだったのに、50 ドルになっている」と憤懣やるかたない口調でおっしゃる。マンハッタンの、それも中心部に一泊 50 ドルで泊まれることがいかに破格なのか、ご存じないとは。そして、近くのステーキハウスで食事をし、師の長広舌に耳を傾けたのだった（あまりの人ごみのために聞き取れたのは半分ぐらいだった）。

いつも苦言を呈されていたことが自分なりに奮起する原動力になったことは間違いない。長年にわたり自分本位に方向性を定めて決断をしてきた筆者の行動を見て、おそらく勝手な奴と思われていたはずである。衆目の一致するところ難しいお人柄の高柳先生ではあったが、こと筆者がご指導いただいた年月をこうして振り返ってみるにつけ、寛大に見守ってくださったことに気づかされるばかりで、感謝の言葉もない。

T・S・エリオットと高柳俊一先生

佐藤 亨

高柳先生とは日本T・S・エリオット協会で長らくお付き合いいただいた。年数にして30年ほど。その間、先生が会長でわたしが事務局長という4年間があり、また、協会で『モダンにしてアンチモダン——T・S・エリオットの肖像』（2010）を研究社から刊行したときは、共編者としてご指導いただいた。

いま、わたしが、弱輩者ながら、協会の会長を務めている。前任者は、高柳先生の愛弟子とも言うべき野谷啓二氏で、その前は中井晨氏、池田栄一氏が務めた。そうそうたる面々のなかにあつてわたしなど恐縮するしかない。とくに高柳—野谷のラインのあとにわたしを置くと、自分が浮いたような気持ちになる。

それはエリオット—高柳—野谷というラインであり、キリスト教ラインと言つてもいい。わたしはキリスト者でないので、どこか気が引けるのである。もちろん、キリスト者でなければエリオットが理解できないというのではない。ただ、高柳・野谷両氏にあつてキリスト教とエリオットは不可分である。

そして、キリスト教と不可分なのは「ヨーロッパ」である。エリオットはそれを「伝統」と呼んだ——「伝統にはまず歴史的感覚がなければならず、それは二十五歳を越えてなおも詩人でありつづけたいと思う者には必要不可欠と呼んでもいい感覚である。そして、歴史的感覚には過去の過去性ばかりではなく、その現存性の認識が必要である。歴史的感覚をもてば、自分が直

接的に生きる時代だけでなく、ホメーロス以来のヨーロッパ文学の全体が、またそれにふくまれる自国の文学の体系が、同時的に存在し、同時的な秩序を作るという意識で書かざるをえなくなる。時間的ばかりでなく超時間的なものについての感覚であり、時間的、超時間的なもの、両方あわせた感覚である、この歴史的感覚こそが作家を伝統的にする。そしてそれは同時に、時間の流れのなかにおける自分の位置を、同時代性を、作家にもっとも強く意識させるものである」。

言わずと知れた「伝統と個人の才能」（1919）の一節である。わたしは高柳先生の若いころは知らないが、先生もまた「二十五歳を越えてなおも」、ヨーロッパを探求された。その過程の中で数々のエリオット論を残したのだと思う。

偶然であるが、先日、ミラン・クンデラ（2023年7月11日、94歳で死去）の追悼記事を読んだ。スラブ文学者の沼野充義氏による「欧州中心主義『最後の大物』」（2023年8月2日、毎日新聞夕刊）である。沼野氏によると、1929年、チェコ東部の都市ブルノで生まれたクンデラは1960年代、「硬直した社会主義体制の民主化・自由化を求める『プラハの春』の中では指導的な役割を果たす」ものの、運動がソ連によって踏みにじられ、本人も迫害を受けるとフランスに亡命する。彼は1960年代から作家活動を始めていたが、亡命後は、「チェコ語のようなマイナーな言語で書いては、西側で多くの読者を獲得できない」ことに悩み、最終的にはフランス語で創作するようになったという。

氏はクンデラを「ヨーロッパ中心主義者」と呼ぶが、それについて「彼（クンデラ）が常に意識していたのは、『ドン・キホーテ』に始まり、英仏の小説をへて、二十世紀のプルーストやカフカに至る近代ヨーロッパの伝統であり、チェコを越えた中央ヨーロッパの文化的バックグラウンドだった」と説明する。

クンデラと高柳先生は一見、結びつかないかもしれないが、ともに周縁からヨーロッパを探求した点が共通しているように思われる。高柳先生もまた「ヨーロッパ中心主義者」たらんとした。そして、その際、クンデラのように使用言語を替えるというような手段ではなく、ヨーロッパを神学的に、哲学的に、そしてなによりも文学をとおして引き寄せようとした。そして、そのなかに自分を置きつづけた。

伝統は「相続」されるものでなく、「相当な努力を払っ」て「手に入れ」るべきものなのである。アメリカはセントルイス生まれのエリオット（1888-1965）は、そう主張し、みずから実践した。

いま、わたしの前にエリオットと高柳先生が並んでいる。わたしはなんとかエリオット論をまとめたいと思っている。自分なりのエリオット像を築きたいものだ。その際、大先達である先生の著作から多くを学ぶはずだ。

次に引用する『T・S・エリオットの思想形成』（南窓社、1990）の「はじめに」の結びの一節は、いかにも高柳先生らしい。先生は流行や時流と格闘し、ときに逆行することさえあった。苦虫を噛み潰したような表情をしていた先生を思い出す。キリスト教ならびにヨーロッパを死守し、同時に、エリオットを弁護していたのだろう。

今日、我々は批評においていやおうなしに「リングイステイック・モーメント言語学的瞬間」と呼ばれている事態に直面し、急激に変転する流行に対応することをよぎなくされている。このような時期に、エリオットの作品に対する我々の姿勢は、詩と彼の（時代の）思想との結びつきを積義的に正確に捉え、それを開かれたものにし、全き意義の到来を待望するために未来へ進もうとするものでなければならないであろう。デリダ的ハイデガー理解によって、ロゴスを否定して、テキストの記号の上を迷走するのは、「鏡の散乱において／徒らに変種を増殖するのみ」（「ゲロンチョン」）ではなかろうか。エリオットの解釈学の中心原理は、還元主義から解放されたロゴスであろうと思われる。

吾輩はワニである——高柳先生の思い出

石塚 久郎

入試の二次試験の会場でその姿を見たのが最初だった。1983年のことである。黒いコートに黒縁のメガネという大学教授然とした出で立ち。現れるや否や、当時べいべいの若手講師だった舟川先生を顎で使っては、奇妙な片笑みを浮かべながらふふんと尊大に構えている。その面妖な素振りは、高柳先生の印象をわたしの頭に刷り込むことになった。亡き人の印象や思い出はおのずと主観的なものになる。ましてや高柳先生ほどマルチに活躍された「巨人」になれば、百様の思い出が立ち上がってくるだろう。わたしの思い出はそのほんのわずかな、しかも俗世的な一片に過ぎない。

とはいえ、わたしの個人的印象は、他の学部生の多くが共有していたのではなかろうか。人をおのずと遠ざけるあの独特の佇まい、君たちにはまだ早いかもしれんがという体の講義、なんなのこの日本語と誰もが感じる「日本人離れ」した話しぶり、それでいて流暢な英語、講義中に斜め45度上の空中を凝視する謎の視線、尊大と含羞が入り混じった口半分の笑み、あの独特の「ハイ」という口癖——先生のこうしたユニークさは学生にとってイジリ甲斐があったのは間違いない。その証拠に、誰もがやれる先生の物真似の筆頭に高柳先生が挙げられていたのだから。

そんなわけで高柳先生は学生の間では、近寄りがたい教授の典型でありながら強烈な「キャラ」を放つ英文科の^{アイドル}人気者であった。他の追悼文でも紹介されているだろうが、先生にまつわる逸話や巷間の流説（例えば、虎屋の羊

羹を丸ごとかじるとか、スプーンで皿を叩いて夕飯はまだかとせがむとかは枚挙にいとまがない。わたしが憶えているのは、他愛もない生理現象の一つだ。なぜこんなことを未だに憶えているのか自分でも分からないが、学部のある講義で先生のくしゃみが一回で治まらないことがあった。数回くしゃみした後、なんだろうと言ってその場を取り繕ったが、周囲の女子学生からは「かわいい」という声が漏れ聞こえた。くしゃみで女子の心をつかむとは！学部生時代のもう一つの思い出に、卒業式の謝恩会の時のスピーチがある。卒業生のスピーチがあまりに真面目過ぎたのか、先生は、スピーチの仕方を教え忘れまして、スピーチには必ずユーモアを交えなければいけませんと私たちに教示し始めた。なるほどと思って学生は耳を傾けたのだが、お手本と思って話し始めたユーモアは高尚過ぎて笑えない。その笑えなさがまた「かわいい」のである。尊大でも憎めないのである。

このエピソードを憶えているのは、高柳先生が真面目一本の人ではなく、どこか茶目っ気のある、ユーモアのセンス（あるいはナンセンスか？）を持った人だというわたしの勝手な思い込みからかもしれない。尊大さとユーモア、厳めしさと愛らしさの二面性は先生の「ワニ」という愛称にも現れている。

先生が「ワニ」と呼ばれているのを知ったのは大学院に入ってからのように思う。最初は顔がワニに似ているのか、存在がワニ的なのか、それともその尊大さがワニ的なのかと頭をひねったが、SJハウスでワニを飼っていて大学のプールでワニを泳がせていたからだと聞いた時は嘘だろうとひっくり返った。実際それは神話に過ぎないのだが、「ワニ」という爬虫類の姿形は、なぜか先生の愛称としてしっくりくる。先生ご自身もそう呼ばれているのをまんざらでもなさそうなご様子で、研究室にワニグッズが積み上げられていくのを半ば楽しみに眺めておられたようだ。

先生とお目にかかる機会が増えたのは、先生が退職された後、後輩の加藤めぐみの呼びかけでクリスマスの季節に毎年SJ詣でをし始めるようになってからだ。退職されてからも、研究に対する意欲は衰え知らず、海外の学会などに足を運ばれ、嬉々としてその成果を話されていた。それも近年の新型コロナウイルス禍で途絶えてしまったのは残念で仕方がない。2017年の5月に静岡大学で日本英文学会の全国大会が開かれた際、招待発表する先生にお供する機会に恵まれたが、これが最後の恩返しのようなものになった。その時、先生はあいにく風邪をこじらせ、せっかくの講演はがらがら声で非常に聞き取

りにくかったのだが、持ち前のユーモア——これは他所で言っちゃダメですよと「公言」する——で少なくともわたしを楽しませてくださった。

恩返しと言えば、『上智英文 90 年』に携われたことがある。その時、高柳先生の業績を初めて俯瞰的に見ることができたのだが、改めて驚かされたのは先生が「書く人」でもあったということだ。初期の都市三部作や精神史・思想史関連の本、英文学や聖書の入門書、そしてもちろん T・S・エリオット論など多方面に飽くなき執筆活動を最後までなされていた。「読んだら書く」という、若い時に身に着けたとお察しする、研究の癖のようなものを持っていたのかもしれない。それはノースロップ・フライの『批評の解剖』——フライを日本に紹介したのはこのわしが最初だとよく豪語なさっていた——に始まる長きにわたる書評活動にもっともよく現れていると言えるだろう。

高柳先生の性格からして親密な師弟関係といったものは、およそ考えられないが、前途有望な若手が師の薫陶を受けたことは特筆に値する。イエイツで新人賞を取った島弘之氏、20代で『現代思想』や『ユリイカ』などで鮮烈なデビューをした谷内田浩正氏の二人はその筆頭であり、今の若手・中堅研究者には二人の名前はピンとこないかもしれないが、高柳先生から特に高い評価を受けていた。島氏はあの柄谷行人に引っぱられ法政大へ、谷内田氏は富山太佳夫に見初められ成城大へと巣立っていった。二人とも上智とも英文学会とも結果的に袂を分かつことになったが、高柳先生は内心、残念な思いでこの二人を見ていたのではなかろうか。もしかしたら違った未来があったかもしれない。

1983年の2月、二次試験の面接で将来は大学院に進み大学教授になりたいと尊大にも言い放ったわたしを、面接官の一人であった高柳先生は「ワニスマイル」で答えてくれたのであった。40年たった今でもあの時の片笑みは忘れない。

高柳俊一先生へのご恩返し

加藤めぐみ

卒業後も、先生のご退職後も、大学時代にお世話になった恩師に会いたくなったら、いつでも会いに行くことが出来る。—— 2年前の2021年9月に高柳俊一先生がSJハウスからロヨラハウスに移られ、2022年7月28日に昇天されて、あらためて自分がとても恵まれていたことに気づかされました。私にとっての高柳先生は学部・大学院時代には偉大すぎる指導教官であったと同時に、結婚式で司式をお願いして以降は「大きな愛をもって見守ってくれている少し口下手な父」のような存在でもありました。本稿では先生との36年間のなかでの印象に残っている言葉、出来事を思い起こしつつ、私の存じ上げている先生のお人柄や想いについて綴らせていただきたいと思います。

1 「あなたの面接をしました。よく覚えています。」

入学直後のオリエンテーションキャンプの食事の席で、高柳先生がいきなりこうおっしゃったときには驚きました。白いセーラー服に青いリボンで面接に臨んだのが印象的だったのででしょうか。面接で先生はネイティブ教員役で、英語で私の名前「めぐみ」の由来をお尋ねになり、また上智以外に受験した大学を問われました。「慶應です」と答えると「両方受かったらどちらに入学しますか」とおっしゃるので「もちろん上智です！」と即答し、そこで先生方からどっと笑いが起きました。1986年当時、上智英語・英文は圧倒

的に人気で、早慶より上智を選択するのは当たり前でした。まさに上智英文の「黄金時代」だったのです。

学部時代、学生たちと目を合わせることなく、天から言葉が紡ぎ出されるような語りの高柳先生の授業はいつも難解でしたが、履修できる科目は全部とりました。なかでも「ヨーロッパ文学思想史」で学んだアーサー・O・ラブジョイの『存在の大いなる連鎖 (The Great Chain of Being)』の観念史 (History of Ideas) という概念は新鮮で、大きな思想史の流れのなかで文学作品を捉え、読み込むという視点は、私の研究の原点になっています。

2 「ブルーストッキングは嫌いだ！」

私は学部時代、卒論のテーマを決めるとき、女性の生きづらさ、生き方を研究対象にしたいと女性作家の作品を読み漁り、自分と思考の脈にピッタリと感じたヴァージニア・ウルフを選んだのですが、高柳先生にご指導いただけるかは不安でした。なぜなら当時、才媛との誉れの高かった院生の先輩が「修論でウルフを扱いたい」とご相談したところ「ブルーストッキングは嫌いだ！」と高柳先生の逆鱗に触れ、その声が7号館5階の廊下に響き渡った——そんな噂話を耳にしていたからです。結果的に高柳先生は新たな理論的な試みにご理解があったので、脱構築や新歴史主義に夢中になっていた私のウルフ研究については常に前向きに評価していただき感謝しています。

先生はイエズス会士という男性中心主義の世界で生きることを選択され、フェミニスト嫌い、ミソジニストの部分はおありでしたが、高柳先生に結婚式の司式をしていただくと絶対に離婚しない、との伝説がありました。かくいう私も大学院の博士後期課程在籍中に、クルトゥルハイム聖堂での結婚式の司式を先生にお願いし、結婚披露宴では主賓としてスピーチをしていただきました。

3 「『世界』とはいかなくても『日本』を代表するウルフ研究者になれるかは新郎次第でしょう」

披露宴では、大学院で航空工学を学び、航空会社に勤める新郎側の主賓のスピーチが「いかに正確に安全に飛行機を運航するか」という話に終始していたのに対して、高柳先生が「文学研究は飛行機のように急ぐ必要はありません」とおっしゃったタイミングでミルワード先生がゆったりと大遅刻を

して入場されたときには、どっと会場が沸きました。高柳先生は家庭内で理系 vs 文系、相反する二人の間にいずれ「沈黙」が訪れ、離婚の危機になり、いずれ私が「仕事をください」と先生に泣きついてくるのでは、と案じて下さっていました。だからこそ新郎に対してスピーチで、このように苦言を呈してくださったのだと思います。

「日本を代表するウルフ研究者」になれたとは到底言えませんが、ウルフ協会ですべて出版した論集『転回するモダン』（研究社 2008 年）の共編著者を私が務め、拙論が巻頭を飾ったときには先生も喜んで下さいました。2 年後の 2010 年には、先生が編者代表を務められ、エリオット協会編による論集『モダンにしてアンチモダン』が同じく研究社から出版されました。貴重な一冊をご恵贈いただいたとき、私も少しは先生の学恩に報えたかと思いました。

4 毎年恒例のクリスマス訪問

言葉数の少ないニヒルな印象の高柳先生でしたが、だからこそ英文学科内には一定数のファンがいました。なかでも 1990-92 年に英文学科事務の秘書をされていた網野（旧姓 秋山）裕美さんは、先生の熱烈なファンで、結婚式の司式をしていただいたこともあって、毎年、年の瀬と 3 月 31 日の先生のお誕生日にお一人で「ワニちゃん詣で」と称して SJ ハウス訪問をされていました。そんな網野さんに誘われて 2006 年頃から私も一緒に子連れで 12 月 23 日のお昼前に SJ に伺い、小一時間、先生の近況を伺う、ということが何年か続きました。そこに石塚久郎さん、杉野健太郎さん、田中みんねさんが加わり、2016 年からは高柳先生もランチもご一緒くださるようになりました。

2017 年 5 月、私が日本英文学会の大会準備委員を務めていたため、静岡大学で行われた全国大会に高柳先生をお招きして招待発表をしていただきました。司会を巽先生にお願いし、上智英文出身の研究者たちが集う機会にできたら、という私の願い通り、懐かしい面々を含めて招待発表としては異例の 80 名近い参加者がありました。先生には「エリオット研究の展望——過去・現在・未来」と題してお話いただきました。未刊行詩を含む最新刊の詩集を例に、エリオットの後期作品より『荒地』以前の初期作品を論じるようになった研究動向を批判され、後期作品を新たな角度から再読・再評価する必要性を説かれました。

この招待発表の10日後に上智英文同窓会で再び、異会長の司会による高柳先生の記念模擬授業が行われました。「ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』の7日間」と題したこの模擬授業はノートルダム清心女子大の紀要論文『『薔薇の名前』を読む——中世の宇宙像・書物・目次』をベースにされているとのことでした。タイトルの「名前」が名前とリアリティーとの乖離を示すこと、中世のベネディクト修道会とフランシスコ修道会との対立、また日曜礼拝に皆が参列した時代から司祭・信者にも世俗化がすすんでいった時代についてお話しくれました。

2017年5月のこれら二つのイベントが『上智英文90年』の出版に繋がりました。異会長から私が編集長の任を受け、6回の編集会議を経て、急ピッチで出版の準備を整えていきました。

5 『上智英文90年』の出版

「ミルワードと渡部昇一の葬儀をやるまではわたしは死ねない」とおっしゃるのが晩年の高柳先生の口癖でした。そして残念ながら渡部昇一先生は2017年4月17日に、そして同年8月16日にミルワード先生の訃報があいついで入ることとなります。渡部先生、ミルワード先生に『上智英文90年』出版にご協力・ご覧いただけなかったことを悔やむと同時に高柳先生がお元気なうちに上智の黄金時代の記録を歴史に残さなくては、という想いが一層強まりました。そしてこの年のクリスマスに『上智英文90年』のために高柳先生、異先生に対談を行っていただきました。掲載された対談はお二人の先生の対話の形式になっていますが、実際には私と杉野健太郎さん、田中みんねさんも立ち会い、私からご質問をしたり、杉野さんに補足説明をいただいたり、異先生から話題を発展させていただきながら、高柳先生の記憶が引き出されていきました。2時間半に及ぶ対談を田中さんが完璧に文字起こししてくださり、それを私が5分の1に整理縮小して、事実関係を確認して完成しました。

6 「それでとにかく、わたしが一人で頑張っていた」

この対談の中心的なテーマは1970年代の上智英文の「黄金時代」でした。当時ロゲンドルフ先生はドイツ、ロゲン先生は関町、マシー先生は六甲にいらしたとのこと。「一人で頑張った」というお言葉に高柳先生のご苦勞と自負

が感じられました。『上智英文 90 年』は 2018 年 5 月 15 日に出版となりましたが、その時期、高柳先生が緊急入院をされたと同じ、ご体調を大変心配致しました。幸い、6 月 16 日の出版記念イベントではとてもお元気そうなお様子でいらして、ウィットに富む 1 分半のスピーチを朗らかにして下さいました。(『上智英文 90 年』出版記念会高柳先生スピーチ 2018 年 6 月 16 日 <https://youtu.be/qFucHjrFSfw>)

高柳先生はこの出版を本当に喜んでくださったのだと思います。その年のクリスマスの会食の席では、巽先生はじめ 6 名の参加者全員に、翌年の干支のイノシシのかわいい鈴の焼物をご用意くださいました。先生からのプレゼントなんて初めてのことでした。お優しいお気遣いをいただいて『上智英文 90 年』出版ができて本当によかったと実感致しました。

7 「研究も翻訳もすっかりやる気がなくなった」

ご病気をされたのちのことだったかと思います。卒寿を過ぎても「まだあと 4、5 年は論文執筆や翻訳の仕事ができるでしょう」と常に旺盛だった先生の学究心にそれまでずっと励まされて参りました私としては、先生から弱音が聞かれたときは正直、ショックでした。急性の腹部の激痛、ベッドからの転落、救急搬送後の 1 ヶ月に及ぶ入院生活で、心身ともに消耗されていたのでしょう。振り返るとその頃から病魔が先生のお身体を蝕みはじめたのだと思います。

2019 年 6 月、上智英文同窓会での舟川先生のご講演の後に、ソフィアンズクラブで、高柳先生の「米寿のお祝い」を一年前倒しで行いました。翌年パンデミックが世界を襲うとは夢にも思っておりませんでした。あのタイミングでお祝いできて本当に良かったです。

8 「今年はもう集まらないのかと思った」

コロナ禍前の 2019 年末。クリスマスランチのお誘いのお電話をするのがいつもより 10 日ほど遅れたとき「今年はもう集まらないのかと思っていた」と先生は心配された様子でした。毎年、なかば強引に私どもが押しかけていたと思っていたクリスマス訪問でしたが、先生がこんなにも楽しみにしてくださいっていたとは感激でした。巽先生はじめ英文学界を担う教え子に囲まれて、美味しそうに牛のステーキと赤ワインを召し上がり、饒舌なワニ節で

高柳俊一教授追悼

昔話に花を咲かせる先生のお姿が今でも目に浮かびます。コロナ禍に入った2020年12月には同級生の森下正昭さんと二人でSJ訪問をして、会長、副会長はじめ上智英文同窓会の皆様にもZoomでご参加いただきました。これが私にとって先生と直接お目にかかる最後となってしまいました。



2020年12月26日コロナ禍での上智英文同窓会＋SJクリスマス会
(左から、加藤めぐみ＋ズーム参加者、高柳先生、森下正昭)

高柳先生の葬儀の際の神父様のお話でも、2023年7月1日のマイケル・ミルワード神父様による同窓会での追悼でも、高柳先生はSJハウスではほとんどの神父様に対して心を閉ざされ、挨拶も交わされなかったとのことでした。高柳先生が私たちにを見せてくださってきたお姿、ときに「笑い」を取ろうとされたサービス精神なども、学生、教え子たちのみに向けられた特別なものだったのでしょいか。

でも追悼集会の最後に同窓会副会長の平野由紀子さんがロヨラハウスでの高柳先生のご様子をご紹介くださり、私は救われた気が致しました。終末期を過ごされるロヨラハウスでは、神父様方の本性が現れるそうです。日本語

加藤めぐみ

が流暢だったはずのアメリカ人の神父様が英語しか話さなくなったり、ずっと怒りを露わにされたりする先生もいらっしゃるなかで、高柳先生は終始穏やかで看護師さんの間で一番人気だったとのことでした。SJハウスを去られるとき、見送られた神父様に「どんなに立派な功績を残した人間でも、最期は衰え、人の手を借りなくては生きられなくなってしまう」と高柳先生が嘆かれたとも葬儀の際に伺いました。70余年、常に学問世界の最前線を走り続け、向学心、克己心を失わない学匠司祭としての鎧を脱がれ、最期はユーモアと愛に溢れたお優しい高柳先生として、心穏やかな日々を過ごされたことと信じています。

先生が英文学・神学・思想・哲学の学問研究、また上智英文に残された多大なご貢献に感謝するとともに、微力ながらも大きな遺産を継承していく一翼を担い、ご恩返しをする責務を感じております。

これからも大きな愛で私たちを天から見守り、お導きくださいますように。

「私はハッピーです。」

下楠 昌哉

「あなた英語学科でしょう。」「できたら三年かけた方がいい。」修士論文の第一草稿を提出した際に頂戴した、高柳先生からのお言葉である。この後、修士を何とか二年で出してもらえたのは、生来の小心者ゆえその草稿を目安のメ切より早めに見ていただいていたからに過ぎない。英語で論文を書くという作業についてその時になって今さらのように学び直し、オーストラリア人の友人につきっきりで草稿の読み合わせを頼み、「最初からこのぐらいやってくればよかったのに」とのご感想をいただいた際の安堵感は、今でも忘れられない。

以来、吉田紀容美先輩からいただいた、高柳先生は手がかからない学生が好きである、という貴重なご助言を活かすべく、院生生活を送った。手がかからないように頑張っているのも、推薦状をお願いしたりする以外は、必然的にあまりコミュニケーションする機会は生まれにくい。定期的には何か報告しに来いとも言われぬ。それだけに、今年の英専協に出てみなさいとお声かけがあったり、ノースロップ・フライやハロルド・ブルームの著作を講読する大学院の授業の際に、こちらをご覧になっているわけではないのだが、専門としたジェイムズ・ジョイスに関して先生が多めに付言して下さったように思えたりした時には、俄然やる気が出たものだった。

現在の所属で神学部の先生方と高柳先生のお話をする機会があると、キリスト教学における先生の存在感と莫大なお仕事にあらためて圧倒されること

がままある。よって、その深淵なる学識を踏まえたうえで授業において発せられる「まあ、そういうこつてす」が指す内容については、ほとんどの場合どういふことかさっぱりわからなかった。それでも、文字通り警咳に接するというのか、門前の小僧習わぬ経を読むというのか、フライヤカーモードらのように、予型論をはじめとする聖書解釈学的な見解を踏まえてテキストを読む体験させていただいたことは、現在の自分のテキストに対するスタンスの一部を間違いなく形成していると思う。

ありがたいことに、何をおっしゃっているのかちゃんとわかった時もある。モーセが海を割っても海の底はドロドロだから、歩いていけたはずはない……のだけれども「まあ、信仰の問題ですから。」私自身の結婚式もそうだったのだが、高柳先生の司式の際にお読みになる聖書の一節と言えば、マタイによる福音書の、砂の上に家を建てて家が流れてしまう話。気がつけば、先生が事あるごとに発せられたお言葉が、一生抜けぬ棘のようにいくつも自分の心に深く刺さっているのを感じる。

かように先生の学識をまともに受けとめられていない文字通り不肖の弟子ではあったが、博士論文というものを出すならば、やはりどうしても高柳先生に主査をやっていただきたかった。「先生に主査をお願いするにはいつまでに提出できればいいですか?」「あと二年。」最終的にジョイスの『ユリシーズ』におけるアイルランド人のステレオタイプを扱った博論を、拙いものではあったが上智大学に提出し、受理していただけたのは、高柳先生の弟子の一人であったという何かを残したい、という思いが自分にあったからだろう。(副査の一人を務めていただいた小林章夫先生も鬼籍に入られ、このようなお話ができなくなってしまった。舟川一彦先生、巽孝之先生、ジョセフ・オリアリー先生、その節は大変お世話になりました。)

かろうじて間に合った博論審査の後に拝聴した高柳先生の最終講義は、ご自分の来し方を振りかえられるのではなく単純に新ネタの講義であり、ラフカディオ・ハーンを世紀末作家としてとらえ直すという内容だった。思い出話らしい思い出話は全然なさらず、先生は最後におっしゃった。「この最終講義が誰かの役に立つならば、私はハッピーです。」深々と刺さった棘だった。あれから二十年余り。二〇二二年に商業誌『ナイトランド・クォーターリー』第二十九号に、高柳先生に謝辞を付し、世紀末作家としてのハーン論を寄稿した。刊行後に先生に郵送にて掲載誌を献本させていただいたが、ご訃報を

高柳俊一教授追悼

いただく二週間ほど前だったので、お目通しの機会がおりになられたかどうかはわからない。東京を離れて久しいが、加藤めぐみ先輩や石塚久郎先輩にお声かけいただいた際に、なんとかしてごいっしょして先生のご柳眉を拝しにうかがうべきだったかと悔恨の念は強い。せめてここに書き記したい。先生の教え子になることができ、私はハッピーであります。

高柳先生と「愛」

山口 和彦

高柳俊一先生がお亡くなりになって1年が経った。7号館の研究室の窓からはすぐそばにSJハウスが見えるのだが、その暗い明かりの一室に先生が椅子に腰を下ろし、神学書か研究書を黙々と読んでおられる姿が目には浮かぶ。生前は一日何時間もそのような学究生活を送っていたのだろうと想う。

上智に着任して以来、キャンパスでお会いし、メインストリートをゆっくりと歩かれるのにお付き合いすることがあった。かつては四ツ谷から神保町の古本屋まで徒歩で往復されていたという健脚の面影はもうなかった。それでもSJハウスと『カトリック大事典』編纂室が入っていた紀尾井ビルまでの道のりにはちょっとした坂もあり、毎日の往復は難儀だったろうと想う。ご病気が悪化し石神井にあるロヨラハウスに移られてからは、結局、再会することすらできなかったのは残念至極というほかはない。これといった会話を交わすわけではなかったが、もう一度、その存在を噛みしめながら傍らを歩きたかった。

高柳先生にはじめてお会いしたのは上智に入学してすぐのことだったと思う。もう33年も前のことだから記憶もままならないが、授業の「難解さ」はしっかり脳裏に刻まれている。授業中に何の話をされているのか頻りに分からなくなるのだが、クラスメートもどうやら同じ状況だったので当時の私は安心していた。だが、後になって、それはやはり自分の頭の悪さに起因し

ていたのだと想い返すこととなった。授業で使用された教科書ひとつとってもそれは明らかだった。英文学概論で使用されたご自著『英文学入門』（1982年）は「今日、英文学を学ぶ意義」（第1章）から紐解かれ、ヨーロッパ思想史との関連で「文学観の変遷」（第2章）を辿り、「読書のアドヴァイス」（第6章）に至る、至れる尽くせりの英文学史への「手ほどき」であった。英文講読の授業では Umberto Eco の *The Name of the Rose* を使われたが、訳読の合間に挟まれる脱線的なお話はご自身の修道院生活の実体験に基づくものであったのだろう。英作文の授業で使用された Cleanth Brooks と Robert Penn Warren よる名テクニスト *Modern Rhetoric* (4th edition) は、日本人向けに書かれた生易しいものでは決してなかった。当時の私はそういった背景が微塵も理解できていなかったのである。

学部的时候は近づきたい先生だったが、大学院に入学後、先生が編纂委員会委員長の『カトリック大事典』編纂室でアルバイトをさせていただくようになってから、少しばかり言葉を交わすことができるようになった。先生はほぼ毎日おやつ時になると編纂室に現れ、コーヒーとお菓子を召し上がって帰っていかれた。先生が編纂室にいられる間は緊張が走り、皆、押し黙って作業に没頭するのが常だった。あの難しい表情で編集長デスクの椅子に腰を下ろされた先生に話かけられる人は皆無だった。編纂室でご自身の原稿を書いたり、他人の原稿をチェックしたりといった姿をみたこともなかった。仕事はすべて SJ ハウスの自室でやっていらしたのだと想う。編纂室ではもっぱら物言わぬ、厳しい現場監督といった風情で振舞われていた。

それでも年に二、三度行われた食事会では緊張感は和み、先生もかなり打ち解けられていた。赤ワインですっかり顔を赤らめ、例のニヤッと笑いを頻発する先生に対しては、皆、普段は訊くことのできない質問をしたり、「鰐をお部屋で飼ってらっしゃるってのは本当ですか？」などと度を越えた冗談を飛ばしたりすることもできた。ちなみに、「鰐といっしょにプールで泳いでいらっしゃった」とか、「鰐はバックしてきたトラックにひかれてしまった」とか、さまざまな「目撃情報」が流れたのであった。先生の陰のニックネームである「ワニ」がらみの戯言ではあるのだが、どこか「愛」らしさを感じる先生の一面を示す話でもある。

「愛」と言えば、高柳先生は『カトリック大事典』の第1巻冒頭ページで「愛」（英語の対応語は“love”および“charity”）の項目を執筆されている。最初の

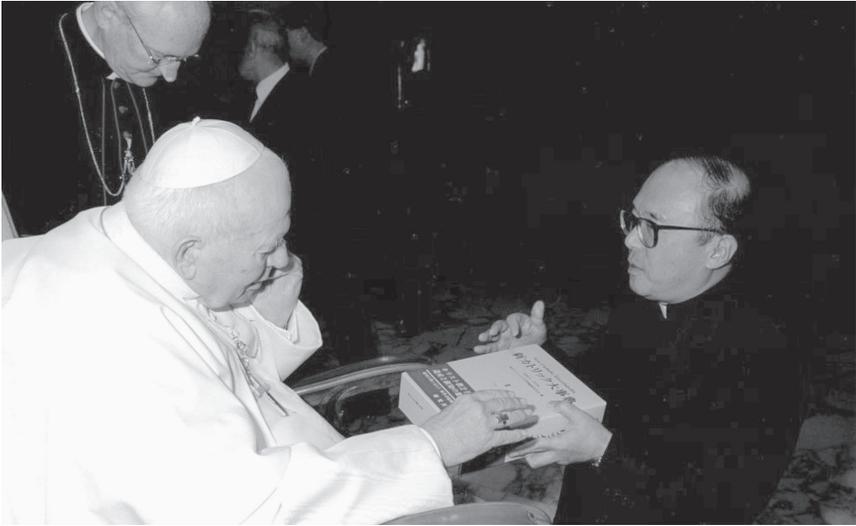
方に、「理性的愛は、知性による客観的価値の認識に対しての人格的意志による対応であり、究極的には、* 人格の目的である神においてのみ、憩いをみいだすことができる。神の魅力によって、人間はその利己的愛から解放されて、その完全な善のうちに入り、それを* 分有することを望む。愛はこうして獲得を目指すことから自己を捧げる方向に向かう」という記述がある（「人格」と「分有」にアスタリスクが付き、それぞれの項目も参照しなければならないように、難解である）。Chat GPTをはじめとする生成 AI は、ユダヤ・キリスト教的な唯一神信仰、直線的時間観、進歩主義などの特徴を強く反映し、「真理」に到達するために開発されたコンピュータの延長線上にあるという見解があるが、果たして AI によって人知を超える「愛」の説得力のある定義づけが行われる日が来るのであろうか。先生は生成 AI のことはご存じなかったであろうが、耳にされたらきっと一笑に付したに違いない。その証拠にというべきか、先生は上の文に続けてこう書かれている。「しかしそのためには、まず人間に対する神の自己譲与がなくてはならない。愛を全体的に捉えることは、人間の人格的生命と* 実存の究極的意味と運命を理解するために肝要である」。生成 AI に「人間に対する神の自己譲与」を想像することはできるのだろうか。先生に訊いたところで、これまた一笑に付されてしまう気がする。

先生が生涯をかけて探究されたカトリック神学も T・S・エリオットも聞きかじったにすぎない私が先生から学びえたことと言えば、結局のところ、愚直なまでに自身のスタイルを貫き、学問研究や人生に向き合い続ける姿勢だったような気がする。もともと、私の場合、今になってもまったく身につけていないのだが、先生にずっと見せていただいた姿勢は大事な羅針盤であり続けている。

葬儀ミサはコロナ禍のためにひっそりと執り行われる予定だったはずだが、当日、イグナチオ教会には多くの教え子や知人が集まった。適当な言葉が見つからないが、それぞれがそれぞれの仕方先生を「愛」していたということなのだろう。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

高柳俊一教授追悼



ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世に『新カトリック大事典』第1巻を献呈する
高柳先生（1996年9月）

Transevaluation and Apocalypse

深谷 公宣

高柳先生はテオドール・アドルノについて、「19世紀的教養を持った最後の知識人」というていた。授業で何気なく聞いたそのことばは、当時アドルノを読んでいた私の耳に長く残った。先生の古希記念論集でアドルノとベケットを論じたのも、そのためである。それは、先生のアドルノ評に対する私なりの応答のつもりだった。けれども、そのことばには、若輩者の試論程度では済まない重さがあった。

重さの因由は「教養」である。大学院を出て数年後に舟川先生が勧めてくださった公募で職を得た私は、教養の問題に直面した。職場の短大は近隣総合大学との合併を控え、教員たちが基礎と専門を楔形にした新課程を「幅広い教養」と呼んで、その意義を議論していた。いきおい私も、教養について考えざるを得なくなった。最初に思い出されたのは、出身学部（上智大学比較文化学部 [当時]）の受験案内資料にあった、ウィリアム・カーリー先生（当時学部長）の巻頭言の一節、〈スペシャリストであり、かつジェネラリストであれ〉だったが、頼みの綱はほかになく、時間は無為に経過していく。そんなときに導きの糸となったのが、高柳先生の教えである。先生が関心を寄せたT・S・エリオット、ノースロップ・フライ、ジョン・ヘンリー・ニューマンらは、教養に満ちている。そこで研究の合間に、研究に関連づけて、彼らの著作をポツポツと読んでいった。とりわけ私の蒙を啓いたのは、『批評の解剖』の再読である。フライ一流のテーマティズムが教養の継承手段であるこ

とに気づくと、人文科学の危機をうたう言説はすべて一蹴してよいとの認識が芽生えた。以来、彼のいう「超越的価値判断」(transevaluation)が、私の教養観を構成する鍵語となっている。

高柳先生はまさに、超越的価値判断の人であった。そのことを実感したのは、博士前期課程入試の面接試験である。はじめに安西先生から、学部で学んできたことを問われた私は、歴史学・中国史専攻と答えた。すると安西先生は、「中国語ができるんですか」とおっしゃった。私は仏語選択だったため中国語はできないと伝えたが、ディシプリンを誠実に踏まえたその質問は、無学な私に研究のイロハを教えるものだった。いっぽう高柳先生は、私が教えを受けた中国史専攻のリンダ・グローブ先生と「一緒に仕事をしたことがある」とおっしゃった。分野の異なる両者がどのような仕事をしたのかわからなかったが、そのとき、高柳先生のディシプリンを超える視点を直観したことはたしかである。進学後、安西先生も演出家としてディシプリンを超越する存在だったことを知る。そのような教養人が居並ぶ研究機関に所属を許され、研究生活を送れたことは、このうえない幸運だった。博士課程修了論文(当時)の中間発表後に小林章夫先生が、高柳先生と安西先生がどちらも褒めていたと伝えてくださったことは、その後の研究の支えであり、誇りともなっている。

私が院に在籍した90年代後半の高柳先生は、教養の継承に一層、注力されていたのではないか。ハロルド・ブルームの*The Western Canon*、フライの*Myth and Metaphor*、ジョージ・スタイナーの*Real Presences*といった授業で使用されたテキストも、その証左であるかにみえる。ポストモダニズムの喧騒が沈静化しても、なお残り火のような言説が散見された時期、先生はそうした思想や言説とは距離をおくテキストを選んでくださっていた。もっとも私自身、彼らの著作がまとう保守的な雰囲気への距離をはかりかねていたことも事実である。その点、私より後に入学された金子洋一さんが『サウンディングズ・ニューズレター』(第52号、2005年)に寄稿した諷刺的エッセイ「文学研究の終焉」は、高みからその距離を明示している点で先生の批評スタンスを含んでおり、師弟間の教養の継承を示す貴重な記録となっている。先生の注力は最後の世代の弟子に伝わっていたのである。

こうしたことを冷静に振り返ることができるようになったいま、当時の授業ノートを見て気づくことがある。*The Western Canon*のダンテの章に關す

る先生の講義（以下、ダンテ回）が、他の講義よりも熱を帯びてみえることである。

・ベアトリーチェは gratia (grace= 恩恵) の figure だとか、その背後に typology があるのだとかいう考え方はブルームはうけつけない。ダンテは書き始めるときそういったことを考えていたかもしれないが、それを超えてしまう。(Dante breaks through all limitations…p.74) ベアトリーチェはフィクションのなかで非常に実在的になる

ベアトリーチェを天上から地上へひき下ろしてくる… 幻想のなかでの出会い。← フロイト

←ベアトリーチェは実在した人物と考えるふしがブルームにはある。

(1996年6月25日のノート)

ダンテ回は4週にわたっておこなわれた。シェイクスピアに関する章についても同じ週数、講義がなされているが、ダンテ回の充実ぶりは際立っている。引用は、ベアトリーチェを gratia の figure と捉えるチャールズ・ウィリアムズやC・S・ルイス、オーデン、トールキンらにブルームが否定的な立場をとっていることについて、先生が解説した際のメモである。メモの後には「中世の神学的宇宙論」として、ボナヴェントゥーラ、トマス・アクィナス、フィオーレのヨアキムを中心とする思想的立場の関係図が記されている。さらに、ウェルギリウス、アウグスティヌス、ミルトン、エリオット、クルティウス、フライ、サンタヤナといった、テキストにまつわる知識人への言及がある。このような充実した解説やコメンタリーが、熱を感じさせるのだろう。

その熱を強めているのが、先生の黙示世界への関心である。「The Comedy is an apocalyptic poem: ここで apocalyptic は何かを啓示するという意味で使われている。(← change of meaning) 政治思想的には apocalyptic かもしれない」(1996年7月16日のノート)。思い出すのは、*The Western Canon* についてのレポートで私が使った「黙示論的」ということばの「論」の字が、返却後に赤のスラッシュで消されていたことである。なぜ「論」の字を書い

たのか自分でもわからないが、その修正は、黙示は理論ではないとの指摘であると同時に、先生自身の黙示世界へのこだわりを示している。このこだわりを踏まえると、ダンテ回が熱を帯びているのもうなずける。ブルームはベアトリーチェを、「キリスト教と関係なく、グノーシス主義的にけがれた体を抜け出して一気に天国へかけ昇った」と捉える。これに対し先生は、ユダヤ教的なグノーシス主義という特異な立場にあるブルームのベアトリーチェ解釈はキリスト教理解に欠けているとの見解を示す（1996年7月9日のノート）。すなわち、ダンテにおける黙示世界はグノーシス的な知（knowing）やユリシーズ風の旅（voyage）といったプロセスの最終地点ではなく、あくまで神のつくる普遍的で静的な世界だとの認識である。この認識は、後者のような疎外なき黙示世界に先生自身が強く惹かれていたことを示唆するのではないか。さらに先生によるブルーム評をアウエルバッハ『世俗詩人ダンテ』の見解に重ねてみれば、上智の英文学専攻で彼の『ミメシス』が重要な教材のひとつとして一教養として一継承されてきたことの意義にも、思いが及ぶ。「愛のポエジーにおけるキリスト教的なモチーフは、すでに中世恋愛詩に含まれているが、地上での受苦と聖女には欠かせない遁世という特徴は見当らないように思われる。そして教訓的要素、秘密の真理の開示は、混合主義的、後期古代的であるが、本来はキリスト教のものではない。だが、ダンテの創造したベアトリーチェの新しさは、彼を一方でトゥルバドゥールのドンナから、他方で古代の神話や後期古代のアレゴリーから区別しているところ、つまり卓れてキリスト教的な要素、恋愛詩に含まれていた聖女崇拜という拠りどころよりもはるかに深くキリスト教的なものにほかならない」（アウエルバッハ『世俗詩人ダンテ』小竹澄栄訳、みすず書房）。

先生は『ユートピア学事始め』でエルンスト・ブロッホの『希望の原理』に触れ、「私の世界観は彼のものと正反対」だとしながらも、その魅力に取り憑かれてしまったことを告白している。魅力—そしておそらく希望—の源は、ブロッホの黙示的世界観である。こうした評価のしかたにも、先生の超越的価値判断は遺憾なく発揮されている。もしかすると先生は、誰もみたことのない黙示世界に、生前、すでに存在していたのではないか？ 「19世紀的教養を持った最後の知識人」になぞらえて、私は先生を「黙示世界に現れた最初の教養人」と呼んでみる。私自身、『希望の原理』でブロッホがロシアの民族舞踊のみを評価するくだりなどに、イデオロギー的な偏りをみるが、この

深谷 公宣

書物を読んだときの興奮を思い返すと、先生が抱いた魅力や希望にはおおいに共感できる。とはいえ、下世話な主題で断片的な試論ばかり書いている自分を、黙示世界の教養人たる先生と同じ地平に位置づけることはできない。この感覚が、のしかかる重さの所以でもある。不肖の弟子は、『ゴドー』よろしく此岸で足踏みを続けるしかない。けれども、その足踏みが師の教養の翻訳＝裏切りとなるなら、垂らしていただいた糸を切らさぬようにはしたいと思う。そしてそのことをもってささやかな弔いとするを、お許しいただけたらと願っている。

Soundings

A CRITICAL REVIEW ANNUALLY PUBLISHED
BY SOUNDINGS ENGLISH LITERARY ASSOCIATION

Number 49

October 2023

In Memory of Professor Emeritus Shunichi Takayanagi

CONTENTS

【Special Article】

David Jones's *The Anathemata*: the Quintessence of Catholic Literature
..... Keiji Notani 5

【Articles】

The Image of the Hall in Heaven in Old English Vernacular Verse
..... Mariko Takayama 31

Word Order of Relative Clauses in the Continuations:

A Complementary Study to Bruce Mitchell's "Syntax and Word-Order
in *The Peterborough Chronicle* 1122-1154."
..... Daisuke Miyabayashi 51

Repeated *Mrs. Dalloway*: *The Hours* and Philip Glass's Minimalist
Soundtrack Ryunosuke Komuro 73

【Book Review】

Funakawa, Kazuhiko. *Walter Pater's Greek Studies*.
..... Akihiro Machimoto 95

【Memorial Statements】

Foreword Yuki Shimonaga 109

Eulogy Kazuhiko Funakawa 113

Rather a Reserved Relationship Tetsu Fujii 115

In Memory of Late Prof. Takayanagi Osamu Nakayama 118

| | | |
|---|--------------------|-----|
| The Portrait of a Transnational Intellectual: Somewhere between Professor Mathy and Professor Takayanagi | Takayuki Tatsumi | 120 |
| To the Rev. Fr. Dr. Shun'ichi Takayanagi, SJ | Keiji Notani | 125 |
| Professor Takayanagi and Puritan Studies | Shitsuyo Masui | 130 |
| Remembering My Mentor, Dr. Takayanagi Shunichi-Sensei | Tomoyuki Iino | 133 |
| T. S. Eliot and Mr. Shunichi Takayanagi | Toru Sato | 136 |
| I am a Crocodile: Memory of Takayanagi, SJ | Hisao Ishizuka | 139 |
| Repaying Takayanagi-Sensei | Megumi Kato | 142 |
| "I am happy." | Masaya Shimokusu | 149 |
| Prof. Takayanagi and "Love, Charity" | Kazuhiko Yamaguchi | 152 |
| Transevaluation and Apocalypse | Kiminori Fukaya | 156 |



サウンディングズ英語英米文学会
第45回総会・第75回大会プログラム

日時：2023年5月13日（土） 受付開始：13:50～

会場：上智大学四谷キャンパス図書館 L-821

（懇親会は13号館）

アクセス：JR中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線

「四ツ谷」駅 麴町口・赤坂口より徒歩5分

●第45回総会

| | |
|-------------------------|-----|
| 14:10～14:30 L-821 教室 | 総 会 |
|-------------------------|-----|

●第75回大会

研究発表

| | |
|-------------------------|---|
| 14:40～15:20 L-821 教室 | 『冬物語』の宮廷上演と三十年戦争 田村真弓（大東文化大学） 司会：石塚倫子（東京家政大学） |
|-------------------------|---|

講 演

| | |
|-------------------------|--|
| 15:30～17:15 L-821 教室 | ウォルター・ペイターのギリシア彫刻論 —彫刻は倫理的観念の伝達者たりうるか 舟川一彦（上智大学名誉教授） 司会：西能史（上智大学） |
|-------------------------|--|

●大会会場となる図書館に入るために、大会プログラムが必要です。当日は、本プログラムを図書館入口で提示し、入館してください。

●総会・大会に先立って、12時40分より役員会を開催いたします（L-822）。役員および事務局員はご出席ください。

●大会終了後、懇親会を開催しますので、是非ご参加ください。

17:30～19:00 会場：13号館3階 13-304号室
会費：5,000円（学生会員2,000円）

懇親会の席上にて第41回刈田賞・第40回ロゲンドルフ賞授与が行われます。

研究発表要旨

『冬物語』の宮廷上演と三十年戦争

田村真弓（大東文化大学）

司会：石塚倫子（東京家政大学）

ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の『冬物語』（*The Winter's Tale*, 1611）は、1611年11月5日の宮廷上演を皮切りに、1642年の清教徒革命による劇場閉鎖までに、宮廷で5度上演されている。その他の劇の上演は、通常1、2回であったことを考慮すると、『冬物語』の宮廷上演の回数は、極めて多いと言わざるを得ない。本発表では、『冬物語』の5度の宮廷上演のうち、1618年、1624年、1634年の上演に注目し、これらの上演を、宮廷もしくは公衆劇場で同時期に上演された劇や仮面劇と共に、歴史的・政治的背景から分析することで、その意義を探りたい。加えて、1612年から1613年にかけての『冬物語』の上演が、ジェームズ王の息女エリザベス・ステュアート（Elizabeth Stuart, 1596-1662）とプファルツ選帝侯フリードリヒ五世の祝婚の余興の一つであったことから、エリザベスと『冬物語』の宮廷上演の関係性を考察したい。

講演

ウォルター・ペイターのギリシア彫刻論
——彫刻は倫理的観念の伝達者たりうるか

舟川一彦（上智大学名誉教授）
司会：西能史（上智大学）

死後出版されたペイターの『ギリシア研究』（*Greek Studies*, 1895）の後半部をなすのは、ギリシア彫刻に関するエッセイ 4 篇である。この一連の論考の中で彼が、同書前半の神話論のテーマをどのように発展させたかを考える。

ペイターは初期のエッセイ「ヴィンケルマン」（1867）で、ヘーゲルの美術史理論に依拠して、彫刻を古代ギリシア人の精神に適合した「古典的藝術」と特徴づけていた。それはつまり、キリスト教以後および近代の人間の内面や精神を表現するには不適合という意味だった。ところが 1870 年代中頃のギリシア神話論において、ペイターは人間の内面と倫理性の表現という重い役割を彫刻に与え、ギリシア彫刻がその任務を実際に果たしたと主張するようになる。その動機は、ギリシア彫刻に題材を提供するギリシア宗教と、キリスト教および近代の精神との近似性と連続性を立証したいという願望にあった。

1880 年前後に書かれ、『ギリシア研究』後半に収められた彫刻論でペイターが果たしてそれを立証しえたのか、もし立証できなかつたとすれば、彼がどのような形で自らの理論の欠落点を埋め合わせようとしたのかを観察する。

サウンディングズ英語英米文学会 規約

1. 名称 本会は「サウンディングズ英語英米文学会」と称する。
 2. 会員 本会は上智大学大学院卒業生有志を母体とし、広く一般に英語・英米文学・並びに英語教育を研究する者を会員とする。
 2. 本会に賛助会員を置くことができる。
 3. 本会に10年以上所属し、年齢が70を越えた会員は、特別会員とする。
 3. 目的 本会は会員の英語英米文学及びその関連分野に関する研究、会員相互の交流ならびに親睦を目的とする。
 4. 事業 本会は次の事業を行うものとする。
 1. 毎年、研究発表会を開催する。
 2. 会誌 *Soundings* を年1回発行する。
 3. 会報 *Soundings Newsletter* を発行する。
 4. 役員会が必要と認めたその他の事業。
 5. 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとし、年1回春の総会において会計報告をするものとする。
 2. 会費は一般会員6,000円、学生会員4,000円、賛助会員10,000円とし、特別会員は本人の申請により会費を免除とする。
 3. 年会費を3年以上未納の会員は退会とする。
 6. 役員 本会は次の役員を置き、役員会を構成するものとする。
 1. 会長1名、副会長2名、事務局次長1名、評議員約30名、監事若干名。
 2. 役員の任期はそれぞれ2年とし、再任を妨げない。
 3. 役員は前記役員会の推薦を経て、総会の承認により決定する。
 4. 役員会は会長の召集により開催し、本会の運営に関する事項を審議し決定する。
 5. 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
 6. 副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時は会長の職務を代行する。
 7. 事務局次長は会務を執行する。
 8. 評議員は本会の運営を推進する。
 9. 監事は本会の財政ならびに事業執行状況を監査する。
 7. 委員 本会は会務を円滑に遂行するために次の委員を置くものとする。
 1. 事務局員若干名、*Soundings* 編集委員若干名、*Soundings Newsletter* 編集委員若干名、コンピュータ委員若干名。
 8. 名誉会長 本会に名誉会長を置くことができる。
 9. 顧問 本会に顧問を置くことができる。
 10. 所在 本会の所在地は事務局に置く。
- 付則 本規約は昭和54年9月22日より施行する。
 2. 本規約の改正は総会の決議に基づいて行うものとする。
- (昭和57年4月24日改正) (昭和58年4月23日改正)
(昭和59年4月29日改正) (昭和62年5月22日改正)
(平成5年5月14日改正) (平成8年5月11日改正)
(平成10年5月13日改正) (平成12年5月13日改正)
(平成14年5月11日改正) (平成17年5月14日改正)
(平成22年10月2日改正) (平成26年5月10日改正)

刈田賞・ロゲンドルフ賞運営内規

1. 目的 両賞は本会会員の学術研究の奨励を目的とする。
2. 基金 故刈田元司名誉会長の寄付による 80 万円及び故菅野一日本大学顧問（故ロゲンドルフ師友人）その他による寄付 30 万円、計 110 万円とする。
3. 賞金 両賞の賞金はそれぞれ 3 万円とする。
4. 対象論文 会誌 *Soundings* に掲載された優秀論文 2 編を受賞の対象とする。
 2. 但し、上記 2 編のうち 1 編を刈田賞（主としてアメリカ文学）とし他の 1 編をロゲンドルフ賞（主として英文学、英語学）とする。
5. 審査・決定 受賞論文の審査は、会長が、以下に定める推薦委員の投票に基づいて行い、受賞論文を決定する。
6. 発表 本会総会において前年度会誌掲載の受賞論文を発表する。
7. 推薦委員 推薦委員は評議員、編集委員ならびに査読者とする。
 2. 推薦委員は、投票によって優秀論文を推薦する。
 3. 推薦委員による投票は、事務局において集計し、会長に報告する。
8. 佳作 上記審査において、受賞該当論文がない場合には、各賞に準ずる論文 2 編ずつを佳作とし、それぞれに賞金 1 万円を贈呈する。
- 付 則 本内規の改正は役員会の議決により行なうものとする。
 2. 本内規は昭和 58 年 5 月 7 日より施行する。
 3. 昭和 59 年 5 月 16 日改正
 4. 昭和 61 年 3 月 3 日改正
 5. 平成 10 年 3 月 13 日改正
 6. 平成 11 年 3 月 6 日改正
 7. 平成 12 年 9 月 22 日改正
 8. 平成 28 年 5 月 14 日改正

Soundings 第 50 号原稿募集

会誌 *Soundings* 第 50 号は 2024 年 12 月に刊行の予定です。投稿ご希望の方は 2024 年 6 月末日までに事務局へ原稿をお送りください。

なお、投稿規定の一部が改正されましたので、ご投稿の際にはご注意ください。

投稿規定

- (1) 原稿の種別は以下の通り。原稿に種別を明記すること。
 - ・論文
 - ・書籍紹介
 - ・研究ノート（研究途上にあり論文の段階に至らないもの）(2) 投稿論文・書籍紹介・研究ノートは未発表のものであること。ただし、すでに口頭発表したものも可とするが、その旨明記すること。
- 原稿の書式および分量は、以下の通りとする。
 - ・余白：上下左右 25mm
 - ・字数・行数：全角 34 字（半角 68 字）× 32 行
 - ・フォント：12 ポイント、MS 明朝（日本語）・Century（英語）
 - ・本文から分離した引用文：左端から全角 4 字（半角 8 字）インデント
 - ・尾注・参考文献：各項目以降を左端から全角 2 字（半角 4 字）インデント
 - (2) 論文の長さは、和文の場合、横書で 16,000 字程度、英文の場合は 20 枚程度とする。書籍紹介・研究ノートの長さは、論文の半分程度を目安とする。
- 論文原稿には氏名を記載せず、Word ファイルおよびそれと同一内容の PDF ファイルで事務局に提出すること。
- 書式上の注意。
 - ・和文論文には英文タイトルをつけ、執筆者名の英文表記もあわせて記す。
 - ・注は原稿の末尾にまとめる。
 - ・英米の人名、書名等は初出の箇所では原名を示す。
 - ・引用文献書式の例。
 - ア. 欧文の場合は *MLA Handbook* 最新版に従う。
 - イ. 和文の場合は欧文の場合に準じる。
- 論文と研究ノートの採否は、当該分野の研究者による査読に基づいて編集長が決定する。
- 校正は執筆者が行い、初校のみとするが、訂正加筆は植字上の誤りのみとする。
- イタリック体その他、特に希望がある場合は、原稿に指定する。
- 論文・書籍紹介・研究ノート等の執筆者には、会誌を 10 冊献呈する。
- 事務局からの受領メールが届かないときには、再度連絡すること。
- 本会誌のインターネット上での公開権は本会に帰属する。

著作権および掲載論文の公開について

1. 本学会誌『SOUNDINGS』に掲載される論文（書評等を含む、以下同）について、本会は以下の方針を適用する。この方針は第 43 号掲載分以降に対して適用する。
2. 本誌掲載論文の著作権は各論文の執筆者に帰属する。
3. ただし、本誌掲載後に当該論文を別の形で再公表するためには、以下の条件を満たさなければならない。
 - (a) 掲載号発刊後 12 箇月が経過するまでは、本誌掲載論文をインターネット上や著書の中などいかなる形でも再公表することはできない。
 - (b) 12 箇月経過後、執筆者個人が本誌掲載論文をインターネット上に公開または著書等に転載する場合は、事前に本会事務局に通知した上で、初出誌である本誌の号および掲載頁を表示しなければならない。

(平成 29 年 5 月 13 日総会にて承認)

金子洋一記念基金運用規定

本基金は、2007年9月に死去した会員の金子洋一氏の功績を偲び、ご遺族から本会に寄付された50万円を基金として、これを会の発展のために利用しつつ、金子氏の遺徳を顕彰するものである。

- 1 基金をもとに、本会の会員が複数で執筆、出版する学術書に1件10万円を限度として補助することとする。
- 2 1の趣旨に基づいて出版する書物は、サウンディングズ英語英米文学会編集とする。
- 3 本趣旨に基づき出版を希望する会員は、代表者名で役員会に企画趣旨、計画などを提出する。
- 4 提出された企画は、役員会において速やかに検討し、その可否を決定する。
- 5 1の補助金は年に1件に限り、複数の企画が提出された場合には、役員会で1件を決定する。
- 6 その他詳細は役員会が定める。

付則

本規定は2009年4月1日から有効とする。

サウンディングズ英語英米文学会会計報告 2022年度（2022年4月1日～2023年3月31日）

| | | | |
|-------------|------------------|-------------|------------------|
| 総収入額 | 622,390 | 次年度繰越金内訳 | |
| 総支出額 | 862,981 | みずほ銀行普通預金 | 1,606,131 |
| 次年度繰越金 | 4,609,328 | みずほ銀行定期預金 | 2,174,826 |
| | | ゆうちょ銀行通常貯金 | 353,348 |
| | | 郵便振替 | 443,660 |
| | | 現金 | 31,363 |
| | | 合計 | 4,609,328 |
| 収入の部 | | 支出の部 | |
| 会費 | 476,000 | 会誌 48号印刷費 | 555,610 |
| 賛助会員会費 | 60,000 | ニューズレター印刷費 | 42,779 |
| 会誌 48号広告料 | 75,000 | その他の印刷費 | 54,635 |
| ワークショップ参加費 | 2,000 | 封入セット作業 | 22,678 |
| 寄附金 | 9,339 | 通信費 | 85,121 |
| 利息 | 51 | 事務用品費 | 5,742 |
| | | 謝礼 | 70,000 |
| | | ウェブページ管理費 | 23,760 |
| | | 雑費 | 2,656 |
| 収入合計額 | 622,390 | 支出合計額 | 862,981 |
| 前年度からの繰越金 | 4,849,919 | 次年度繰越金 | 4,609,328 |
| 合計 | 5,472,309 | 合計 | 5,472,309 |

備考1：刈田賞基金とロゲンドルフ賞基金はみずほ銀行定期預金で管理している。刈田賞基金は945,920円、ロゲンドルフ賞基金は361,310円を新元金としている。

備考2：金子洋一記念基金はゆうちょ銀行通常貯金を専用口座として管理している。

備考3：寄附金は『書齋の外のシェイクスピア』（金星堂）の印税であり、金子洋一記念基金に対するご寄附である。

上記のとおり相違ありません。

2023年4月1日

会計
浦口理麻（印）
中村美帆子（印）

監事
石塚倫子（印）
岩政伸治（印）
相原直美（印）

サウンディングズ英語英米文学会役員・委員

名誉会長 徳永守儀
顧問 小野 昌 巽 孝之 舟川一彦

2023 年度役員

| | | | | | | |
|---------|-------|-------|------|------|------|--|
| 会 長 | 日臺晴子 | | | | | |
| 副 会 長 | 杉木良明 | 深谷公宣 | | | | |
| 事 務 局 長 | 大野美砂 | | | | | |
| 事務局次長 | 平塚博子 | | | | | |
| 会 計 | 中村美帆子 | 三原里美 | | | | |
| 監 事 | 相原直美 | 石塚倫子 | 岩政伸治 | | | |
| 評 議 員 | 相原優子 | 青山義孝 | 網代 敦 | 大塚寿郎 | 織田哲司 | |
| | 神定修一 | 河口英治 | 越 朋彦 | 近藤裕子 | 下楠昌哉 | |
| | 下永裕基 | 杉野健太郎 | 鈴木五郎 | 田村真弓 | 土井良子 | |
| | 榎木伸明 | 外岡尚美 | 中島 涉 | 西 能史 | 林 直生 | |
| | 福田 逸 | 宮脇俊文 | 山口和彦 | | | |

2023 年度委員

事務局員
(書記) 田村真弓 西 能史 米田ローレンス正和

会誌編集委員会

(編集長) 杉野健太郎

(委員) 石塚久郎 下永裕基 丸山 修

*上記委員以外に、編集長の依頼により査読を行うものが編集委員会に加わる

会報編集委員

(編集長) 杉藤久志

コンピュータ委員

岩政伸治 田辺 章

編集後記

編集長の杉野健太郎と申します。今年度は、3編の投稿論文があり、最終的に3編すべての掲載とあいなりました。投稿者のみなさま、審査の労をおとりいただいたみなさま、ありがとうございます。また、野谷啓二氏による懲憑論文ならびに町本亮大氏による舟川一彦氏のペイターに関するご著書紹介が掲載されております。おすすめに応じていただいた野谷先生、町本先生、ありがとうございます。

今号は、2022年7月28日に他界された本会元顧問、高柳俊一上智大学名誉教授の追悼号であり、追悼特集が掲載されております。みなさま、ご執筆ありがとうございました。高柳先生は、英文学者および神学者として、上智大学文学部英文学科を長年にわたって支えられました。刈田元司先生、渡部昇一先生をはじめとする諸先生方とともに、上智英文学科卒業生の模範であったと思います。私個人も、上智の卒業生は学界でトップクラスの仕事ができるのだという模範でどれほど励まされてきたかわかりません。残されたわれわれができることは、学問に邁進し、本会を充実した会にしていくことです。様々な仕事をお抱えでお忙しいと思いますが、みなさま、本会および本会誌にご協力お願い申し上げます。また、本号が刊行できますのも、役員、事務局および会員のみなさまのご尽力の賜物です。かえすがえす御礼申し上げます。

(K. S.)



ウォルター・ペイターのギリシア研究

舟川一彦 著

古代ギリシアの哲学、宗教、美術をめぐるペイターの著作は、19世紀の文化・思想状況に対する反応でもある。教会や大学の状況、出版界と読書界の変化、知識人間のコネクション等を文脈として彼の古典研究の同時代的意味を探る。

¥2,500 (税込 ¥2,750) A5判 上製 174 pp. ISBN978-4-7647-1225-6



ラルフ・ウォルド・エマソンと奴隷制廃止主義

小倉いずみ 著

本書は、自己信頼を主唱したエマソンが、人生の中でどのように奴隷制廃止運動にかかわったかを探究し、彼の思想の普遍性を分析するものである。彼が果たした役割は、21世紀の分断するアメリカ社会で再評価されており、本書により日本におけるエマソン研究にも、新たな光が投げかけられることであろう。

¥6,000 (税込 ¥6,600) A5判 上製 463 pp. ISBN978-4-7647-1226-3

完訳エミリ・ディキンソン詩集 第2版 (フランクリン版)

新倉俊一 監訳

東雄一郎 / 小泉由美子 / 江田孝臣 / 朝比奈緑 訳

本書は、原作に忠実なジョンソン版に改訂を加えた、新たな定本フランクリン版に準拠した、完訳エミリ・ディキンソン詩集の第2版である。

¥5,000 (税込 ¥5,500) A5判 上製 560 pp. ISBN978-4-7647-1227-0

マーガレット・フラー 近代への扉—ジェンダー、階級そして人種

上野和子 著

アメリカ初の女性ジャーナリスト、フラーの伝記。著作『五大湖の夏 1943年』『19世紀の女性』のジェンダー論、欧州絵画や歌劇、アメリカ彫刻家の隆盛、新産業都市の疲弊、パリ2月革命の社会主義者や革命家マッツィーニ、ガリバルディの活躍を、フラーの視点から近代の幕開けとして読み解く。

¥3,000 (税込 ¥3,300) A5判 上製 372 pp. ISBN978-4-7647-1221-8

研究書出版は弊社までご相談ください



株式会社 金星堂

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21

TEL 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716

e-mail: text@kinsei-do.co.jp



S SEIBIDO 2024 年新刊のご案内

| | |
|---|------------------------|
| ◆ Global Gate Basic | [映像付きコースブック] ¥2,700 |
| ◆ Global Gate Intermediate | [映像付きコースブック] ¥2,700 |
| ◆ Global Gate Upper-intermediate | [映像付きコースブック] ¥2,700 |
| ◆ Global Perspectives Reading & Writing Book 1 | [リーディング・ライティング] ¥2,500 |
| ◆ Global Perspectives Reading & Writing Book 2 | [リーディング・ライティング] ¥2,500 |
| ◆ Active Reading Strategies Book 1 | [リーディングスキル] ¥2,500 |
| ◆ Science Inspirations | [総合教材・科学] ¥2,000 |
| ◆ AFP World News Report 7 | [オンライン映像教材] ¥2,600 |
| ◆ Meet the World 2024 -English through Newspapers- | [時事英語] ¥2,100 |
| ◆ AN AMAZING AVENUE FOR THE TOEIC® L&R TEST 400 | [TOEIC 総合] ¥2,500 |
| ◆ A COMMUNICATIVE APPROACH TO THE TOEIC® L&R TEST Book 3: Advanced | [TOEIC 総合] ¥2,300 |
| ◆ Tell Your Story! -Using Transition Words in English Writing- | [ライティング] ¥2,000 |
| ◆ Grand Tour -New Discoveries | [リーディング・社会問題] ¥2,000 |
| ◆ 小学校英語科教育法 -理論と実践- 【改訂版】- | [小学校英語] ¥2,800 |

株式会社 成美堂

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490

URL <https://www.seibido.co.jp> / e-mail: seibido@seibido.co.jp

審査用見本デジタル版 閲覧サービスのご案内

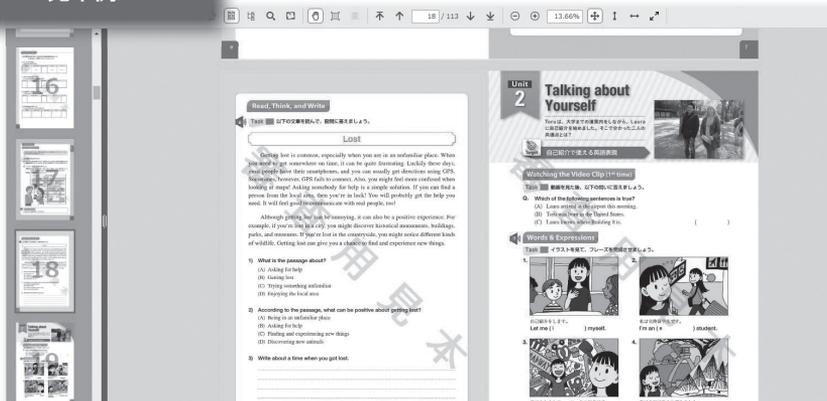
朝日出版社では、従来どおり紙媒体での教科書見本に加えて、新たに「審査用見本デジタル版」閲覧サービスを開始いたしました。教科書をご審査いただくにあたって、時間と場所にとらわれず、さまざまな教科書の見本をご覧いただけるようになります。是非ともご活用ください。

「審査用見本デジタル版」を閲覧いただくには、IDとパスワードでのログインが必要となります。ご登録用IDとパスワードの発行をご希望の際は、下記サイトよりご登録のお手続きをお願いいたします。

<https://text.asahipress.com/special/publulite/>



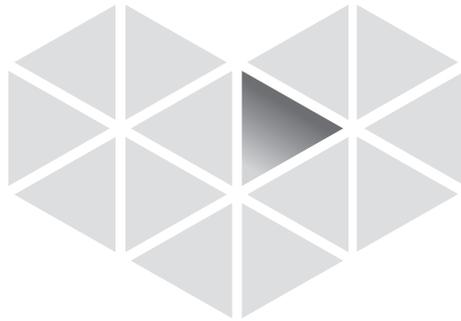
審査用見本デジタル版 見本例



お問い合わせは以下の朝日出版社英語テキスト課へお願いいたします。

朝日出版社英語テキスト課：text-e@asahipress.com

コミュニケーションをカタチにします



コミュニケーションの良し悪しは、ビジネスに大きく影響します。
お客さまの想いや情報を、いかに心地よく、効果的に伝えるか——。
プリントボーイはお客さまとエンドユーザーとの間に、より良い
コミュニケーションを実現できるよう企画力、デザイン力を駆使し、
印刷物・ディスプレイ・IT技術等さまざまなツールやサービスを
用いて、コミュニケーションを最適なカタチにいたします。

<https://www.printboy.co.jp/>

株式会社プリントボーイ

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6-24-13 TEL.03-3309-1861 FAX.03-3309-1160

SOUNDINGS ENGLISH LITERARY ASSOCIATION
ESTABLISHED IN 1969

OFFICE: c/o Misa Ono, School of Marine Life Science,
Tokyo University of Marine Science and Technology
Konan 4-5-7, Minato-ku, Tokyo 108-8477, JAPAN

TEL: +81-3-5463-0649 FAX: +81-3-5463-0649 Email: soundings1969@gmail.com

HONORARY PRESIDENT

Moriyoshi Tokunaga

PRESIDENT

Haruko Hidai

VICE-PRESIDENTS

Kiminori Fukaya

Yoshiaki Sugiki

SECRETARY

Misa Ono

VICE-SECRETARY

Hiroko Hiratsuka

TREASURERS

Mihoko Nakamura

Satomi Mihara

ADVISORS

Kazuhiko Funakawa

Takayuki Tatsumi

Masaru Ono

AUDITORS

Naomi Aihara

Shinji Iwamasa

Noriko Ishizuka

BOARD OF DIRECTORS

Yuko Aihara

Ryoko Doi

Shuichi Kamisada

Tomohiko Koshi

Takashi Nishi

Masaya Shimokusu

Goro Suzuki

Naomi Tonooka

Atsushi Ajiro

Hayaru Fukuda

Eiji Kawaguchi

Toshifumi Miyawaki

Tetsuji Oda

Yuki Shimonaga

Mayumi Tamura

Kazuhiko Yamaguchi

Yoshitaka Aoyama

Nao Hayashi

Hiroko Kondo

Wataru Nakajima

Juro Otsuka

Kentaro Sugino

Nobuaki Tochigi

[会費振込銀行①] みずほ銀行 新宿西口支店 (店番 353)
普通預金 1293400 サウンディングズ英語英米文学会
[会費振込銀行②] ゆうちょ銀行 〇一九店 (店番 019)
当座口座 0176856 サウンディングズ英語英米文学会
[郵便振替] 00170-3-176856

SOUNDINGS 第49号

2023年10月28日発行

発行所 サウンディングズ英語英米文学会

事務局〒108-8477 東京都港区港南4丁目5-7

東京海洋大学品川キャンパス5号館204室

大野美砂研究室内

電話 03-5463-0649 FAX 03-5463-0649

E-mail: soundings1969@gmail.com

ホームページ <http://soundings.lekumo.biz/>

代表者 日臺晴子

編集委員 杉野健太郎 (編集長) 網代敦 石塚久郎 織田哲司

加藤めぐみ 下永裕基 丸山修

印刷所 (株)プリントボーイ 〒157-0062 東京都世田谷区南鳥山 6-24-13

電話 03-3309-0230 FAX 03-3309-1160

SOUNDINGS ENGLISH LITERARY ASSOCIATION